

昭和30年9月17日日本国有鉄道特別掛承認第3203号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓 第5巻第11号・昭和35年10月15日発行(毎月1回1日発行)
昭和35年9月2日国鉄東局増刊号承認第665号

裏窓

妖奇絵物語特集

十月増刊号

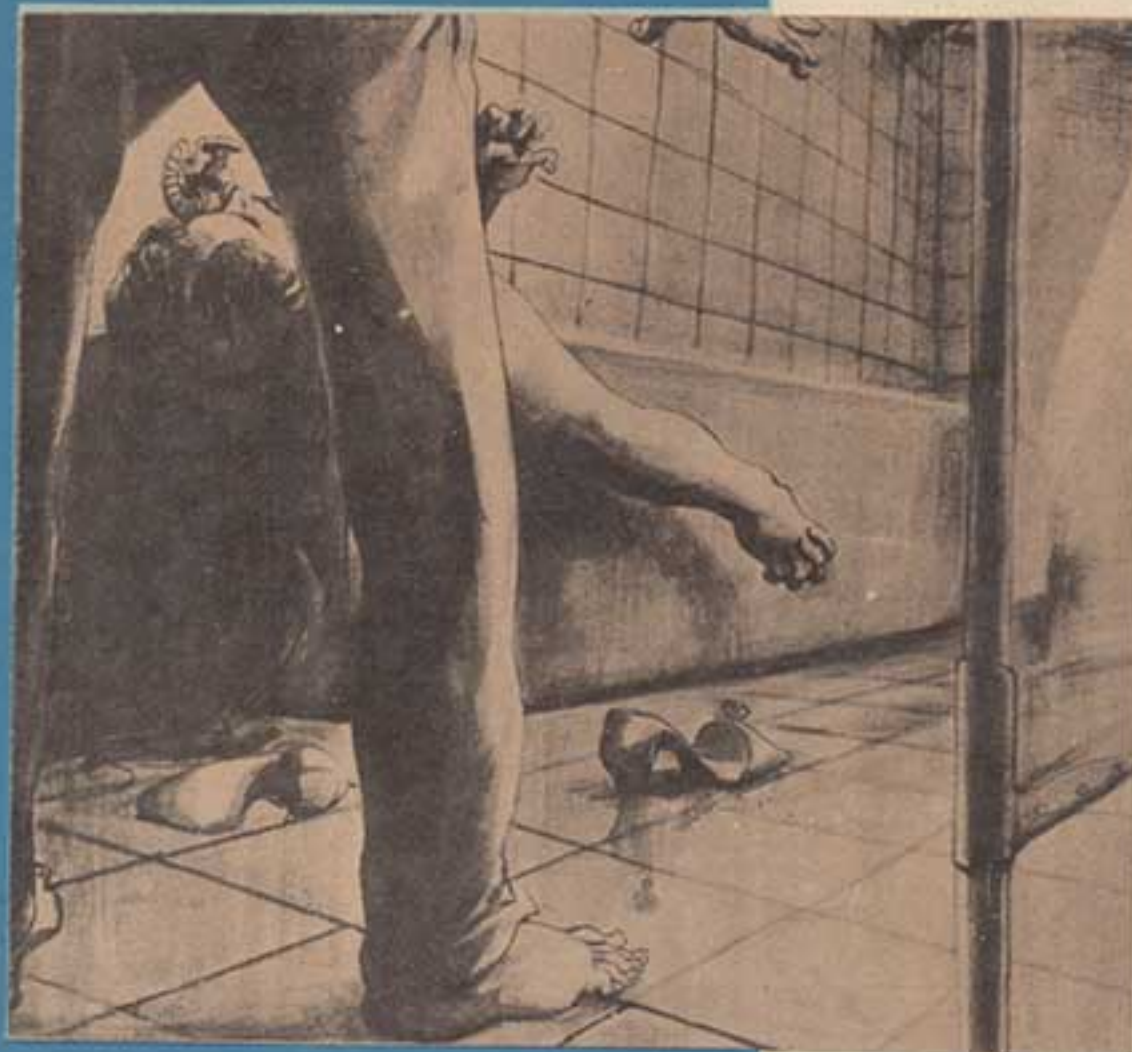
裏

窓

妖奇絵物語特集

十月増刊号

昭和30年9月17日日本国有鉄道特別掛承認第3203号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓 第5巻第11号・昭和35年10月15日発行(毎月1回1日発行)
昭和35年9月2日国鉄東局増刊号承認第665号



定価90円
IBM 1808

◎ どれを見てもしびれるような傑作です。
◎ まだこの他に多数の出版物があります。
◎ 内容見本を送れとハガキで申し込んで下さい。

異色官能 **地獄の乳房** 飯田豊吉・著
サスペンス 喜多玲子・装幀

謎の黄色いトランクをめぐって東京暗黒街にくりひろげられる凄惨な死闘と執拗な復讐地獄！息もつかせぬ迫力興味篇！
¥. 250
〒. 40

続・隠密 忍び夜秘帖 島本春雄・著
読書 喜多玲子・装幀

大江戸の夜に咲く逢魔の花！大名屋敷、旗本屋敷、そしてまた分限者の夜の闇を探究する影のような公儀隠密鳴子善四郎！
¥. 260
〒. 40

異色時代巷談 **女犯経秘図** 高月大三・著
喜多玲子・装幀

酒池肉林の好色寺の地下部屋に捕われた女隠密！素っ裸の木馬責めに果して耐え得るか？お小夜嵐、穴蔵菩薩も収録！
¥. 250
〒. 40

エロチック **甘美な謎** 矢野 徹・著
サイエンス 笠井 一・装幀

ふくよかな肌の香りは超次元の世界にたどり着く、はてしなく広がる非情の科学に機械化された細胞は如何に悶えるのか？
¥. 250
〒. 40

耽 奇 **妖しい花粉** 狩 久・著
サスペンス 古正英生・装幀

白く重さを秘めてゆれる乳房、慄える太腿……性の真実を求めて蠢めく人々の姿を捉えた異色ミステリー！！
¥. 230
〒. 40

エロチック **あやかしの夜** 岡田鯨彦・著
ミステリー 笠井 一・装幀

ねっとりとした夜にほの白くとけこんでゆくような羞恥の構図、人間喜劇の断面を特異な筆で描き出した異色作
¥. 260
〒. 40

東京都中野区江古田 1 の 2302 (振替口座・東京) 株式会社 あまとりあ社
10756 久保書店宛

◎ 現金書留か小為替、又は振替で御送金下さい。
◎ スグにお申込みの本をお送り致します。
◎ 御希望の書籍名はハッキリお書き下さい。

夜のひととき………？



フト、あなたは 不安で眠れなくなる!!

そうです、あなたは全部を知っている訳ではない。だから不安なのです。そんなときには………

精神分析による女性の相談解決事例集
高橋 鐵・著 せつくす・かうんせりんぐ
B 6 美装判 332頁・価 320円・送40円
東京都中野区江古田 1 あまとりあ社刊

結婚生活★べっどるうむ・えちけっと

幻灯器で始まる吊し籠の子
腰際地帯のお破いは羽簾で
叩けば開く、額の接吻から
愛の不意打ちに女体はくねる
掘炬燵の素晴らしい利用法
僕のハーブ演奏法で一度に燃える
アレグロのリズムで私は指揮者
月に濡れて高まる情感
深夜放送を伴奏の愛撫
唇は柔肌の官能に点火する
腕と掌と肘で奥様をKO
椅子一つで奴隷にも暴君にも
即席寝具を勤める座蒲団
たまには奥さまにリードさせ
奥さまよ酔覚めの水と愛撫の手を
疲弱な方は量より質
奥さまよ寝化粧は全身に
奥さまの独り寝は隣を握って
妻よお昼寝をどうぞ
食卓に強精食をお忘れなく
妻唱夫随も心得おくこと
大事な局部清拭のエチケット
夫の寝化粧マニキュア
妻のコンディションを忘れなく
昼間は賢母でも夜はボクの美しい奥さま
慎みもいいが野性的になつて欲しい
明日の仕事に差支えなく細く長く楽しめ



原 比露志・著
新書美装判 212頁・価 130円・送12円
東京都中野区江古田 1 あまとりあ社刊

★裏窓叢書第一集・第二集・第三集・重版発売中！★

裏窓叢書 第一集

狂異地獄肌

★おぞましい地獄党の処女刺青肌展示！ 美女の群れはからくり責めの唐人船へ運ばれて飽くことなき悪魔の手に翻弄されるのだ！ 定価三五〇円・送料四〇円

飯田 豊吉 著

喜多 玲子 装幀
中島 喜美 挿絵

裏窓叢書 第二集

黒蛇呪縛

★蛇責め、犬責め、乳房責め、捕われの美女は転変する運命に操られる。海賊の秘宝をめぐるひしめく触手、蛇身は妖しくうごめく。 定価三五〇円・送料四〇円

黒木 忍 著

喜多 玲子 装幀
山田 彬弘 挿絵

裏窓叢書 第三集

地底の牢獄

★暗黒街の覇権を争う凄愴な闘いのかげに、鉄鎖は柔肌に喰い込み、逃れる術なき悲鳴は地底に響くのみ！檻の中の女体に迫る危機！ 定価三五〇円・送料四〇円

藤見 郁 著

喜多 玲子 装幀
秋吉 巒 挿絵

東京都中野区江古田・あまとりあ社 振替 東京10756 久保書店宛



marks along the river. This boat is anchored right across the line. The bow is in Armstrong County enough, but the stern, where his located, is well on the Clarion County. Frost stormed over to demand the Clarion sheriff co-operate in a joint raid already found out. The two sheriffs bitter enemies who would never catch on anything. The idea of catching a raid was abandoned. All Ben had pull his boat to one side of the other and thumb his nose at the

★秘蔵を求めに地獄岳の奥深く入った許婚の男女は本気で精進め乳房責めの悲運に見舞われたノ

猿飛一族 山乱破秘聞 万里小路 崑 (120)

★紅蓮の焰の中で腰を振り乳房をゆすって身もたえる安眠の美女たちに秀吉も夜毎悩まされたノ

大奥秘譚 地獄変桃源城 葉田 光 (104)

二色豪華 絵物語

消えた刺青裸女 文・秋津京太 画・山田彬弘 (95)

假面を剥がせ 文・鳥丸克彦 画・山田彬弘 (87)

妖物奇 絵物語

ドクトル魔美の唇 文・歌川大雅 画・歌川大雅 (79)

妖物奇 絵物語

黒猫小町 文・歌川大雅 画・歌川大雅 (71)

妖物奇 絵物語

女館南蛮船 文・歌川大雅 画・歌川大雅 (63)

◎映画雑感 高円寺一郎 (118)

妖物奇 絵物語

裸形弁天 文・中島喜美 画・中島喜美 (55)

妖物奇 絵物語

妖艶娘縛絵 文・中島喜美 画・中島喜美 (47)

妖物奇 絵物語

続肌地獄 文・中島喜美 画・中島喜美 (39)

二色オフ 絵物語

美女と野獣 文・秋津京太 画・古正英生 (31)

グラビア スーパード傑作選 悦虐フォト傑作集 編集部・編 (23) (15)

巻頭 絵物語

十字架の美少女 文・鳥丸克彦 画・山田彬弘 (7)

☆裏窓・秋季増刊号・目次 ☆表紙・秋吉 轡 ☆目次カット・美濃村晃

★この一篇があなたの性生活に革命を起す！当代の権威陣が解明する男女肉体の秘密と夫婦愛欲の実態！★

御送金は小為替、振替、現金書留が尤も安全で確実です。
東京・中野・江古田一の二三〇二株式会社あまとりあ社

実用セックス講座 ① 好評発売中!! 結婚生活のレイアウト

夫婦の性生活が活気に満ちた楽しいものとするためには、お互いに相手の肉体と心理を知るとともに生涯の家族計画を立てねばならない。既婚者は勿論、婚前の男女のために著した二人だけの説計書。

定価 270円
送料 40円

厚生省人口問題研究所技官

青木尚雄

実用セックス講座 ② 好評発売中!! 性医学ノート

誰でも知っているようで意外と知らないのが性の問題。初夜の感覚・女性の自慰・愛の技巧・交渉の回数等々その秘密を捉えて、海外文献からの盲信を改めて、夫婦生活の最高を平易に説いた軽性医学。

定価 250円
送料 40円

医学博士

飯田初男

実用セックス講座 ③ 好評発売中!! 女体のメカニズム

女体に関してこれほど深く分析・解剖し尽したものは他に類をみません。聴覚と女の刺激・咬むことの性欲心理等著者独得のメスカ縦横の角度から、女の深奥にあてられて解明する「肉体的女性論」

定価 270円
送料 40円

日本大学教授
医学博士

押鐘 篤

実用セックス講座 ④ 好評発売中!! 性愛雰囲気86法の分析

性感は心理的条件によって大きく動く。これを知らずして拙速な行為に走っても結果は不満に終り不能症や不感症の原因になるのである。これは技巧・環境等のムードをよりよく創る夫婦円満の快著。

定価 300円
送料 40円

日本生活心理学会会長

高橋 鐵



十字架の美少女

① 美少女の死

長崎——晩秋のある朝。

浦上に近い海岸に、美少女の死体が打ちあげられた。

投身自殺か……まだ充分に成熟していない肢体は痛痛しく、裂けたセーターの間から覗いている乳房は可愛く、哀れだった。

が、奇妙なことに、波に洗われて白くむくんだ素肌の所々に、青黒い充血の跡が残っていた。

（生前、何かで強く縛られていた跡だ……とすると——自殺ではなさそうだ……）

長崎日報記者小宮吾郎はそう直感した。

少女の死体へ好奇の眼差しを向けている野次馬達。その背後から、通りすがった一人の外人神父が眉を曇らせ瞑目して去って行くのを、吾郎は何気なく見送った。

その少女は一ト月前、東京の両親から捜索願いの出ていた高校生だった。長崎の祖父の家へ向ったまま消息を絶っていたのである。自殺か他殺か……警察は俄然色めき立った。

彦弘 克彬 丸山 烏山
文画



② 問題の絵

「吾郎ッペ、君は見たかい？ 天守教博物館の問題の絵——すごいショックだぜ」
少女の死因が判然としないままに、一ト月が過ぎて……こ、は長崎日報の社会部。吾郎に声をかけたのは同僚の柳瀬である。
問題の絵というのはクリスチャンの少女が処刑される瞬間を描いたもので、廿日ほど前から、その生々しい描写が街の人々の間で評判になっていた。吾郎はまだ見ていなかった。

③ 天守教博物館

長崎天守教博物館——柳瀬にす、められ、吾郎は重い腰をあげてやって来たのだ。そこには受難時代の苦悩を物語る殉教者や、聖なる使徒の遺品の数々が陳列してある。

ステンドグラスから射し込む光を受けた異様な雰囲気の中に、問題の絵があった。

十字架に縛りつけられた全裸に近い少女。か弱い肉体に、荒縄が胸といわず、腰と云わず、残酷なほど強く喰い込んでいる。柳瀬の言葉通り……いや、それより、もっと凄絶で悲惨な絵だった。少女の口から、今にも責





苦に喘ぐ呻きが洩れ聞こえそうな錯覚に捕われ、吾郎は思わず慄然となった。すぐ、吾郎は館長に面会を求めた。絵の作者を尋ねたのだが、館長の返答は意外だった。

「実は、私の方でも知りたい位なんですよ。一ト月ほど前の朝、館の前に置いてありましてネ……信者の方でも寄贈してくださったんだと思って、ああして掛けておいたんですが、いやア、こうも評判になるとは夢にも思いませんでした……」



④ どこかで見た……

作者不明の絵か——夕闇の迫った石畳の上をゆっくり歩みながら、吾郎はうなずいた。吾郎にとって、少女の絵はあまりにも強烈な印象を与えていた。神を信じて昇天する歡びが死を怖れさせないのか、激しい苛責の中で、少女は恍惚とした安らぎの色さえ浮べているのだ……。相当に腕のたつ画家の筆になるものであろう。

と——、吾郎の足がギクンと停った。

（あの少女の顔、どこかで見たようだナ）

吾郎の脳裡に閃いたのだ。だが、その少女が誰なのか、容易に想い出せなかった。



⑤ 真弓の失踪

その足で吾郎は行きつけのバー「ムー
ン」の扉を押した。

「待ってたの、吾郎さん」

ぶつつけるように緊張したマダムの声。
訝って凝視する吾郎にマダム千代は早
口に続けた。

「真弓が行方不明になったのヨ」

真弓というのは千代が妹のように可愛
がっている自慢の姪。戦災で両親を失っ
た彼女を引取って面倒をみているのだ。
屈託のない明るく清純な高校生だった。

⑥ ハウエル神父

浦上の山の手にある星園教会。訪れた吾郎
の前に神父は五分程たって姿をみせた。

「ハウエル神父ですね」

凝視した俤、吾郎は来意を告げた。神父は
フツと眉を寄せた。

「お気の毒です、熱心な信者の真弓さんが
このようなことになるとは……私、今も主に

真弓さんの無事をお祈りしております」

そう語る神父の眼は憂いに沈んでいる。心
底から信者の不幸を心配している姿だった。

と――、探るように神父を睨めていた吾郎
は、揮発性の強い油の匂いを嗅いだ。それは
神父の黒衣から匂っていた。

吾郎の顔に複雑な微笑が浮ぶ。怪訝そうに
見返す神父に吾郎は別れを告げた。

キラッ、見送る神父の眼が妖しく光った。





「一昨日の土曜日、夜の礼拝に行ったり帰らないのヨ。いつもみたいにお友達の家にでも泊ってるんだと思ってたんだけど……」

「どこなんだ？ その教会って」

オロオロと今にも泣き出しそうな千代を叱るように、吾郎は尋ねた。

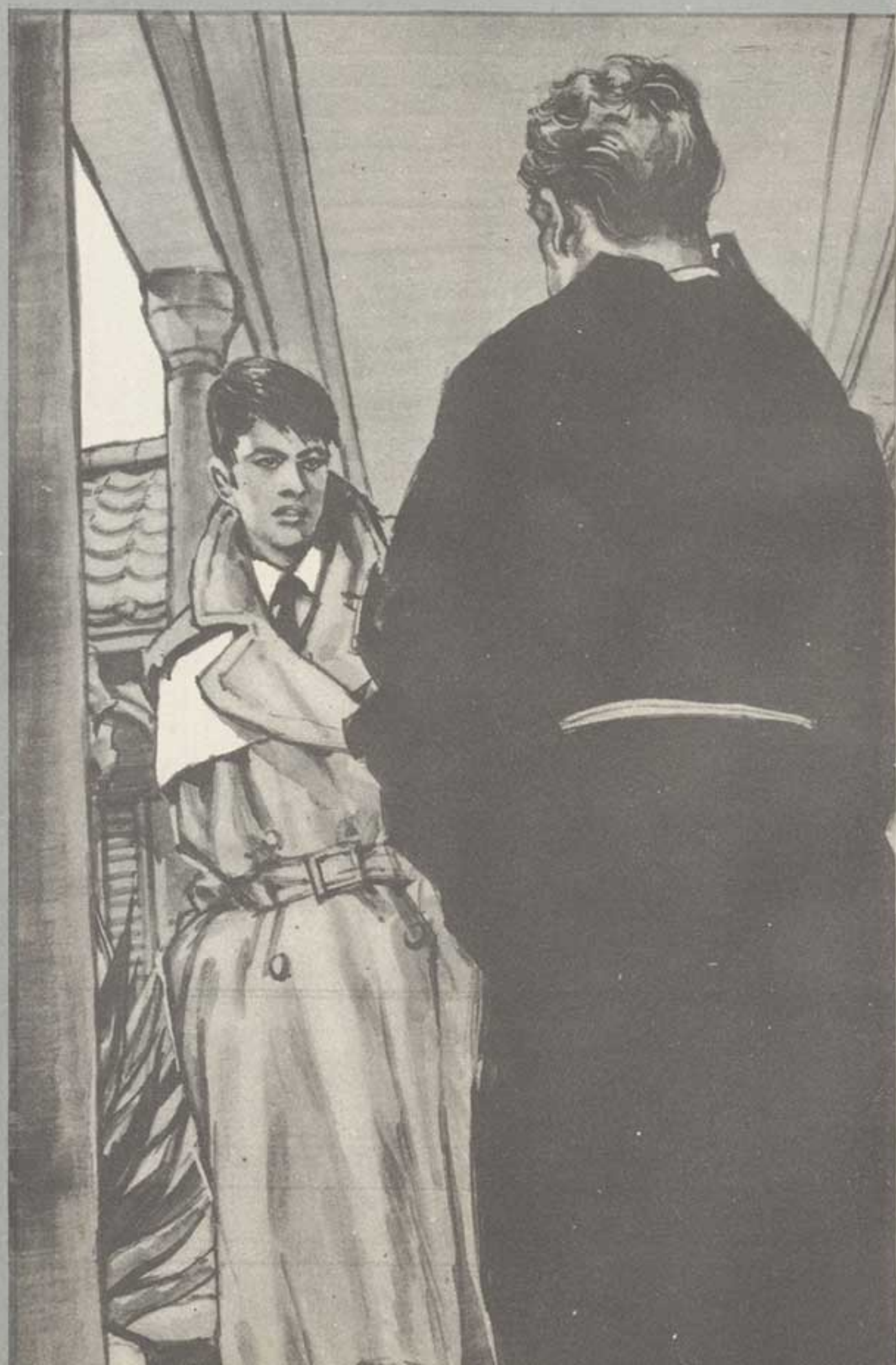
「星園教会よ、ハウエル神父の——」

その言葉に吾郎は颯と表へ——

⑦ 地下室

神父は表戸に錠を下すと、祭壇のローソクを手に、居間とは反対の扉を押した。

ギ、ギッ……開いた扉の向うに、地下室へ降りる階段が黒い口をあけていた。プーンと微と油臭い匂いが鼻をつく。



と、どこからか呻き声が聞える。

ヒクッ、神父の頬が痙攣する。素早く階段を降りた神父は突当りの鉄扉をあけた。

ゆらめくローソクの光に照らされた地下室。その奥に全裸に近い姿で手足を縛られた少女が倒れていた。気配にあげた顔——それは意外にも行方不明の真弓ではないか！



⑧ 残忍な眼

「あーッ！」

神父を見上げた真弓は身を振り顔をそむけて怖ろしい悲鳴をあげた。

「ふふふ……こわがることはない。早く、その十字架にかかるんだ」

「あゝ、それだけはどうか許して……」

なめるように真弓を見据えていた神父の眼が、残忍な色を帯びた。いきなり、真弓

⑨ モデルは真弓

抵抗を諦めたのか、真弓はグッタリとなった。神父は満足そうな微笑を浮べて、傍の燭台のローソクに火をつけた。

二本、三本——明るくなった室内。そこは異様なアトリエだった。

神父はカンバスの上の白布をとった。十字

架の上で悶える受難者の姿が描かれている。

モデルは言うまでもない、真弓だ。

ふふふ……不敵な笑みを洩らして、神父は燭台を真弓に近づけた。メラ／＼と蛇舌のようなローソクの火が真弓の肌に触れる。

（あ、あーッ）真弓の美しい顔が歪んだ。

神父は眼を細めてカンバスに向う。そして憑かれたように絵筆を動かした。



の黒髪を掴んでずるずる引摺った。

(ひ、ひーいッ！)

悲鳴をあげて、身をのけぞらせる真弓。

しかし、その抵抗も空しく、真弓は傍の十字架に括りつけられた。苦痛に堪えかねて動くと、二重三重にかけられた荒縄が真弓の成熟しきっていない胸や腰をグイグイと締めつけた。



⑩ その人は違う！

ゆらぐローソクの光に、カンバスの上の真弓の像は十字架の上で悶え苦しむ真弓同様に、生々しく喘いでみえた。

「この絵が完成した時はお前の死ぬ時……」

お前の美しい姿はこうして描き留めてある。生き永らえて老醜を晒すより、今の若さで死んだ方が倖せさ」神父の眼は殺気に燃えた。

恐怖につかれて、真弓は声も出せないのだ。

ドドッ……階段を駆け上る足音に続いて背後の扉がガツと開いた。飛び込んで来たのは吾郎と二人の刑事。

「殺人容疑並びに誘拐罪で逮捕する。観念しろ、ハウエル神父」

「違います、その人は」真弓が叫んだ。

⑪ ガチャリ

「ハウエル神父さんはどこかに監禁されています。早く探して……」

十字架から助け降された真弓は吾郎の胸の中で喘ぎながらいった。刑事の一人が素早く地下室を飛び出して行く。
ガチャリ、偽神父の腕に手錠が――



⑫ 神父の告白

偽神父は憎悪に燃える眼で吾郎を睨んだ。

「偽神父さん、君の黒衣にしみた油の匂い

で真弓がモデルにされていると気づいたんだ。

そいつは絵具を溶かす油の匂いだからな。

それから、いつかの少女の死体、あれは君が

殺したんだろう。証拠は天主教博物館の絵さ

――殺された少女にそっくりだぜ」

吾郎の言葉の終らぬうちに、偽神父は落ちていたパレットナイフの上にガバツと倒れた。



ウッ！ 断末魔の呻き。偽神父の胸にナイフ

が突き刺って絶命した。そこへ刑事に助けられたハウエル神父が降りて来た。いつか吾郎が海岸で会ったあの神父だった。

偽神父は米軍の脱走兵だった。罪を懺悔し

ても他言されないことを知ってハウエル神父

を脅迫し利用していたのだ。夜になると神父

を監禁し、地下室で絵筆をとっていたという。

「戦争で片輪になってからこんなになって

しまいました。可哀そうな男です、弟は……」

涙を押えるようにポツリと神父は呟いた。(終)

ヌード傑作選

カメラ
藤沢
修

















悦虐フォト傑作集

















美女と野獣

文画・秋津京太
古正英生

①美女と野獣

馬の曲乗りが終った後、呼び物の「美女と野獣」のショウがはじまった。

美女は虹沢みどり。野獣は一寸法師の海野紋太郎。紋太郎の握る長い皮鞭が、ヒョウヒョウと鳴りみどりの体へ蛇のようにからみつく。それをぐいと引くと、ピリッとみどりの服が裂け、乳房の小山が露出し、腰の丸みが飛び出し、果ては一糸纏わぬ裸形となる。

全裸になったみどりの白く柔らかなあらゆる肌へなおも皮鞭は容赦なくまといつく。みどりの豊満な裸身がもたえる宝石のように汗で光る。

② 渡り芸人

「美女と野獣」の演題通りの凄艶さ。シヨウとは思えない迫力。

固唾をのむ観衆。

「ひでえシヨウだな、俺もずいぶんと方々のサーカス団を廻って来たが、こんなのははじめてだぜ」

控えの幕の隙からのぞいていた綱渡り芸人の鉄が呟いた。昨夜遅く、一座に転がり込んで来た渡り者だった。

「あいつら二人は夫婦者なんさ、どんなシヨウをしようとはたから文句はいえねえよ」

道化の芳公がいった。



③ 似たものの夫婦

やがて——。さんさん皮鞭を浴びたみどりは、その豊満な裸身を力なく地上に横たえ、芋虫のように、ひくっひくっとならぶと震えた。

その足許に突ッ立った紋多郎は不気味に笑うと、皮鞭をくるツとみどりの首に巻きつけ、軽々と引きずって退場。

「新入りさん、あんまり熱っぽい眼でみどりを見詰めなさんなよ……奴のヤキモチは気違い沙汰なんだから」と芳公。

「だってよ。あんな凄えグラマーが、あんなバケモノの女房だなんて、どうも合点がゆかねえもんさ」と鉄。

「似たもの夫婦さ、へへへッ」



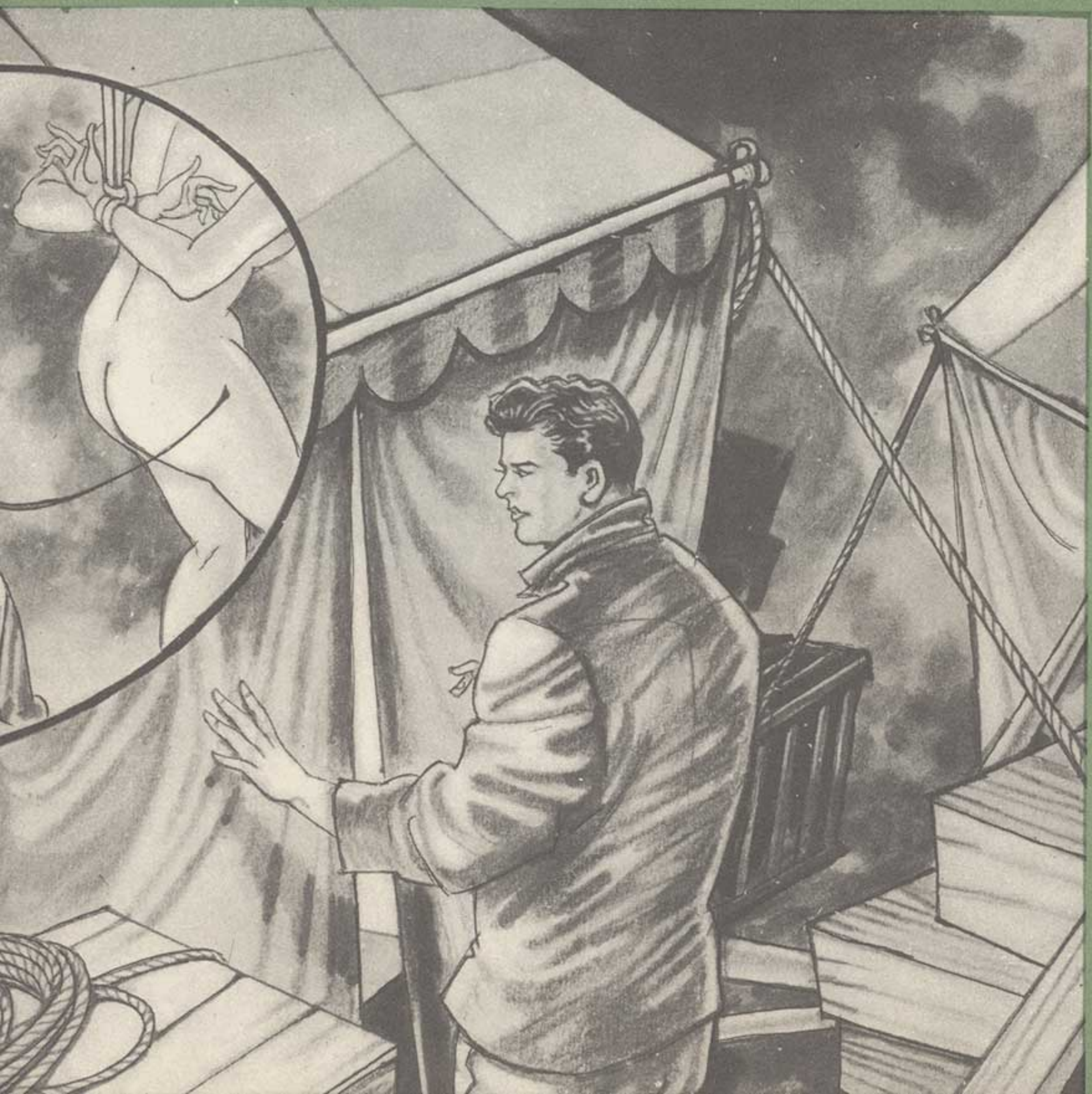


④皮鞭の音

その夜。鉄は蒸し暑い天幕の中から外へ出た。満天の星月夜。動物の檻舎や夫婦ものの小さな天幕の間をそぞろ歩いていった鉄の耳に、不気味な音が刺つた。

あの昼間見た紋多郎の皮鞭がみどりの柔らかな肌を打つ音と同じだった。その音はすぐ近く、幕舎からだ。黄ばんだ光が天幕の間から洩れている。鉄は近寄ると、天幕の隙間に目をつけた。「あッ」と声をあげかけたのをやつとの思いでこらえた。

そして、眼をみはり、息をひそめて、凝視したのである。





⑤ 幕舎の折檻

幕舎の中央にみどりの白い裸身が、宙吊りになっている。肩甲骨のところまで両手を折りまげられ、乳房と腹を弓なりにそりかえらせ、がっくり首を前に折っていた。黒髪が、蒼ざめた顔に散って、その苦悶に歪んだ顔は美貌だけに、一種異様ななまめかしさがあった。

「やいッ……お前がいくら俺から逃げようとしたとてだめなんだぞ。」

逃げたけりゃあ逃げて見ろ……今までにお前は三度も逃げて三度とも俺につかまった、そのたんびに面白いほど折檻してやった……俺が、お前を使って、美女と野獣でえシヨウを考え出したのも、お前が俺から逃げようてえ根性をなくさせるためなんだ。俺はお前を毎日毎日皮鞭で責めてお前を動けなくさせておこうと思ったんだ……それが皮肉なことに大受けさ。今、俺たちの一座は、お前と俺とのシヨウで見物を集めているようなものなんだ……」

紋多郎は皮鞭をしごいて舌なめずりした。

「お前、近頃からつきし元気がねえ……俺の鞭に馴れたんだろう……以前のよう



勢いよくはねえ。見物はお前がはねればはねるほど大よろこびなんだ……それがどうだ、近頃は……すぐにのびちまいやがって……それほど、俺の鞭がこたえねえか……今夜は精一杯踊る稽古をつけてやるぜえ」

ぴしっ、と皮鞭が鳴った。

鉄はみていられなくなり、いきなり幕舎の中に入っていった。

⑥ 似た女

「な、なんでえ貴様ア……お前、新入りの綱渡りじゃねえか」

鉄の不意の侵入に、紋多郎は眼をむいた。

「ひでえじゃねえか、よしなよ」

「ほっといってくれ、俺の女房を俺が仕込んでるんだ、誰にも文句はいわさねえ」

鉄は、宙吊りされたみどりの眼が、助けを乞うように、自分を見詰めているように思った。その顔にふと胸がふさがった。（よく似てやがる……美佐子とそっくりだ……美佐子の奴どうしているか）



⑦ お尋ね者

綱渡りの鉄はお尋ね者だった。Kというサーカス団にいたのだが、美佐子のことで恋敵の英吉と酒の上で喧嘩し、ナイフで殺したのである。自首しようとする、美佐子が「逃げてくれ」といった。

「後からすぐ追っかけてゆくわ。あなたが人を殺してまであたしを愛してくれてることがわかってうれしい」

その言葉を唯一の生き甲斐に、流れ流れて、この片田舎の極モノサーカス団に転がりこんで来たのである。三月たっていた。

(きつと美佐子は追って来る……)



⑧ 慕情鉄拳

鉄はみどりの顔にその美佐子のおもかげを見ると、もう夢中だった。いきなり拳で紋多郎をなぐり飛ばした。紋多郎は幕舎の外へ吹っ飛ばしたたか弱腰を打ち、凄惨な形相で鉄を睨んだ。

「さあ助けてやるぜ」

鉄はみどりの縄を解いてやると、紋多郎へ吐きすてるようにいった。

「おいっバケモノ……俺は、この女が

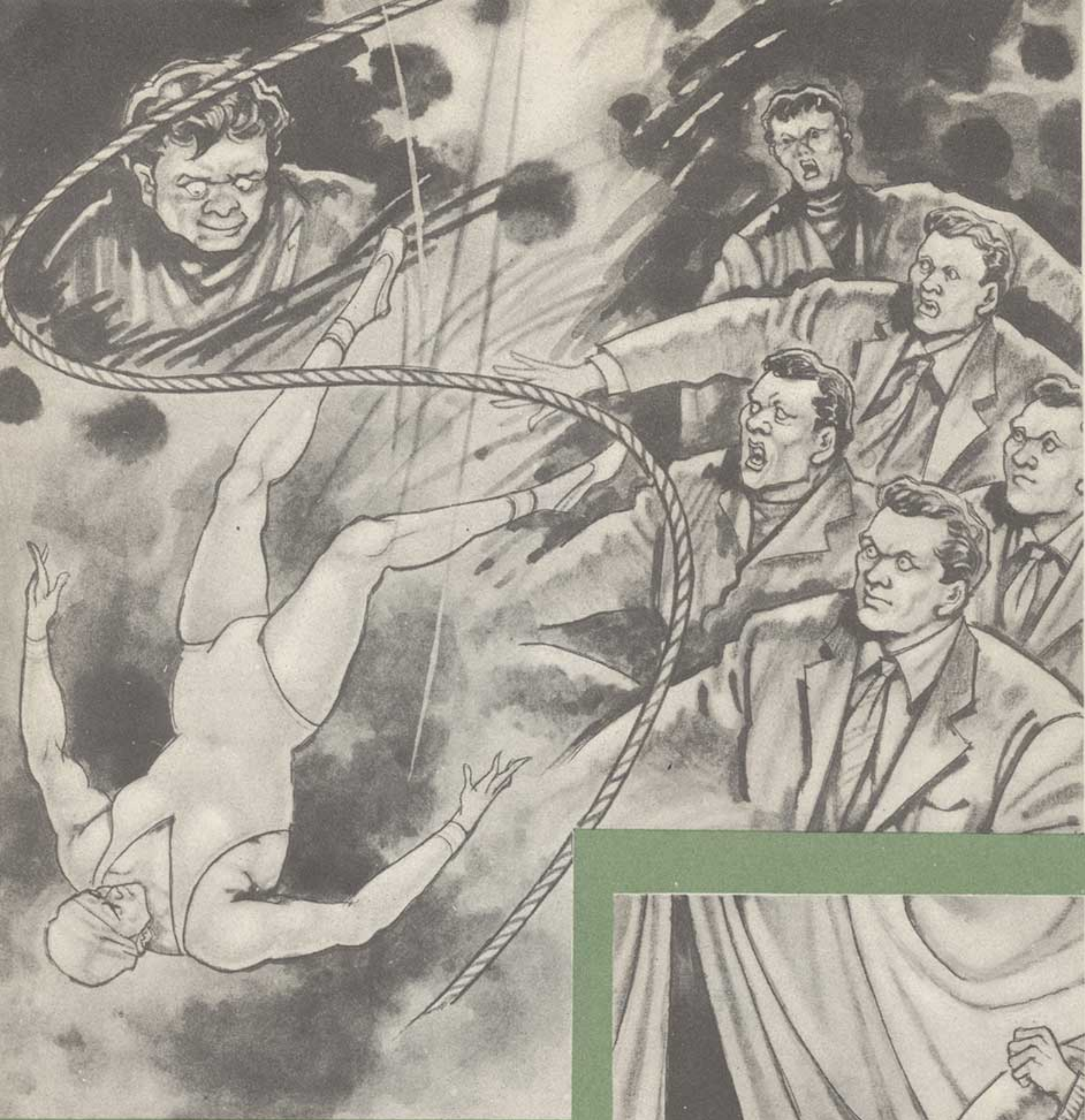
お前の女房だからって、こんな目にあっているのは見てられねえんだ……俺の可愛い女とこの女はそっくりなんですね……いっとくが、俺ア、ただ、それだけのことなんだ、惚れたはれたじゃねえよ」

そのまま鉄は外へ出た。

「畜生……覚えてやがれッ」

紋多郎が腰をさすりながら呟いた。





⑨ 墜落

翌日、鉄が綱渡りを始めた時、引き渡した綱尻に、小さな人影がうずくまっているのを見た。

紋多郎だった。その手にピカリとナイフが光っている。

鉄は綱の真ん中あたりを渡りかけていた。下に受綱は張っていない。

紋多郎が綱を切りはじめるのを見たとき、ベっとり脂汗が滲んだ。

一瞬綱が切れ、鉄は、大勢の観衆の目の輪の中へ真っ逆さまに墜落していった。



⑩ 白い芋虫

鉄が意識を取戻した時、天幕の中の病床の枕許にみどりが淋しげな顔ですわっていた。

「ねえ鉄さん、何をぼんやりしてるの……あたしよ、美佐子よ」

「美佐子？」

「そうよ、あのね、あなたを迎えに来たのよ、それなのに……くすんと鼻をすすった。」

鉄が殺した英吉はたいした傷もなく死んでもいなかった。それに酒の上のことでもあり、示談で済むことになり、美佐子が探しあぐねた末、尋ねて来たのだ。が、すでに鉄の死期は迫っていたのである。

「みんな聞いたわ、ばかねえ、あんた……あんな片輪の女に惚れたりして……あのみどりって女は、白痴で啞なのよ……それに紋多郎で小びと同じ変態なのよ、あんなことを楽しんでやってたのに……」

鉄はそんな美佐子の声をうつろに聞きながら、まだ、眼の前の美佐子がみどりのように思えてならなかった。やがて、モウロウとした鉄の眼の中に、あのみどりの白い芋虫のような裸身がうねった。

裏窓 続肌地獄
絵草紙

絵文 中島英美



①「あつ、お絹さん……いけねえ。お絹さんには旦那がある」
「いいえ、あれは旦那じゃない、あの人はわたしのお金で縛っているだけなんです」
「そうはいかねえ、かりにも主のあるお絹さんと……」
「いいの。死んでもいい、太夫、昔のようにわたしをきつく抱いて……」
料亭「春野」の隣で初恋の男市村竹之丞と差向いになったお絹は、何もかも忘れて柔かな女体を火のように燃えあがらせた。
「許しておくんない……昔のお絹さんとなら……」
「いや……こんなに胸が……もうどうしよう……」
心と一緒に肉体も乱れたお絹の白い続肌に触れた竹之丞はもろくも理性を失ってしまった。竹之丞の口唇がお絹の口唇の上にかぶさった。
「ああ……」
悩ましく切ない呻き声をあげると、このまま死んでいてもいいと云う思いがお絹の全身を駆けめぐった。

②海家の一人娘で育ったお絹は筒井筒の新吉との初恋で女になったのは十六の春だった。父が死ぬと同時に家が没落して新吉との初恋もうなれたの夢と消え、呉服問屋の越後屋へ上女中に上ったが、主人清兵衛に一夜手込めにされてから妾同然の生活を強いられた。妖しいお絹の続肌の魔性に迷った清兵衛はとうとう内儀も離別し、家業も省りみないほど溺愛もつづけている間に、家屋敷までも人手に渡り、乞食同様の姿になった今でもお絹

を追いついてゐるのだった。一方清兵衛の元を逃げ出したお絹は、辰己から小しんと名乗って左様をとったが、旦那になった但馬屋与兵衛はお絹の肌を片時も離すまいとするその執念深さにお絹は真底から愛相がつきていた。そんな時に、偶然今は市村竹之丞と名乗る若手女形になっていた新吉に再会し、初めていた初恋の炎が再び小しんの胸中に燃えあがったのだ。



③やっと首尾して会った春野の離屋——
「こんばんわ……」
と障子の外で呼んで、さらりと押しあけるなり、
「新さん、会いたかった」
小しんは竹之丞の膝の上に突っ伏すと、肩を震わせて泣いた。
「小しん……いや、お絹さん、逢いたかったぜ」
と見降す竹之丞の眼には、辰己の水で洗われた凄艶な美しさの中に、はにかみながらそうつと見上げるお絹の目つきに昔のままの初しきを感じた。
「新さん、立派な太夫になられて……ほんとに夢のよう……」
「お絹さん」
「太夫……」
お絹は竹之丞の掌にすがりつき力をこめて握りしめた。



④「小しん、小しん」

与兵衛のはげしい怒声が近づいた。
がらりと障子をあげた離屋の四畳半には酔
い伏した小しんの寝乱れ姿のほか猫の子一匹
いなかった。

「小しん、相手の役者はどこへ行った」

「お客はとうの昔に帰りましたよ……」

着くすれたままの小しんは立て膝つくど、

生あくびをしながらこう云った。

「フシ空々しいことを……役者の名前をいえ

……役者買なんかしやがって……この浮気者
め」

「何をしようとしたしの勝手でごさんすよ……」

「何ッ……」

与兵衛の平手打ちがとんだ。

「帰れ……一緒に帰るんだ」

嫉妬に狂った与兵衛はお絹の肌を誰にもさ

わらせたくなかった。厭がる小しんを引きず

るようにして連れ去った後、押入の唐紙が静

かに開くと蒼ざめた竹之丞の顔が現われた。

「お絹さん」

とつぶやくと、その場へ崩れるように坐っ
た。



⑤「いえ、相手の役者の名前を……いわなき
や体にいわしてみせるぞ」

折檻されている小しんは着物も長襦袢もす
でに剣ぎとられて、後手に縛られたまま座敷
にころがされている。

与兵衛は小しんの両手、両足を柱に縛りつ
けると、物さしを持ち出してきて肉づきのよ
い豊かな腰のあたりを思いきり打撃した。

「ひい……」

絶叫をあげてのけぞる小しんに、

「いえ、いわねえか」

と嫉妬の鬼に化した与兵衛は気を失うまで

叩き続けた。

桜色に上気した小しんの肌に得も云われぬ

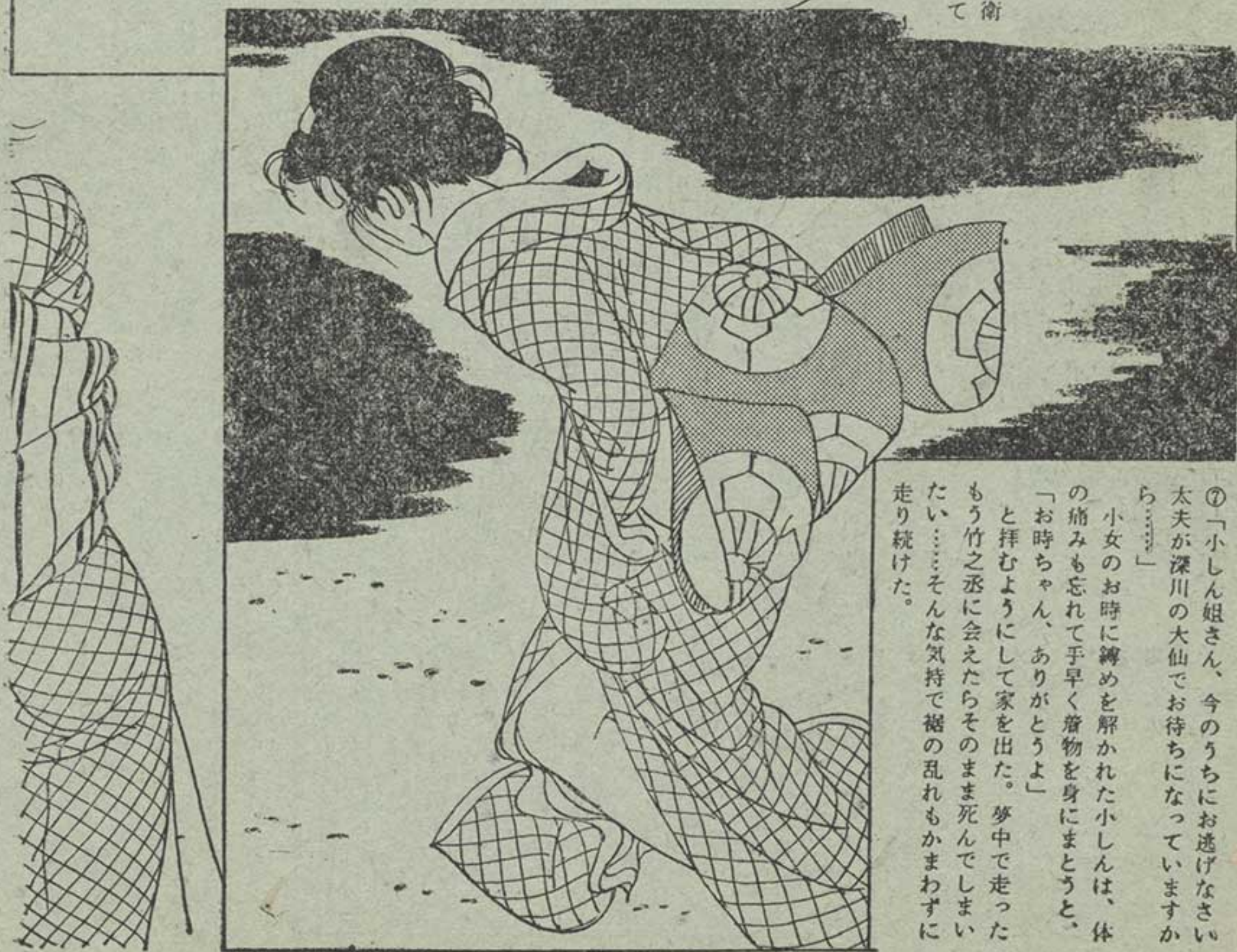
妖気を感じた与兵衛は物指しを投げすてた。

魔性の統肌に魅せられたように……



⑥「くく……」
 寝巻の奥から絞り出すような悲鳴をあげて
 小しんはのたうち廻っている。
 今宵は昨夜に変わってくすぐり責めに責めは
 じめた。
 海老のように脉をまげくねらせて、苦しむ
 小しんの風の凄艶さに、与兵衛は一層情欲を
 かりたてた。転げ廻るたびに長襦袢は剝がれ
 て後手のところにたばねられ、腰の湯文字が
 今にもすり落ちそうになっている。その湯文

字に与兵衛の手がかかった時だ。
 「旦那さん、大変です」
 二階に上って来た少女の声に、
 「馬鹿、上ってくる奴があるか……」
 とどなる与兵衛だったが、
 「旦那、お店が焼けています……」
 「げえ……」
 冷水を浴びたようにわれにかえった与兵衛
 は小しんを放りだすと、急いで階下へ降りて
 いった。



⑦「小しん姐さん、今のうちにお逃げなさい
 太夫が深川の大仙でお待ちになっていますか
 ら……」
 小女のお時に縛めを解かれた小しんは、体
 の痛みも忘れて手早く着物を身にまとうと、
 「お時ちゃん、ありがとうよ」
 と拝むようにして家を出た。夢中で走った
 もう竹之丞に会えたらそのまま死んでしま
 いたい……そんな気持で裾の乱れもかまわずに
 走り続けた。

⑧「あっ」
 出合い頭に人影に突きあたった小しんは、よろけるはずみに着物の裾に足をとられて、辻行燈の前へ倒れた。
 「痛てえ……」
 と相手は二三歩さがって、倒れた小しんの姿を見た。
 「おつ、お前は小しん……」
 「えつ……」
 思わず振り返って辻行燈の灯りで顔を見た

小しんは体がすくんでしまった。
 「あっ、旦那……」
 「やい、どこへ逃げるつもりだ……俺の店は焼け落ちて無一文になってしまった……こうなりや破れかぶれた。お前を誰の手にも届かねえところへ連れて行くのだ」
 与兵衛の体から殺気が流れた。
 「放して……」
 「くそ、放してなるものか……」
 「だ、だれか……」



⑨その時二人の前に乞食体の男連れが近よってきた。
 「お、お、……お絹だ……お絹だ」
 「何、これが手前の阿魔かよ」
 「そ、そうなんだおれの女だ、辰巳の小しんだ」

「よし、清公、手を貸してやるぜ」

と一人の乞食風の男がこういったと思うといきなり与兵衛に体当りを喰らわせた。

不意をつかれた与兵衛は小しんを離すと、その場にどっと倒れた。

「うう……」

倒れた上に馬乗りになった男は手拭いを与兵衛の首に捲きつけると一息に締めつけたので呻き声をあげて手足を二三度ばたつかせた……そのまま与兵衛は路上に伸びてしまった。

「おい清公、ずらかるんだ」

逃げおくれた小しんに手早く猿轡をかませると手取り足取りその場から闇の中へ消えてしまった。



⑩——深川十万坪の隠亡小屋の中——

「おい、お絹、俺だよ清兵衛だよ……ひひ……」

「昔のままの肌の色だ……」

落ちぶれて乞食になった白髪頭の清兵衛は肌もあらわに柱に縛りつけられたお絹の肌を撫でまわすのだ。

「汚ない……放しておくれ……」

欠け茶碗で酒を飲んでいた隠亡の伝三は、「おい、清公。ぐずぐずしねえで早いところかたづけねえといいてえが……手前にやもったいねえ上玉だ……ものは相談だがクジを作って当った方が先にちょうだいすることにし

たらどうだ」

「馬鹿をいえ、このお絹の肌は誰にもさわらせなかねえや」

「それじゃ手前、何か……俺に骨を折らせておいて指をくわえていろってのか」

「あた捧よ、手前なんぞに指一本ふれさせねえや」

「野郎、ぬかしやがったな」

というが早いか側にあつた薪に手がかかるといきなり清兵衛の頭へとんできた。

「畜生ッ」

二人の色飯鬼は殺気だつて組合つた。



⑪「さまあ見やがれ」

伝三は首をしめた清兵衛の体を小屋の外へ放りだすと、お絹の前へ近づいてきた。

「へへ……清公が迷ったという小しん姐さんの肌を楽しましてもらうぜ」



⑫「ギャッ」

伝三の脳天へ薪割の一撃を降した。ざくろのように割れた頭から血潮を噴きだして伝三はその場に崩れた。血だらけの手で這いよった清兵衛は、恐怖のあまり失神したように両眼を閉じている小しんの足首をつかんだ。はっと気がついた小しんは、

「いや、放して、放して」

と清兵衛の手を振り放そうとしたが、逆にずるずる引きずられていく。

「ひひ……俺のものだ、誰にもやらねえぞ……この肌は……俺だけだ……」

だが足首をつかんだ清兵衛の力は次第に弱くなって、がっくりと前へのめるとそのまま息が絶えてしまった。



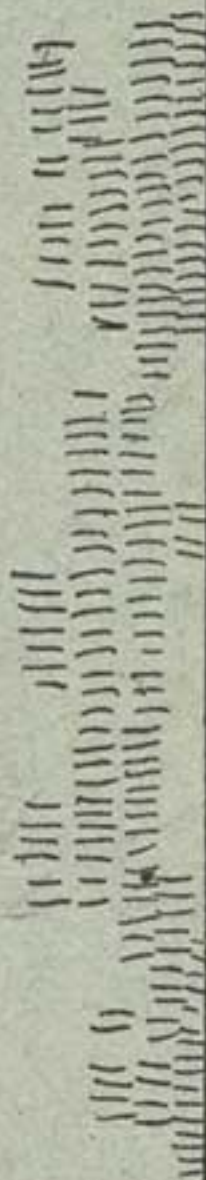
⑬そのとき、二つの死体を前に恐怖におのの

いているお絹の眼前に立った人影。

「お絹さん、わたしだよ」

「あっ……太夫……」

竹之丞に介抱されて隠れ小屋を抜け出し、



「よしておくれ、厭、厭、汚ない……」

暴れ騒ぐ小しんの体から一切を剝ぎとった伝三は茶碗の酒を飲みながらギラギラ光る獣のような目つきでその裸身を見つめている。と死んだはずの清兵衛が最後に残る力をふり絞るように小屋の中へ忍びよってきた。

自分の家まで送りこまれたのが夢のような気がするお絹だった。竹之丞はお絹の来るのがおそいので虫が知らせて外へ出て四ツ辻の行燈の近く差しかかった時、お絹が拐われるのを見て二人の後をつけて十万坪へ行ったのだ。

⑭猿若町の中村座は市村竹之丞の『金蘭寺』の雪姫が大当りに当り江戸ツ子の人気を沸かした。

雪姫の貴め場で真にせまったその仕草を、老いも若きも固唾をのんで眺めるのだった。大入満員のある日、校敷の一隅で一心に舞台の竹之丞を見つめている眉の剃りあとも青々とした丸髷姿のお絹がいた。雪姫を見ていたお絹はふと、十万坪の隠亡小屋で縛られていた己れの姿と、おぞましい色餌鬼の争いを想い、ぞっと悪寒が脊筋を走った。



⑮「まあ太夫は人が悪い……あの時のわたしをお手本にして……」
と悪うと羞恥で顔が赫くなった。一夜にして清兵衛が死に、辰己から足を洗って初恋の人竹之丞の内蔵になった今、何もかもがしあ

わせだった。

魔性の肌といわれたけれどその魔性の肌がつかんだしあわせかも知れない。

嬉し涙で見上げた櫓の丸に橋の竹之丞の定紋がお絹の目に焼きつくように映った。――終――

① 辻堂の狼藉

二本松のあたりで女の悲鳴が聞えた。

(——空耳か……)

文五郎は立止って、もう一度女の声を確認しようとしたが、それっきり二度と聞えてこなかった。

「はてね……」

眩やきながら歩きかけた文五郎の眼が、木立の中にある崩れかかった辻堂にとまった。

(——怪しい……)

文五郎は足音を忍ばせると、辻堂の裏手へ廻ってようすをうかがった。押しころすような呻き声に混って人声が聞える。

(やっぱり、この中だ……)

「ちえっ、俺アどうもくじ運の悪い男だ。仕

方がねえ、兄貴早いとこ交代してくんねえ」
中から声である。

文五郎は、こわれた窓からそっと内部をのぞいた。ほの暗い中に、やくざ風の男が若い娘を押えつけている。

娘の裸身が白々と浮き上って激しく抵抗している。

一人の男が未練氣に立ち上った。



裏窓陰物語
妖艶娘縛人

絵と文中島村春樹

② 縛られ娘

「曲者！ 御用だ！」

たまげるような大きな声をあげて文五郎が窓からどなった。

「いけねえ、ずらかれッ」

狐格子が左右にぱっと開くと、ころがるように二人のやくざが飛び出した——と思うと、後も見ずに峠の方へ丸くなって逃げていった。

「ほう……」

阿呆のような声をあげて、文五郎は狐格子の前に立ちはだかった。結綿の髪は無残に崩されて、猿轡をかまされたまま、剃きとら

れた着物の上に湯文字一枚の若い娘が後手に縛られて坐っている。

やくざが逃げたので急いで起きあがったのであろう。

緋縮緬の前がはだけて、真っ白な太腿のつけ根あたりまで見せて震えていた。

（——美しいなあ……）

文五郎は助けだすのを忘れて見とれていた。

後から駆けつけて来る足音にも気がつかないほど彼は熱心な目つきで、娘の姿を見つめている。

棒立ちになったままだ。

「あッ。ここだ、ここだ」
足音が迫った。





③ 情があだ

百姓姿の男が、四、五人飛びこんできた。
「こん畜生ッ。太い野郎だ」
その中の一人が、いきなり文五郎をその場に引き倒すと、拳固をかためて殴りかかった。
二、三が加勢する。
この時、助けられた娘が声をかけなかったら、文五郎はこの連中に半殺しの目にあったかもしれない。



④ 絵師修業

それから暫く後のことである。庄屋の奥座敷に痛む体をさすりながら坐っている文五郎に、この家の主人甚兵衛は気の毒そうに何べんも頭を下げていた。

「申し訳ございません。なんせ女中が真っ青になって、娘が拐われたといつて来たので、みんなカッとなって飛び出しましたものですから……。まったく申し訳ないことをしてかしてしまいました……。……」
「いいって事よ、勘忍するよ」
「いいって事よ、勘忍するよ」

絵かきになろうと江戸へ上る途中の文五郎は、とうとうこの家で痛みをとれるまで静養することになった。その上、主人の紹介で江戸にいる身内が懇意にしている先生に、弟子入り出来るように取りはからってもらい、喜んで江戸へ出た。

当時、江戸の町絵師の中でも、名声の高かった歌川豊春のもとに弟子入りすることができ、名も豊文と名乗って修業をはじめた。

それから三年……。豊文の名前も、少しは世間に知られるようになった。

——が、彼は師匠の絵や歌川一派の絵にも何かあきたらず苦しんでいた。

⑤ 裂かれた絵絹

ある日のこと――

「豊文、ちよつとここへ来い」

師匠の家へ、やっと仕上げた絵を持って批評を頼みに来た豊文を、豊春はおのれの画室

へ呼び入れた。

「なんだ、この絵は！」

「へい」

画室の隅でかしこまっていた豊文は、師匠の顔を見上げた。

豊春は彼の画いた美人画を手にして苦々し

い顔を豊文に向けた。

「こんなものを、よく持って来られたな」

「と、おっしゃいますと……」

「手前はこのごろ少しばかり売れ出したと思いい、いい気になりアがつて……このさまは何だ。これが歌川派の女絵だといわれるかっ！こんな絵は見るのも汚らわしいや」

言うなり、びりびりと絵絹を引裂くと、豊文の眼の前へたたきつけた。

豊文の顔色が変わった。

「師匠、な、なにをなさるんで……」

と、声もふるえている。

「うるせえや、手前に師匠呼ばわりされるほど、まだボケちゃいねえ。口惜しかったら八百八町が騒ぎだすような女絵を描いて見やがれ」

豊春の罵声に、あわてて画室へ入って来たのは、豊春の一人娘のお縫だった。

「まア、お文さん。どうなさったのです？」

豊文さん勘忍してください……父は朝からお酒が入っているの、心にもないこと言っているんですわ……勘忍して……」

「お縫、お前の知ったこっちゃねえ……。さア、豊文！ さっさと出てうせろ！」

豊文は、あまりの権幕に下唇をかねて呆然となっている。





⑥ 娘 心

次第に頭へ血がのぼって来た。

眼が光り、唇がワナワナとふるえ、同時にむらむらと反抗心が湧きあがる。

(くそっ！)

と、思う。——引き裂かれた絵絹を手にすると、ぐいっと豊春を睨みつけた。

「師匠師匠といやア、いい気になりやがって……へん、手前なんか俺の絵がわかってたまるか！」

荒々しく飛び出していく豊文を追って、お縫は外へ出た。

「豊文さん。気を悪くしないで……お酒が言わせたんですから……ね。わたしに免じて許してあげて下さい」

すがり寄って、もう眼に涙をためている。その眼で、じっと豊文を見つめて、娘心が必死にいわせるのだ。



「お嬢さんにやすまないが……今日という今日は勘忍できねえ。破門されたってかまうもんか。——もう、もう二度とお目にかかりませんぜ」

豊文の興奮は、まださめてはいなかった。青ざめた顔で、すがりつくお縫を突きかけると、きびすを返して歩きだしたのである。

「豊文さん」

お縫は、すべなく立ちすくんでいる。



⑦ 盗っ人間答

散らかし放題の部屋である。行灯の灯をかきたてて、豊文は一心に下絵を描いていた。

「駄目だ！」

絵筆を投げすてると、ごろっとその場に仰向けに寝ころんだ。

——と、頭の上に黒い人影である。

「おやっ？」

はね起きて後を見ると、いつの間に入ってきたのか盗っ人かぶりの男が立っていた。

「だ、誰だ？」

「夜遅く入って来る人間だ。聞かずともわかってるだろう」

「泥棒か……こいつは大笑いだ。こんな貧乏絵かきの家へ入って来るとは、手前もよほどあわて者だぜ」

盗っ人は、いっこうおかまいなしに下絵を見つめている。

「うーむ。こいつアすばらしいでさだ」

「へん。盗っ人が下絵を見て感心するたア、こいつは大笑いだ……が、手前にこのよさがわかるのかい？」

「うん、わかる。しかし、まだ拵えごとだ」

「それだ泥棒さん。……今から三年ほど前、

遠州のある辻堂で助けてやった娘の姿だが、その姿がそのまま眼の前で描けりアなあ……金を出して縛らせてくれる女じゃア駄目なんだ——といって、娘を拐ってくるわけにいかねえし」

泥棒相手の愚痴である。

豊文は、片頬を歪めて淋しく笑った。



⑧ 男の約束

奇妙な盗っ人である。——ニヤリと笑った。
「そうか……。どうだ、俺がそれと同じ姿の娘を見せてやろうじゃねえか。え……。手前にやかりあいのねえようにしてやる」
冗談でない声であり、顔であった。
「おい、本当か？」

豊文は、むっくりと起き直った。
「冗談と思うかい？」
「いや、思わねえ。思わねえとも！ 頼む……泥棒さん、おれア恩に着るぜ」
「よしっ」
盗っ人は、一つ大きくうなずいて見せた。
「そうと話がきまれば、二、三日のうちに迎えに来るぜ」



「頼む」
「引き受けた。俺アお前さんの絵が気に入ったんだ。だから、用意して待っているがいいやな」
「有難てえ。こんなくらしで、盗るものもねえが、金ができたらお前の来るのを戸を開けて待ってやるぜ」
考えて見ると、ずいぶん妙な話ではある。しかし、豊文は絵のこと以外頭になく、この奇妙な盗っ人の申し出も、奇妙——と感じるようがなかった。
「頼むぜ」
戸外に姿を消す盗っ人の後姿に、彼はもう一度念を押した。



⑨ 下絵の女

「おい、早く来ねえ」

盗っ人に導かれた豊文は、寮とおぼしき家へ忍び込んだ。——三日後の事である。

「いいか、あの灯のついてる部屋だ。安心して描きねえ。後は俺が引き受ける」

豊文は襖を開けた。

「あっ！」

驚いたのも無理はない。こうこうと輝く百目燧燭の下に、下絵通りの娘が縛られていたのである。



⑩ 悲願成就

「お、お嬢さん！」

それは、歌川小町のお縫の全裸の姿であった。

（てめえなんかに、満足な女絵が描けるか！）

豊春の罵声が耳底によみがえる。

羞恥におののいているお縫の肢体……。

豊文は用意の紙をとりだすと、夢中で描きはじめていた。

出来た！

「お縫さん、逃げておくんないさ」

下絵が出来ると豊文は、お縫の縄を解き、着物を着せてやった。

「出来たな、文の字」

突然の声にふりかえると、そこに立っていたのは、師匠の豊春と、あの盗っ人かむりの男である。

「豊文、よくやった。その意気を忘れるなよ。おれが心にもないことをいったのも、お前にお前だけの絵を描いてもらいたかったからなんだ」

「師匠！ 有難うございます」

「礼をいうなら、版元の若旦那にいうがよい」

盗っ人かむりの男は、版元薦屋の若旦那であり、お縫と組んで、今度的一幕を仕込んだのである。

豊文の縛り絵は、たちまち好事家の絶讃を浴びた。彼がお縫を女房にして、二代目歌川豊春を襲名したのは、その直後である。（終）

裏窓
絵物語
裸形
弁天

絵と文
中嶋喜美

①猪牙が——花川戸から
山の宿、山谷堀にとさしかかった時だ。
「姐御、今の音を……」
「身投げだね」
声の主は、唐棧の半天を引っかけ、髪はじれ
った巻きにした夜目にも色白ない女だ。姐
御と呼んだ船頭は船足をゆるめると波間に浮
き沈みしている白いものに近よって行った。
「早くあげてやんなよ」
「合点だ」
船頭は器用な手つきで引き上げた、見ると
体に一糸もまといっていない若い娘だった。

②春といっても夜の大川へ飛びこんだのではたまらぬ。死んだようになって舟底に仰向きに寝かされている娘の胸から下腹へ、腰から太腿とすっかり水気を拭きとった女は、いきなり帯をするすると解くと続いて下紐をほどいた。着物の前が割れて形のいい二つの乳房が見える。女は躊躇もせず、緋縮緬の腰のものをとりはずすと、娘の体の上へかぶさるようにしてしっかりと抱きしめた。



③あれから一刻ほど経った舟宿の二階で、すっかり生氣を取戻した娘を前に、姐御と船頭が娘の語る話を聞いていた。

娘の名はお京、八丁堀の相模屋と云う油屋の一人娘だ、相模屋夫婦は近頃噂の高い金峯教に凝りだして何をするにも生神様の行者に御伺いをたててもらおうと云うありさまで、商売そっちのけの狂信ぶりだった。最近一人娘のお京に縁談が持ち上ったのでその吉凶を占って進ぜると云う行者の言葉に、嫌がるお京を無理やりに金峯教の本部へ行かせたのが今日の夕刻だった。信者の帰ってしまった広間に一人お京はぼつねんと坐っていた。

④「こちらへ」

白衣の若い男が先に立って階段をのぼって行く後からお京はこわごわついていった。

祭壇の前には鏡や櫛が飾りたててあり、その前に黒い法衣をまとった四十五六のむずかしい顔をした行者——金峯教の生神様と云われる龍善坊吞海が厳然と端坐している。お京は思わず板敷の上に震えながら坐った。

「お手前が相模屋の娘、お京か」

「は、はい」



⑤行者は何か呪文を唱えながら鈴を振り、「わしの眼をじっと見よ、まばたきをせぬようにしてじっと見て……よいか！」

お京は云われるままに行者の眼を見つめている内に心が蕩然となり、腰をふわふわとゆすると静かに立上った。お京は帯を解いた。下締めが足先に落ちると着物が肩からすべり落ちる。長襦袢が続いてはらりと着物の上へ落ちた。お京の手が湯文字の紐を解いた…

⑥お京の顔は能面のように無表情だ。毬をのんだような双つの乳房、豊かな曲線が下腹へゆるやかに流れて謎を秘めたような臍、腰のくびれ、一糸もまとわぬお京の裸身を祭壇の幕の陰や、襖の隙間から食い入るように見つめている眼をお京は知る由もなかった。夢を見ているような手ぶりでお京は宙を見つめながら踊っていたがやがてその場へ倒れてしまった。行者はにったりと下品な笑いを口元に浮べるとお京のそばに近より
 輕輕と抱きあげて
 階下へ……



⑦ふっと深い眠りから醒めた。
 「あっ」

お京は友禅の布団から身を起しかけて驚いて声をあげた。無理もない、催眠術をかけられた後のことは全く知らなかったのだから、今全裸のまま布団に寝かされているのに気がつくと思わずに床の上に坐って辺りを見た。

——逃げよう——
 前後の思慮もなくそのまま廊下へ出た。

⑧「どこへ行く」
「あっ」

思わず立ちすくんだお京の背後から行者のいやらしい手が伸びて、お京の二の腕をつかまえてずるずると引き戻した。

「いやっ、はなして……」

お京の体は行者ともつれるようになつて廊下の雨戸にぶちあたった。お京の体当りで雨戸がはずれると一緒に、お京も庭先に転落した。

夢中ではね起きたお京は行者につかまつてはと思うと無我夢中で暗い庭の中を突走った。二人の足音がその後を追った。



⑨お京

は庭の隅に追いつめられてしまった。大川の水がひたひた音をたてている石垣の上だ。行者の手があわやお京にふれたと思つた瞬間、お京の体は宙に大きく泳いだと見るまに大川の中へ落ちていった……。

お京の話が終ると二人は顔を見合せてにっこりとうなずいた。



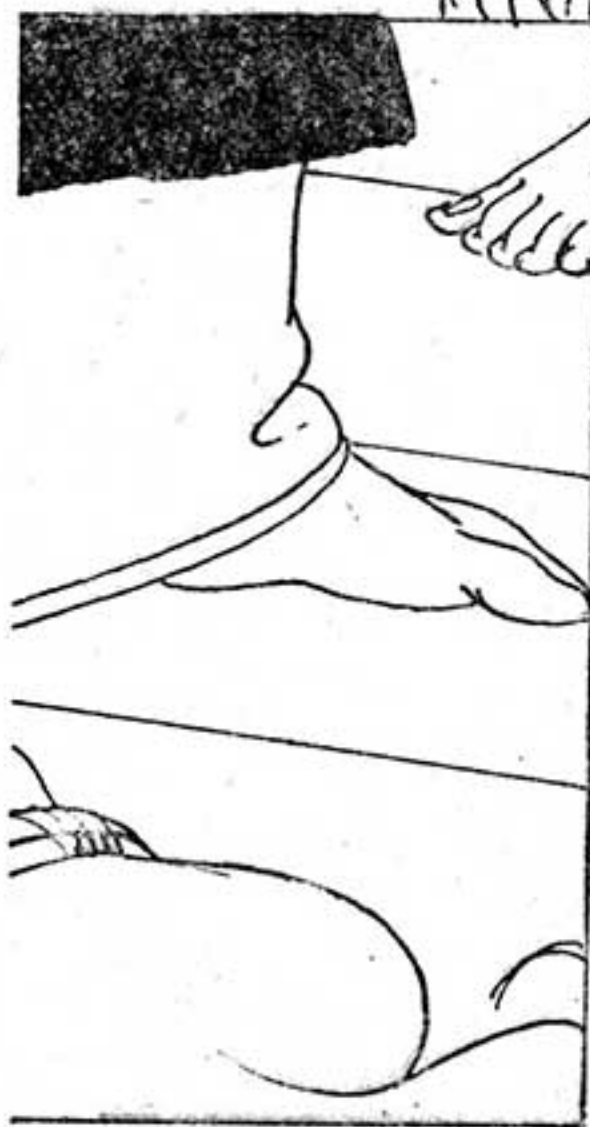
⑩「お手前の名はなんと云われる」
「はい、梶と申します」
行者の前に神妙に坐っているのは例の姐御だ。身のこなしがきわだって美しかった。脂粉の香りに



いささかとまどった面持の行者はやおら呪文を唱え出した……。
「そなたの手は動かぬぞ、なんとしても動かぬぞ」
お梶は苦しそうに手を動かそうとしたが、



自由にならない。それを見た行者は一膝のりだすと、いきなりお梶の左手を握り引きよせようとした瞬間、
「ばか……」
姐御の一喝と一緒に平手打が頬へとんだ





⑪「見そこなっちゃいけないよ、お前なんか
にままだにされちゃたまらないやね」
ぱっと蹴出しが見えたと思うと、女だてら
の大胡坐をかいだ。龍善坊はいまいました
に立上ったと見ると左右の襖を開いて白衣の
男が二人いきなりお梶に組みついて来た。
「あつ、何をするんだ」
二人の男は有無を云わせずむき卵のように
お梶を裸にすると高手小手に縛りあげた。



⑫「この龍善坊に刃向うとは飛んで火に入る
夏の虫だ、切支丹の催眠術で眠らせて置いて
ゆつくり可愛がってやろうぜ」
「ふん、問うに落ちず語るに落ちるとはこの
ことさ、御禁制バテレンの龍達が御上の目を
ごまかして生神様とはとんだお茶番さ」



⑬「畜生、手前は俺を知っていやがったの
か、それを知られちゃしかたがねえ、手前
も仲間に引き入れてやるから覚悟しろ」
と入墨針を持ち出してくると、
「その白い腹の上に仲間になった印にクル
スの入墨をしてやるのだ」
仰向けに引倒したお梶の真白な肌に、入
墨針を刺そうとした時、



⑭ピシッ——石礫が龍善坊の右手にあたって
針がとんだ。

「誰だッ」

と顔を向けた瞬間、その額にもう一つ、

「ウッ……」

額を押えた龍善坊はその場に倒れた。

「姐御、礫の三太がお迎えにきやした」

飛びこんできたのは例の船頭舟の子分だ。

「三太、早く縄を解いておくれ」

「合点で……」

と云いながらも石礫が白衣の男の顔に投げ
つけられた。

お梶は着物を着ると屋根伝いに逃げた。



⑮「姐御、番所に云って置きましたよ」

金峯教の本部は御用提灯に囲まれている。

「相模屋の娘の話で龍達だと思ったが乗り込
んで確かめたまでさ。だがちっとやばい目に
あっちゃまったけれど……」

「その代り奴の処から五百両浚ってきやした
から……それにしても姐御の裸は見料が少し
おたこうござんすよ」

「よけいなことをおいいでないよ……。あた
しや、善人をだまして金儲けをする奴は一番
嫌いさ」

弁天お梶は吐き出すように云った。 終



船 蛮 南 館 女

歌川大雅

画と文

①「わっ、何をする」

「助けてくれーッ」

大波のように、すさまじい叫び声が、せまい小屋の中にまき起った。その大波のしぶきみたいに白く光ったものが、キラキラと小屋の中へなだれ込んだ。

刀だ、槍だ。

小屋の中の人足どもめがけ、ドッと襲いかかった。

「殿の命令だ、黙って死ね！」

侍たちが、わめきながら殺到して来たのだ。

ザーッと、血潮がたちまち壁へハネ飛びくだけ散った。まるで地獄の火のように赤く不気味な血の色だった。ハダカ蠟燭が消えて真っ暗な中になまぐさい風が渦をまいた。侍たちは殿の命令と叫びながら面白そうに人足どもを斬って行く。

②「助けてくれ、さんざん働いたオレ達を斬るなんて、そんな殿様ってあるものか！」
一人の人足が、小屋の外へ走り出した。運のよい男なのだろう、白刃の下をくぐってひた走りに逃げる。

「おお！」

人足は叫んだ。行く手に提灯に取りまかれた女駕籠が見えたからだ。

「もしお助け下せえッ」

人足は女駕籠の前へ身を投げ出した。

駕籠の戸がサラリと開いた。切り髪の女性の白い顔。「ああ楽光院さまだ。お情深かった先の殿様のお部屋さまだ。どうかお助けを！」人足は頭をすりつけた。

「見苦しい、斬り捨てよ」女の唇は冷たく動いた。



③「左京、あの騒ぎは何だ」

若き城主松浦左京守は、家老左京をかえりみて眉をひそめた。

「人間の悲鳴ではないか」

左京は平然と、

「はい、この洞窟の工事にたずさわった人足どもを打ちとっておりまする」

「なぜ、そのようなことを」

若き城主の眉は、いよいよ暗くもった。

ここは、生月島の海岸である。

「下郎の口はさがなきもの、このたびの南蛮船改造の件がもしも幕府の耳に入らばお家の一大事、お咎めを受けるかも知れませぬ。故に一人残らず打ちとらせおります。もはや御心配はありませぬ」

左京はジッと左京守の目をのぞいて、ニヤリとした。



④時代

は徳川

の中期天

下泰平の世

だ。父の宗勝

の急死で、若くし

て平戸の城主になった左

京守は、さっそく許嫁の豊後中山藩岡

の城の息女藤姫の奥入を望んだ。

だが藤姫から（たとえ許嫁とは申せ

まだ親しく言葉すら交したことのない

間、これで夫婦となっても円満にやっ

て行けるかどうか疑問です。そこで挙

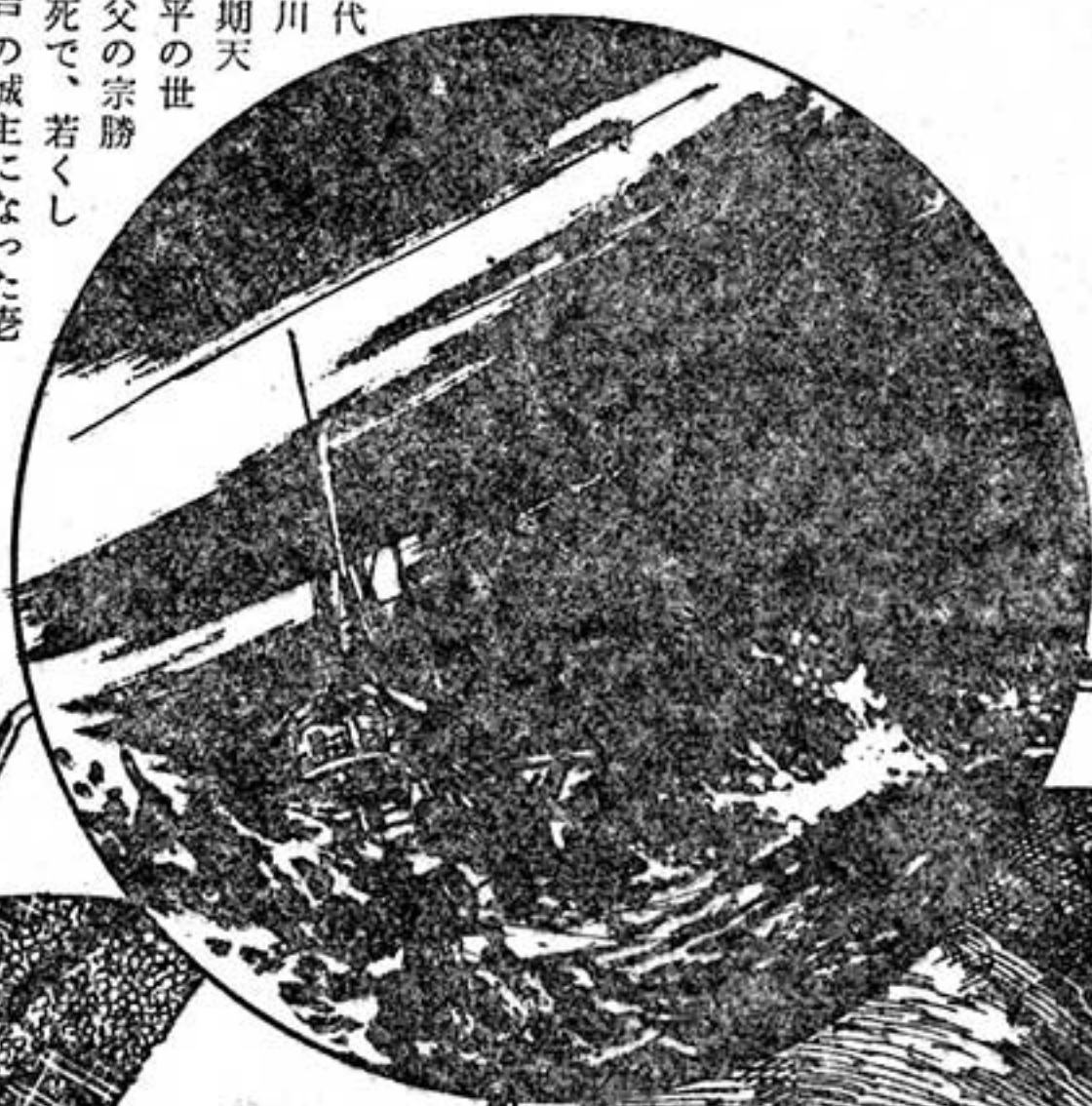
式の前に一度お逢いしてお互いの心を

知っておきたい」と云う手紙が来た。

「もっともだ。是非、あなたが私の城

へ遊びに来られることを望んでいる」

左京守は、そう返事した。



⑤「何かすばらしいもてなしをしてやろう」

左京守が、そう考えている折、ちょうどシメターと云うような事件が起った。

それは、ある嵐の夜——この生月島へ南蛮船が漂着したのだ。烈しい暴風雨と闘ったのであろう、マストは吹き飛ばされ、一人の船員もいない惨状たる難破船だ。

「これは、よいものが手にはいった！」

左京守は、この船を島の洞窟の中へ引き入れさせた。

「左京、私は夢みる如き南蛮の情趣が好きだ。ちょうどよい、花嫁にも見せてやろう。さっそくこの船を改造して南蛮の館とするのだ。立派に飾り、竜宮城のようにしよう。私がどれほど美に對して熱心な心を持っているか、藤姫に見せるのだ」

左京守は、こう然と云った。

「ふふふ、それは一段と面白うござります」

左京は、なぜか意味ありげな笑いを、その

太った頬に浮べた。

実は、胸に陰謀があったのだ。





⑥「この船には、七つの部屋がある、一部屋ごとに黄、赤、青と違った色をぬって飾り、さながら虹の国に遊ぶの心地を味わいたい、どうだ」
洞窟の中へ据えた南蛮船の中を歩きながら、竜崎守は云った。
「ホホホ、すばらしい御趣向。さぞ花嫁さまもお喜びなさいましょう」
後から口をはさんだのは、夜中ながら完成したこの南蛮船を見物に来た楽光院だ。たった今、人足の斬られる所を見たとは思えぬ落ちつきぶりである。
「その一部屋ごとに、よりすぐった美女をおき、舞をまわせるのも一興かと存じます」
と、左京も知恵をつける。
竜崎守は、この太って醜い一番家老の厚い唇から、こんな名案が出るのは奇妙だと、苦笑しながら、
「ははは、そちはなかなかの軍師だ」
「ハハハ、裸女がよろしゅうござりますぞ。殿様はお若い、まして美しき花嫁をむかえられる御身、虹の如き南蛮船にて裸女の乱舞を見たなら、一そう若々しさに満ちあふれ、藤姫さまを満足させるに相違ありません」
「それこそ、竜宮城の美しさ！」と楽光院も口を添えた



⑦「ハハハ、うまく行きそうじゃ」と左京。
「殿とは申せ、あんな青い子供、町のたわれ女どもを船へ乗せ、尻ふり踊りでウンとたぶらかしてやるがよい」
これは、楽光院だ。左京と仲むつまじく酒などくみ交している。ここは彼女が殊勝げに引きこもっている城下はずれの庵室の間。
「殿が殺伐荒淫の暴君だと云いふらしてあるから、藤姫も恐れをなして来ぬのだらうが、婚約の儀が進み、そのうち嫡子でもできたら面倒だ。今のうちに殿を骨ぬきにしてやるのが得策じゃ、そして漂着した南蛮船を洞窟へかくした事を公儀へ訴えれば隠居させられるにきまつている。そこでワシとそなたの間にできた鳥丸を城主にしようとは、何とうまい計略だの」「ほんに、もうお城はわれらの物も同様、アア早く大願成就したいのウ」
「イヤ、先君の急死についてまだ幕府の目が光っている昨今、うっかりはできぬ。いつ隠密が忍び込むかわからぬ。油断は禁物じゃ」
声は小さいが、たいへんな事を相談している。

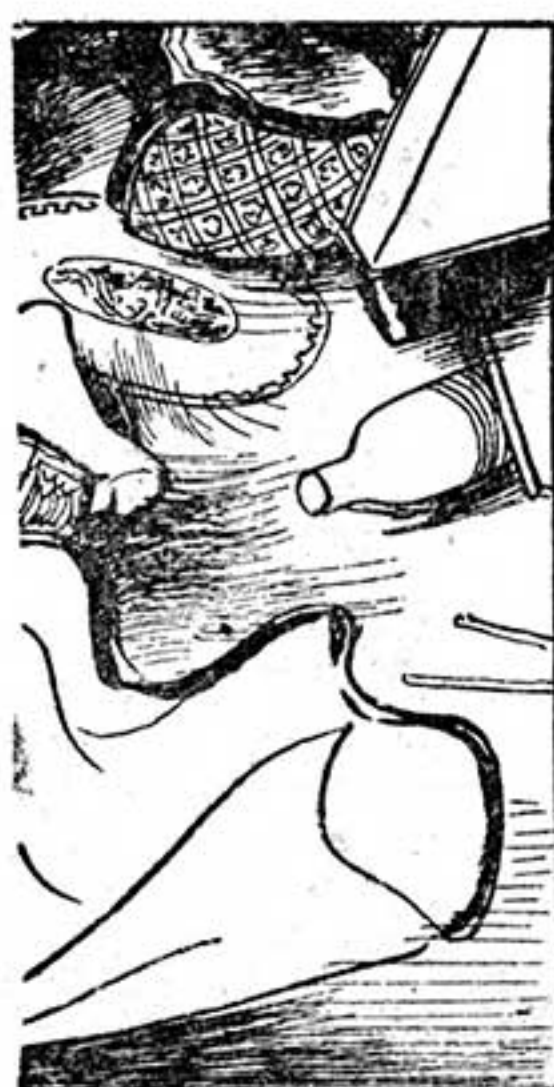


⑧ 隠密！ 將軍は直属のスパイを使って、各藩の秘密をさぐらせる。謀叛を防ぐためと、大名の落度を探り罰を与え領地を取り上げたりする為だ。だからどの大名も自分達の身を守るには隠密を捕え、殺してしまう事だ。スパイと大名の戦いは苛酷残忍、人目につかぬが火の出る如きすさまじさである。男も女も子供も親も苛責なき闘争であった。



⑨ 左京と楽光院の如きは先君に一服もって急死させ、さらに若き城主を悪計をもって追放しようとするのだから、隠密にはいり込まれたら今までの苦心も水の泡どころか首が飛ぶ。左京が壁に耳ありと恐れるのも無理もない。「ホホホ、左京、男と云うものは案外臆病なもの、現在殿にすらわからぬ事が、何で、外からモグリ込んだ鼠のことき隠密にわかるものか。そんな話は、せつかくのお酒がまじくなるぞえ」

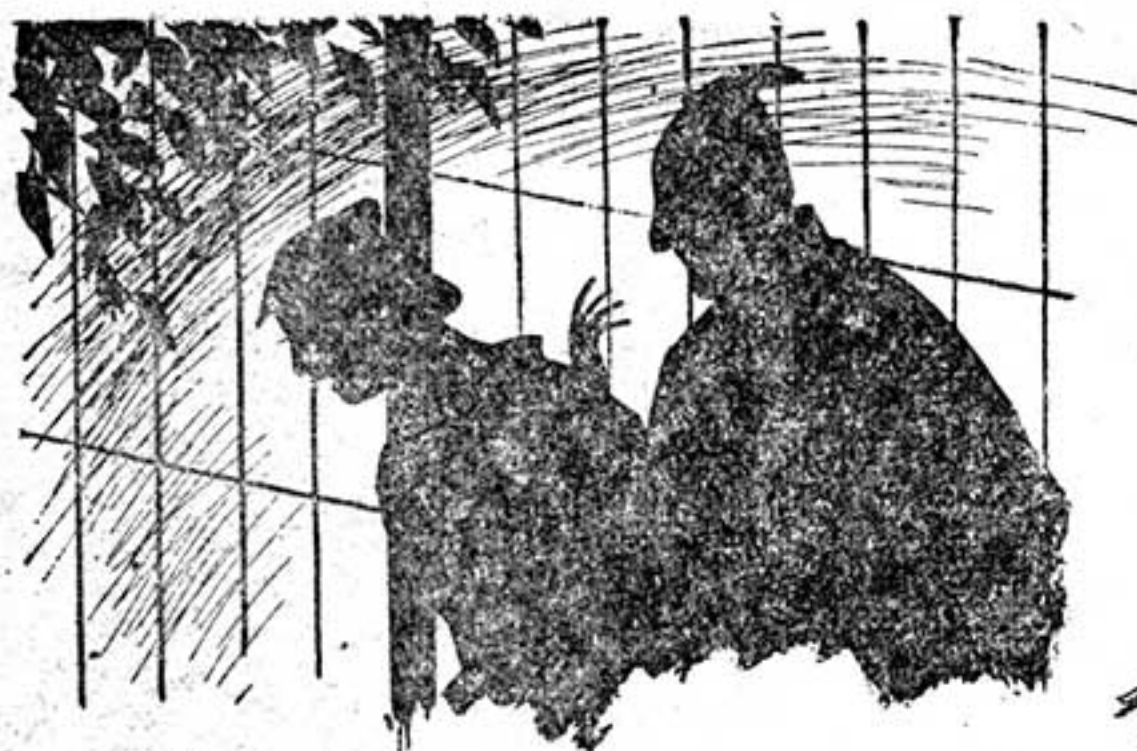
楽光院は、事もなげに笑った。
「なるほど、これは楽光院さまのおおせの通りじゃ、ハハハ、こんな話が肴では百薬の長も水も同然」
「酌をしてつかわすほどに、もっと近う来やるがよい」
ものうげに銚子を取り上げた楽光院。髪は切ってもまだ三十二、三。色香がブンブンと艶めいて匂う女盛りだ。顔のシワはのびしたが左京、目尻のシワはいやらしいまじりに深くなった。
どちらからともなく、いつしか二人は体をすりよせ、ふふと笑った。
と、この座敷の床下に、カサリと動いた一個の黒影。白い顔がくらやみの中に浮いた。
「やっぱり来てよかった。たくらみおるワ」
かすかにつぶやいた声は、どうやら女。
「左京、今夜は帰ることはならぬぞえ」楽光院の淫らな声が、床下の冷たい空気をくすぐった……



⑩ その翌朝、平戸の城下へ旅役者の群が来た。
「おっ、こりやスゲエ女がいるじゃねえか」
町の人々が目をそばだてたが、一座にまじって天女のような女役者が一人いたのだ。

⑪ 「うーむ、成程町の噂さの通りじゃ。江戸や京へ行っても一二を競う美しさだ。今夜わが邸へあの女役者をつれて参れ」
左京は家来に命令した。

⑫「これは御家老さま。お召しいただきました、女役者花之助にござります。何とぞ、ごひいきに、あずかりとう存じます」



⑬「うむ、可愛らしき女。近う寄れ、盃をとらずぞ」
「アイ。」
でも私ごときいやしき女が、お側に参っては、御身のけがれではござんせんか」
花之助ははじらいながらもにっこりと左京にすり寄った。
左京は相好を崩してわれを忘れる。
元来、女には目のない男。



⑭「どうじゃ。そちもいつまで旅役者をしていても何かと不自由であろう。わしの云う事きかぬか。望みの品を与え榮耀栄華のくらしをさせてつかわずぞ。フフフ、可愛い唇じゃ。そのふっくらとした頬はお前の肌の柔かさを物語っておるわい。いつまでもかわいがってやるぞ」
左京は花之助の懐中へ手を入れた、着物の上から見ただけでは納まらず、マリのごとくフクらんだ乳を己れが手に握りしめたかったのであろう。左京の顔はいよいよ好色めいて赤くなった。
「これ、あまりはしたなきお振舞は、御身分にさわりましょうぞ」と現れたのは楽光院。その眉は嫉妬の炎に燃えキリキリとつるし上っていた。
「おッ、これは！」左京の腰はくだけた。



⑮楽光院が現れたので左京もシブシブ花之助を帰したが、楽光院はまだプリプリしている。
「左京どの、せっかくわれらの間の子を城主にしようとするやさき、いやしき女役者にたわむれようとは、アンマリな仕打」
「いやそう怒るナ、これにはチト考えがあるのじゃ」
「ハテその考えとは……？」
楽光院はピッタリ左京に寄りそった。



⑩「ザッとおし寄せる波の響がにぶく轟き、昼なお暗き生月島の洞窟。」

上げ潮を利用して南蛮船を中へ引き入れ、丸太で岩の間に固定させ、今では奇怪な館となったが、さらにその船内は七つの色にぬり分けられ、黄金の間、火の間などと名づけ最後の船尾にある部屋は壱岐守の好みで黒色にぬられ、そこに集められた調度品は、かねて自慢の金色に輝く異國の浮彫に飾られた物ばかり。しかも赤い洋燈の光りに照されたありさまは、「竜神の局」と壱岐守みずから命名したその名にふさわしい妖艶な情緒がみなぎっていた。

他の部屋には、それぞれの女があるいは舞、あるいは唄と技を競う事となった。

藤姫から近日そちらへ着く予定との知らせがあったのに、最後の「竜神の局」にびったりした女が見つからない。

壱岐守は、これぞ画竜点睛を欠くの恨みだとイライラしはじめた。そこへ左京が、「殿、うるわしき美女を見つけてましてございます」

⑪「さっそく連れて参れ。七人の美女があるの南蛮館の中で舞うありさまは絶景である。竜宮に天女が舞い下りた美しさである。」

私は藤姫に最上の美しさ楽しさを味わわせ、私と結ばれた事の幸福さを知らしめたのだ」

壱岐守は、若々しい顔を輝かした。

花之助は、あれから左京の邸にいたのである。行儀作法を身につけると云う名目だが、左京の邸に立寄った壱岐守は、一瞥みて花之助のしとやかさあでやかさに、一日も早く船館へ呼び寄せたいと思った。

「ふふふ、殿はまだ夢みる青二才。花之助を押しつけ色香に迷わせてやるのじゃ。その為にはわしは花之助を口説いたまでよ」

楽光院は左京の言葉に嬉しがり、

「ホホホそうと聞いて私も安堵しました」

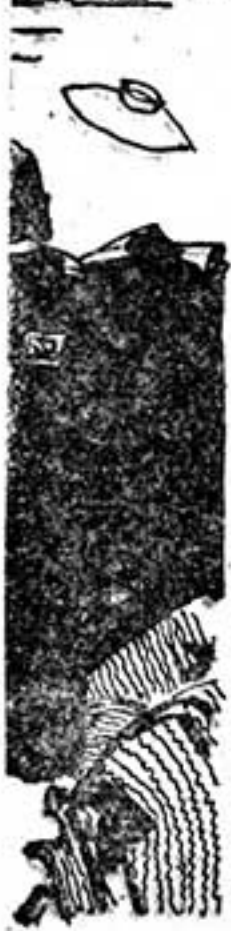


⑫「女なぞ、甘いものじゃ」楽光院と別れた左京は邸へ帰ると花之助を居間へ呼びよせた。

「どうじゃ。わしはお前の出世の為、殿へ正式にお召抱えを願うようにしたが、殿も大喜び。近日お目通りに参上する事となろうが、いよいよお前も大名の側室となって、身にあまる果報を得るかも知れぬ。女役者から大出世じゃぞ」

左京は舌なめずりしながら、

「だが——その前に、せっかく、骨を折ったこのわしに一夜の情もマンザラではあるまい」左京は今夜こそ逃さぬとグイと花之助を引き寄せれば、彼女はニッコリ「嬉しゅうござんす。まあ——コンいかが」と、仕度してあったのか、酒を出した。





②花之助に酌をされて目尻を下げた左京、
「お前を殿にやるのはもったいないのだ。お
前だから聞かせてやるが、今にわしが城主に
なるかも知れんぞハハハ」と得意そうに云っ
た。花之助の目は、キラリと光った。
何刻だったのか——左京はハッと気づいた。
いつの間にか眠ってしまったのであろう、花之
助の姿も見えぬ。左京はアッと云った。



③「連判状がない！」左京の顔はサッと青ざめた、寝てる間になくなって
いたのだ。老岐守を追放する隠謀に組する一味の連判状だ。
花之助に二三杯酌をされたのを覚えていたが——まだ頭がズキンズキン
痛む——アッ毒を飲まされたのだ！左京は突然わめいた。
「うぬ、さては、花之助は隠密だったのか！」
左京は家来たちをどなりつけた。「早く捕えろ、あの女が邸から抜け出
るの知らぬとは何たる間抜けけ！」「ハッ」家来どもはあわてて走り出し
た。「何と云う事！それと申すも、あんな女にうつつを抜かすのが悪い
のじゃ」騒ぎにかけつけた楽光院の眉は、またしても吊り上った。
「女隠密じゃ、あれを証拠と押えられてはわれらの命はあぶない、早く打
ちとらねばならぬ！」左京はもつれる舌で叫んだ。
「御家老、あの女は老岐守の下へかけこみ、殿と一緒に生月島へ渡りまし
たぞ」
「何！殿と一緒に——うむ、それもよし」左京はうめいた。



④暗夜にまぎれて、黒ふくめんが生月島へおりた。大洞窟
の南蛮船を襲う左京一味である。
「かまわぬ。あの船へ火をかけ、殿も女も共に焼いてしま
え。公儀へは殿が発狂してかかる不始末をしでかしたと申
し開きをするわい」
左京のこの恐しい言葉こそひらめく白刃より凄かった。

⑤左京に眠り薬をし
かけた毒酒をのませ
た女役者花之助は、
ホホホと笑って連判
状を懷中に抱きしめ
た。老岐守の後に従
いながら、
「やっぱり、私が来
てよかった」
彼女は人知れぬ謎
の微笑を浮べていた

②「まあお殿様、なんとすばらしいお部屋でございます。」
私はこのような美しい所へ来た事はございません」
彦岐守と共に、南蛮船最後の黒色の一間「竜神の局」へ足を
入れた花之助は思わず叫んだ。
「これこそ私が迎えようとする花嫁のための宮殿なのだ。お
前はここで踊って、わが花嫁を喜ばしてくれよ」
彦岐守は、満足そうに云った。



③「私につかれ」
彦岐守は、せまり来る黒ふくめんを斬り
はらい、花之助を抱えると船から飛びおり
た。満潮だ。真赤に染った海水は見るまに
黒い底へ二人を呑みこんだ。が、どうやら
彦岐守は岩角で足を打ったらしい。

④「殿様し
っかり私に
おつかまり
遊ばせ」花
之助は彦岐
守を助けた。

⑤花之助はジッと彦岐守を見つめた。
「ハハ、なぜそのように、わしを見るのだ」
「申訳ありません。でも、殿様のようにお心づかいのおや
さしい方には、どんな女も心を動かされるもの」
花之助はため息をついた。
「いうな。今申した如く、私は藤姫と云う妻をむかえる身
なのだ」
こう云った時、不意に洞窟の中に荒々しい叫びが起った。
女隠密と彦岐守を一挙に打ちとらんと黒ふくめんが乱入し
て来たのだ。彦岐守のわずかな供の者は倒された。
「ややっ、船館へ火を掛けたな！」
彦岐守の顔が赤く染った。
カッと燃え上った炎が気味わるく洞窟内を照した。火の
手は早かった。黒煙が渦巻いて二人を押しくるんだ。



⑥彦岐守と花之助は、やがて一そう
の舟へ救われた。
「殿様、左京と楽光院は殿をほろぼ
しお家乗とる計画でございますまし
た。証拠はこの連判状でございます」
花之助は肌にしっかりと秘めてい
た巻物を取り出した。



「うーむ、驚いた事だ。だが、美しい貴女が隠密だったと
はさらに意外な事だ。おそらく幕府の命令で我が身辺へ忍
び込まれたのであろうが、海中で私の命を救ってくれた貴
女、思は忘れぬ。江戸まで無事にお送りいたそう、我が不
行跡については、ありのままに將軍へお伝え下されよ」
彦岐守は、いさぎよく服罪する決心であった。
「いえ、殿様。この船にいる者は皆私の家来。ひいては殿
の御家来とも申すべきもの、南蛮船の事は他へ洩らす者は
ありません」花之助は意外な事を云う。
「えっ」「実は私は公儀の隠密ではありません。殿様にお
逢いしようと思ひました藤姫でございます。殿の事につき
いろいろ怪しき噂が伝わり、私は心配のあまり女役者に身
を変え、あるいは床下にひそんだりして調べましたところ、
すべて左京一味のたくらみとわかりました」
「オオ、藤姫のか！」彦岐守はバツと目の覚めた心地で
改めて花之助を見つめた。
ぬれた肌を拭くため裸になったが、もはや何もかくす必
要もない二人である。いつしか手を握り合って、ニッコリ
して、また、力をこめて握りなおしたのである。

黒猫小町

絵草紙



悪党二人に見込まれたお銀は、土蔵に籠
って愁いに沈む。膝の黒猫は何かを知っ
ていた。若い人形師の悲恋成るや否や？

歌川大雅 文画

雨と猫

①びしょびしょ、毎日ふる雨もいやだが、あの黒
猫の鳴き声は、もったいやだ。

陰にこもった妖婆のうめくようなダミ声だ。

ヒステリーを起して、腐った棺桶みたいな長屋の古井
戸へ身を投げようとした、大工のかみさんが喘ぎ喘ぎ云
った。

——あ、あの化猫の鳴き声を聞くくらいなら、いっそ、
井戸の底へはまりたいんだよう。

そんな、黒猫の鳴き声が降り続く雨の夜に聞えて、こ
の裏長屋は黒黒と、うずくまっていた。

聞えるのか、聞えないのか、黙々と仕事場へやつれた
影法師をうつしている若き人形師、米次郎は首をふって
つぶやいた。

——あの長崎屋の黒猫が、ひらりと飛びのってくれる
ような、お銀さんの人形を作りたい





②—お銀の猫がまた鳴いてやがる、うるせえなア。みけんに綱轡筋を立てた浪人団十郎は、グイと手酌であおって息を吐いた。長崎屋の奥座敷。

あんだんの明りが、この男の顔の刀傷へ深い影を彫っている。団十郎はさっきから、土蔵の方を気にしていた。「——ふん、確かに黒猫は魔除けだ。角エ門はあの猫がこわくてお銀に手が出せねえのだ。あの恨めしそうな猫の目、耳の底にこびりついた断末魔のような鳴き声、おれ達の悪事を見ていたのがあの黒猫だからなア、善兵衛ごろしの現場を見て、その血をナメて、お銀の寝床へはいり込んだ猫だからなア。角エ門は、善兵衛を殺してこの家の主みてえに納まった。そしてお銀まで手に入れようとしている。が、猫がこわくて、それこそ、手前の方が猫なせ声をしてやがるんだ、おもしれえなア」

おもしれえなアと、しゃがれた声で笑った団十郎。ぐびりと酒を飲みほした。

その通りだ。土蔵の二階で、角エ門はお銀の抱いている黒猫がウス気味わなくて、固くなっていた。

「なア、お銀」

と、上目を使いながら呼びかける。どうやら額には汗がにじんでいる、が、お銀は冷たく黙ったままだった。

お銀



④黙々と人形みたいに坐ったお銀の膝で、黒猫は真ッ赤な口を開いた。

③「お前ひとりじゃ淋しかろうと、あたしアこうして来てるんだよ。何かして遊ぼう。投扇興がいいか、それとも草双紙を読んでやろうか、そんなに黒猫ばかり抱いて毎日泣いていちゃ体に毒だよ。もう二度と悪者がはいらぬように、ああして団十郎さんと云うお侍まで、家に置いてあるのじゃないか」
ここまでしゃべった角エ門は、不気嫌になって口をつぐんだ。また黒猫が鳴き出したからだ。

——オレは、お前が善兵衛をころしたのを見ていたのだゾと、あざ笑うように鳴く猫だ。角エ門の脊すじに、ゾッと冷たいものが走った。

⑤角エ門は、長崎屋善兵衛のいとこである。角エ門は善兵衛の娘お銀の美しさにはれて毎日遊びに来たいのだが、素行の悪い角エ門を嫌う善兵衛は、逢わせようとしめない。
角エ門はお銀が欲しかった。自分をきらい善兵衛が憎かった。だが、そのために殺そうとまでは考えていなかったのだが——



⑥ 今から二十日ほど前の夜の事だ。角エ門は賭場で知りあいの悪浪人団十郎としめし合せ、この長崎屋の家へ盗人はいったのである。

お銀に逢わせぬ腹いせに、善兵衛がコツコツ貯めこんだ金を奪ってやろうと、そんな気持ちで団十郎をさそって、忍び込んだのだった。

だが、意外な事になってしまった。

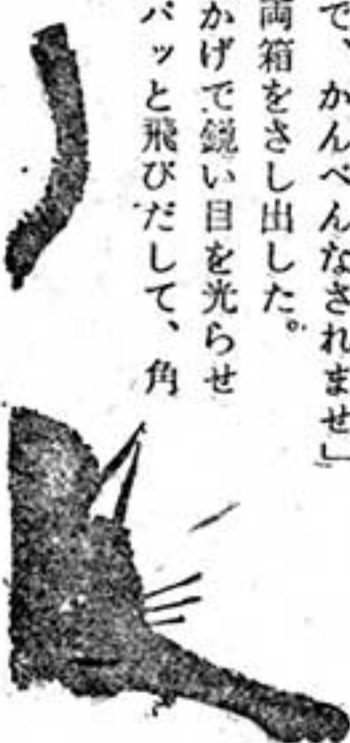
盗賊の一人がまさか従弟の角エ門とは知らぬ善兵衛は、一人娘の身にもしもの事があってはと、お銀の寝室に近よらせないために、自分から土蔵の方へと、案内した。

「見かけはよさそうでも、苦しいのは手前どもの身上、どうかこれで、かんべんなされませ」

善兵衛は、千両箱をさし出した。

その時だ。物かげで鋭い目を光らせていた黒猫が、パッと飛びだして、角

エ門の覆面へ爪をかけた。



⑦ 「あっ、何をしやがる！」

べりっと、黒ふ

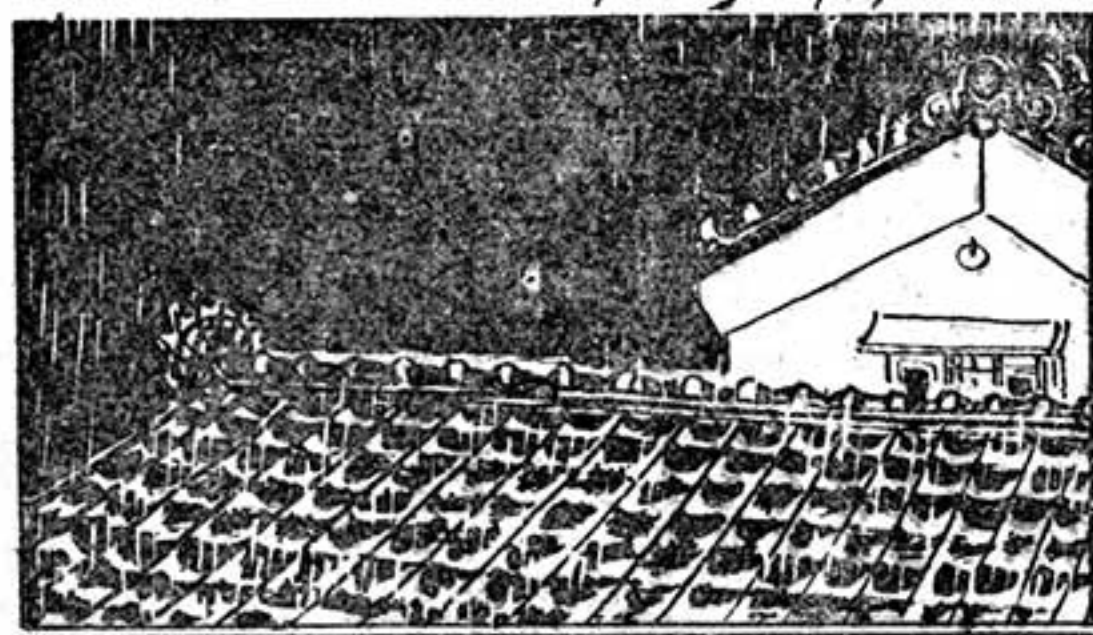
くめんをはがされた角エ門はあわてた。猫を斬るつもりで、力まかせに振った白刃の下で「うわっ」と善兵衛がのけぞった。

「うう……お、お前は、カッかくえ……もん！」

「おい、面を見られたら仕方がなからうぜ」団十郎も横からズブリと大刀を善兵衛に突き立てた。ヒィ——とかすかに息が聞えた。

⑧ 「いけねえ、猫のためにエライ事になった」角エ門は青くなつて小判をねじこむと、逃げ出した。

今、お銀の抱いている黒猫がそれなのだ。善兵衛の血を浴びた猫、不思議とお銀は可愛かって離そうともしない。



⑩「なア団の字、おれはアノ化け猫が気味わるくていけねえ。お前一つ、首を締めちゃくれめえか」

やがて団十郎のいる座敷へ戻って来た角エ門は、頬をひきつらせて云った。
「ふうむ。まア一杯のめや。なんだ猫一匹ぐらい。お前だって人を斬った男じやねえか。よしよし猫は片づけてやるが、お銀は近頃めっぽう美しくなったな。町しや云ってるぜ、黒猫小町とな」

「黒猫小町? ケッ、好かねえ名だ。馬鹿な娘さ。あつたら花の盛りを真ッ暗な蔵の中で黒猫と暮してるなんて、アアいやだいやだ。あの化け猫の鳴き声を聞く」と地の底へ引きこまれるようだ、この家は化け猫にトノつかれているんだ」

⑪「フフ おめえ

なぜお銀が蔵の二階に引ノこんでるか。まだ気がつかねえのか。裏の長屋に若い人形師がいるだろう。あいつが土蔵の窓の下を通るのを、お銀は楽しみにしてるんだぜ」

団十郎はイジわるそうな目で、角エ門の顔をなでた。

「ナ、何だって。人形師? オオ、あの米次郎か!」

角エ門は、ハッとなった。

⑫「ちよっとした男前じやねえか。なア角エ門、お銀はアノ男にホノ字かも知れねえなア」

「あんな貧乏くせえ青二才にか! ハハハ」角エ門はムリに笑った。

「ハハハ」金の有無を気にするようでは恋じやねえよしかし、お銀だってこの長崎屋がもうじき人手に渡る」と知っているんだぜ」

夜の人形師

⑬その雨の夜、米次郎は、やはり長崎屋の土蔵の下へ行ってみた。
「猫が鳴いている、いつもの通りお銀さんが見えてくれるかしら」
米次郎は、いやな猫の鳴き声すら嬉しかった。お銀の胸に抱かれて鳴いていのかと思えば、あの濁み声にも何かしら、謎があるような気がする。お銀が口に出して云えない言葉が含まれているように思える。そう思うと、たまらなくなつて、暗い路地に立って、ジッと土蔵の二階を見上げた。
雨が、冷たく顔に降りかかった。

⑭お銀の顔が見えなければ、何年でも動かないような米次郎だった。お銀に魂をうばわれたと云えばそれまでだが、どうにもならぬこの気持は、お銀にもわかつて貰えろと彼は若い胸をふくらませるのだ。米次郎にはもはや両親はなかった。お銀もむかし母を失い、また父を盗賊に殺され一人になった。しかも、意外に商売は不振で、多くの借金のかたに家財道具は持ち去られ、あの土蔵の中も今や空らしい。使用人にもヒマを出し、近頃は目つき悪い角エ門と云う男が腰をおろし、どうやら近く家まで来ると云う噂、お銀の悲しい心は米次郎にはよくわかるのだ。自分ならキントお銀さんの心の痛手を慰めてあげるよ、と米次郎は、ひとり心に誓っている。

——と、暗い土蔵の窓に白い影が

ふわりと浮んだ

「あつ、お銀さん!」米次郎の足はふるえた。やっぱり私の足音を聞いてのぞいてくれたのだと、嬉しくて嬉しくて、頭をさげた。

すると、その頭の上へ、

「おい! そこで何してるんだ。盗っ人か!」と不意に、荒々しい声が落ちた。

「あつ」と米次郎は、よろけた。

団十郎が、肩をいからして立っていた。黒い大刀を押えて……



⑩わが家へかけ込んだ米次郎は、あわてて心張棒を固くかった。

恐しい……団十郎、角エ門。なぜか悪魔のように感じられる。米次郎は行燈のそばへ坐っても、まだ落ちつかなかった。

「もしや、毎晩土蔵の下にこっそり行く私を嫌ってお銀さんが団十郎に迫いはらわせたのではあるまいか——」

長崎屋は商人だ。私みたいな人形作りでは、つり合ね縁、本当は私の片おもいだっただのだ」そんな考えが黒雲のように胸一杯にひろがった。そう思うと急に力が抜けて、うなだれたが、

「お銀！」うめくように叫ぶと、米次郎は押入れの唐紙を開け、首を入れた。そして、ズルズルと中から引き出した大きな物をごろりと行燈の側に寝かせた。等身大の人形であった。

時目をパツチリ開けて、朱唇に艶があつて、ふっくらとして、しかしどこか淋しげな顔——と云ったその人形の頬へ米次郎は、頬ずりして並んで横になった。

「お銀！」と、人形に呼びかけた米次郎は、耳まで赤かった。彼はひそかに、お銀に生きうつしの人形をつくって居たのだった。

自分の魂こめて作ったこの人形は、行燈の光の中にまるで生きてゐる如く、微笑んでゐる。

その朱唇は嬉しげに今にも動きそうだった。

米次郎は、たまらなくなつて、

「お銀、お銀！」

と、熱い息をふきかけ、抱きしめ、力がグッと両手にみなぎるのを、もう押える事もできなかった。

人形を抱いたまま、情熱に燃え魂がとけて言葉もなくなつた。

油が切れたか、チラチラと火影がゆらめいて、消えた。

……

お銀の猫の音が、細く雨の夜に流れていった。

やがて。

ぐったりと米次郎は身体を起した。涙にぬれていた

「アア、駄目だ。あんな恐

しい男がいては、とうてい

私などお銀さんと夫婦にな

れるはずはない。私なんか

いっそ、この人形を抱いて

川へ身を投げた方がいいの

だ。オオ猫が呼んでいる」

彼は、黒猫の声にさそわれ

たのか、人形をかかえると、

ふらふらと立ち上った。

⑪「おい角エ門。今ヘンな声をしたようだったナ」

酒を呑んでいた団十郎が、フト眉をひそめた。

「え？」「ホラ、聞えるじゃねえか。おかしいな、誰か

お銀と話している奴がいるんだ」「おう、聞える。オレ

達のほかは誰もいねえこの家に、いったい誰だ！」

「たしかに土蔵の方だな」

「あかりを貸しねえ」

角エ門も団十郎も、妙にゾクリとなつて、同時に立ち上った。



⑫「おや？ 蔵の戸が開いてるぜ」

「うーむ、やっぱり誰か入つたに違えねえ」

二人は、ソノと息をこらした。

「あれは、米次郎の声じゃねえか」「なるほど彼奴だ、

そうだ、先刻彼奴を下ナリつけに外へ出た時、うっかり

木戸を閉めるのを忘れたが、油断できねえ奴だな」

「ちようどいい。夜中土蔵の中へもぐり込めば立派な盗

人、二度とお銀に寄りつかねえように、腕の一本くらい、

ヘシ折ってやろうよ」

角エ門はいきり立って二階へ上つて行つた。

「そうさな、米次郎にお銀をとられちゃ、せっかく善兵

衛をバラした甲斐がねえと云うモノだ」と団十郎。

「ふふふ、角エ門に痛めつけられた所を救つて、お銀の

心をなびかせようと云うのがこの団十郎の胸の内さ」

大川端の怪

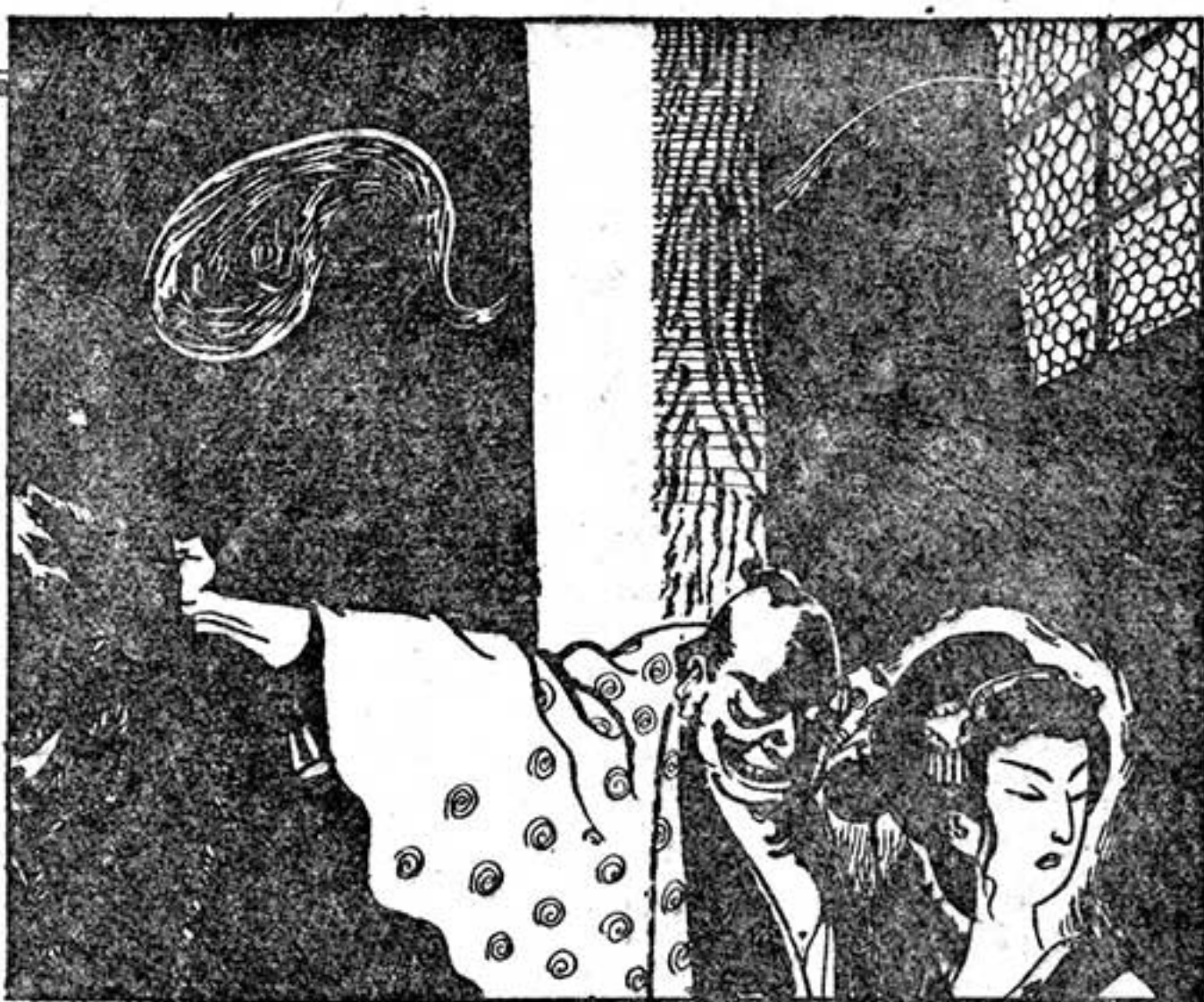
⑮「お銀——かくしたってダメだ。今ここに米次郎が来ていたろう」

角エ門は何べんも、こうどなったが、お銀は黙っていた。肩をこづいて「やい出せ、米を出せ、あいつは盗人だ。人の家の土蔵へはいり込む、ふてえ奴だ」

「いるかいな、探して見ればわかるでしょう」

お銀の声は冷たかった。角エ門には、それが余計怪しく思われた。想う男をあぐまでかくす気かと、胸の中は煮えくりかえった。

確かに、この耳で米次郎の話し声を聞いたのだ。畜生！逃げようたつて逃すものか！



⑯「オオ、探すぜ、引ッ捕らえてお爺の目の前でナブリ殺しにしてやろうか。ふん、それともお前を痛い目に逢わせてやろうか。かくれてる米次郎が飛び出さずには居られねえほどな。お前と米が何か窓の所でゴソゴソやってるのを、ちゃんと知ってたのだぞ」

角エ門は、いまいまだに悪タレたが、お銀は黒猫を抱いて横をむいてしまった。角エ門はやにわに、黒猫のエリ首をつかんだ。

「うーむ、読めた、この化け猫に恋文の使いでもさせてやがったな」

「アレ、何をしますのです。かわいそうに、クロは私の大好きな猫」

「やかましい」角エ門が、黒猫を壁に叩きつけようとした時、猫は陰にこもった、ゾツとする声で鳴いた。



⑰「あっ、その声、お父ッつあんが強盗に殺された時、鳴いた声と同じだワ」お銀は宙をにらんで口走った。

「ゲッ、何だって！」

角エ門はドキッとなった。

「思い出すワ。あの時、クロはお父ッつあんの血を浴びて真ッ赤になって、私の寝床へはいって来て、鳴いたのよ」

お銀は角エ門の手から猫をうばい、て「クロや、お前、お父ッつあ人を殺した憎い奴を知ってるんだねえ、あたしに教えておくれ」

と、頼りした。

「そ、そんなこと、猫にわかってたまるけえ」角エ門はニガリ切って、

「もういいんだよ、米次郎さえ居ねえとわかれば、オレの気もすむのさ。なアに、さっきの話し声はオレ達の聞き違いかも知れねえ」と声をやわらげ「だがお銀、お前、米次郎にホレてるのではなかったかい」

「知らないわ、そんなこと」

「まさか、あんな貧乏人を想っちゃ居めえな。何しろこの長崎屋を立てなおすにア、金のある男を頼りにしなけりやならねえぞ。そうだ、あの米次郎が好きじゃねえと云う証拠に、今夜、一番おれのたのみを聞いちゃ、くれまいが」

②「ええ？」

お銀は、角エ門のイヤらしい目つきにゾッとなった。

「まあ、隠してもはじまるめえ。実は、オレはトウからお前が好きなんだ、善兵衛が死んでから、この店もすっかり傾いたが、オレがお前と夫婦になりや、立派にもりかえして見せるぜ。」

この角エ門は商売にかけちゃ、お前なぞ知らないがたいしたものさ。だから、お前がオレの云うこと聞くなア親孝行てえもんだぜ」

「アレ、何をするんです」

「やわらけえ手だなア。エエイ！ そんな化け猫すててしまえってんだ。そのかわりオレを抱きねえってこよ。その方がズイと嬉しかろうぜ」

「イヤです！ あたしはお前がこわい」

お銀は、夢中になって角エ門の腕の中でもがいた。

「ア痛ッ、お銀よくも噛みついたな、猫みてえに。なせ、そんなにオレをにらむのだ」

角エ門は、フトお銀が自分を父の仇と知っているのではないかと疑念がわいた。急にお銀がこわくなって、押し倒すとありあう縄でしばってしまった。

「許して」お銀はもたえる。

「ふふ、どうだ。こうなったら、もうオレのものさ。女なんてタワイもねえ。もう半刻たたねえうちに男のものになるんだからなア、ハハハ」

②「ひーッ」

耳の迷い

か、米次郎はハッ和我にかえった。確かに今、自分の抱いたお銀の人形が悲鳴をあげた。この人形と心中するつもりでふらふらと雨の中を、大川端まで来たところだった。その人形が突然声をあげた！ 米次郎はゾッとして人形の顔をのぞき込んだ。雨の夜だ。くらい。だのに人形の顔は白くボウと輝いている。しかも、一そう悲しげだ。いや、苦しげだ。

「うむ、お銀の身に何かあったに違いない。あんな恐しい男に取りまかれてるんだ。よし助けに行くぞ」

米次郎は、人形を物影に置くと、死ぬ気になりや誰もこわくねえと、走り出した。河岸から長崎屋はすぐ近くだ。黒々と雨の中に土蔵がそびえている。

③「おい角エ門、ちょっと来てみろ」

あわたたしい団十郎の叫び声。お銀をしばったまま角エ門は下へおりた。

「何だ、うるせえな」「何てもいい。見てみねえ、善兵衛の幽霊が出たぜ」「ケ、馬鹿にするねえ。幽霊は箱根からこっちはいねえとよ」

「いや本当なんだ、その庭の隅で——お銀と名を呼んだんだ。もしかすると、さっきの話し声も米次郎じゃなく、善兵衛だったかも知れねえな」「ふーむ、そう云やあ、蔵の中に米次郎はいなかったぜ」「ええ、酒でも引っかけなくちゃ、気味わるくて！」

「うむ」と角エ門も、座敷へかけ込むと、酒を立呑みしたフフと団十郎はホクノ笑んだ。お銀を角エ門にとられたくないから、幽霊の話なんか持ち出したのだ。これからせておいてサテお銀はオレが頂くかな、とニヤニヤし「おい、心配だ、お銀の様子を見て来てやるぜ」と土蔵の二階へ上ったか——

「角エ門！ お銀かいねえー」「ええっ！」かけつけた角エ門は「オオ逃げたな、縄が落ちてる。猫もいねえ」と立ちすくんだ。「いや、鳴き声が聞える」団十郎フト窓からのそいたが、ア、と叫んだ「裏の河岸にお銀がいる、ノレ猫の鳴き声のする方だ」

「み、身投げでもする気か！」外へ走り出た二人は、近くの大川端にたたずむお銀を抑えようとしたか、その足元へ黒猫！ ノ、としたはずみに、お銀はのめって川へ落ちてしまった。無言だった。霧みないな飛沫。





②「ああっ」角エ門は、あわてて手を差しのぼし闇をかきむしった。不思議だ、黒い夜の川に流れるお銀の身体は、にぶく光っていた

妖しい美しさだ。お銀は、花のように流れて行く……

「しまった！」角エ門も団十郎も、足がすくんだ。ザーと雨が音を立てる大川端。また気味わるい黒猫の鳴き声。二人はぶる／＼と身ぶるいした。黒猫が、お銀の上に乗って流れて行くのが、はつきり見えたのである。背白く光る目であった



③「畜生！ みんな、あの北け猫のタタリなんだ」しばらくして、角エ門はこう呟いた。「おれ達が善兵衛を殺したのも、お銀が川へ落ちたのもみんなあの猫の仕業なのだ。そうだ。おれはアノ北け猫を引っつかんで川へ叩き込み、お銀を助けて来るぞ」角エ門は着物をぬこうとした。その時、キラリと一瞬、団十郎が無言で、白刃をひらめかせた。

「うわーッ、ううーむっ、何をしやる！」

「ハハハ、お前ごときに、お銀を渡してたまるか。お銀は、おれが助けて女房にするから貴様は大川端の川底で、黒猫と一緒にくたばるがいいのだ。貴様のようなガマ蛙に、お銀はもってエねえさ」

団十郎は、もかく角エ門を尻目に川端へ立って、闇をすかした。

④「お銀は、落ちたはずみに気絶したと見えるわい、へへ今すぐ助けて温めて介抱してやら。あんなイイ女を見殺しにしてたまるか」

だが、そう云った団十郎も、ウツと息を引きつらせて川へのめり落ちた。その胸中に、角エ門がグサリと短刀を突き込んでいた。「や、や、やアがったな！」二人の男はヒトデのように手足を動かし、一つの塊りとなって、沈んで行った。川の底まで、黒猫の鳴き声が伝わって来た……

⑤——その翌朝。雨はあがって、明るい。お銀は、若き人形師米次郎の家で、嬉しそうに笑っていた。

「あの二人の悪者は、川へ落ちたお銀さんを、私の作った人形と知らずに、殺し合った。自業自得さ、私が土蔵の中で縛られたお前をここへ連れて来た間にね」

「でも、どうしてあなたの作ったお人形が、大川端にあったのしょうね」

お銀は、不思議そうだった。

「正直に云うとね」

米次郎は、まじめな顔になると、「実は、とてもお前と夫婦になれないし、あきらめて私はお前の生き人形と心中するつもりで、川端へ抱いて行ったのさ。だが、奇妙なことにその人形が悲鳴をあげた。私は人形をそこに置きざりにして、お前を助けに行くと云う訳だ」

「ちょうどその時、私はあなたの名を心に呼んだのでしたワ」

「不思議なことだね、しかし恋をする、いろいろな奇蹟があるものサ」

「私達二人の心はずっと前から、結ばれていたのですものねエーでも、人形と一緒に」



流れた黒猫はどうしたでしょう。「誰かに拾われたらうよ。今日からは、私がお前の猫になってあげようね」米次郎は何かしら、あの黒猫がなつかしくて、一声二声、鳴き声をマネしたのである。(完)



★美人になる秘薬を発明した
せむしの醜女マミ博士の物語！

PICTURE STORY

The LIP of Dr. MAMI

BY 歌川大雅



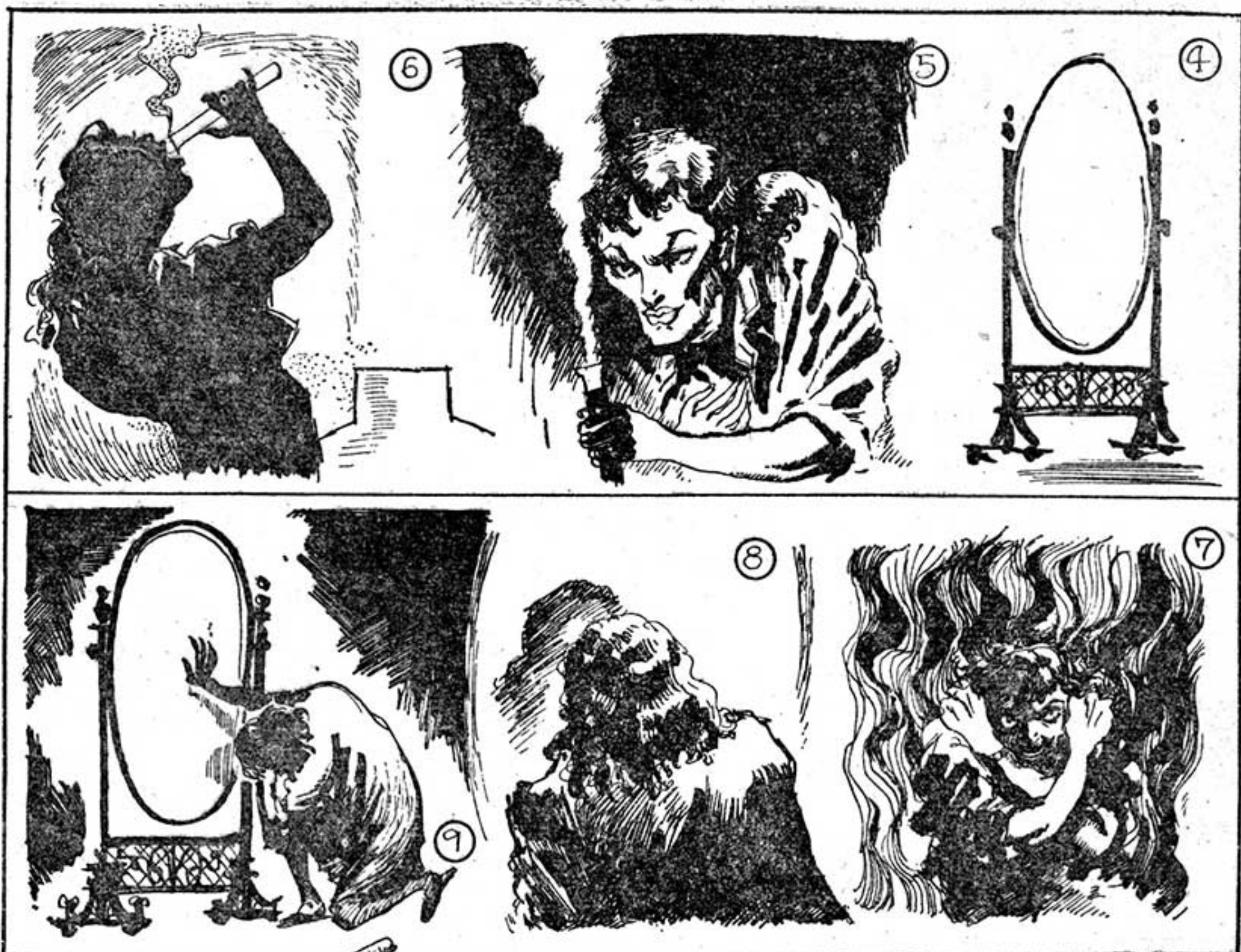
①

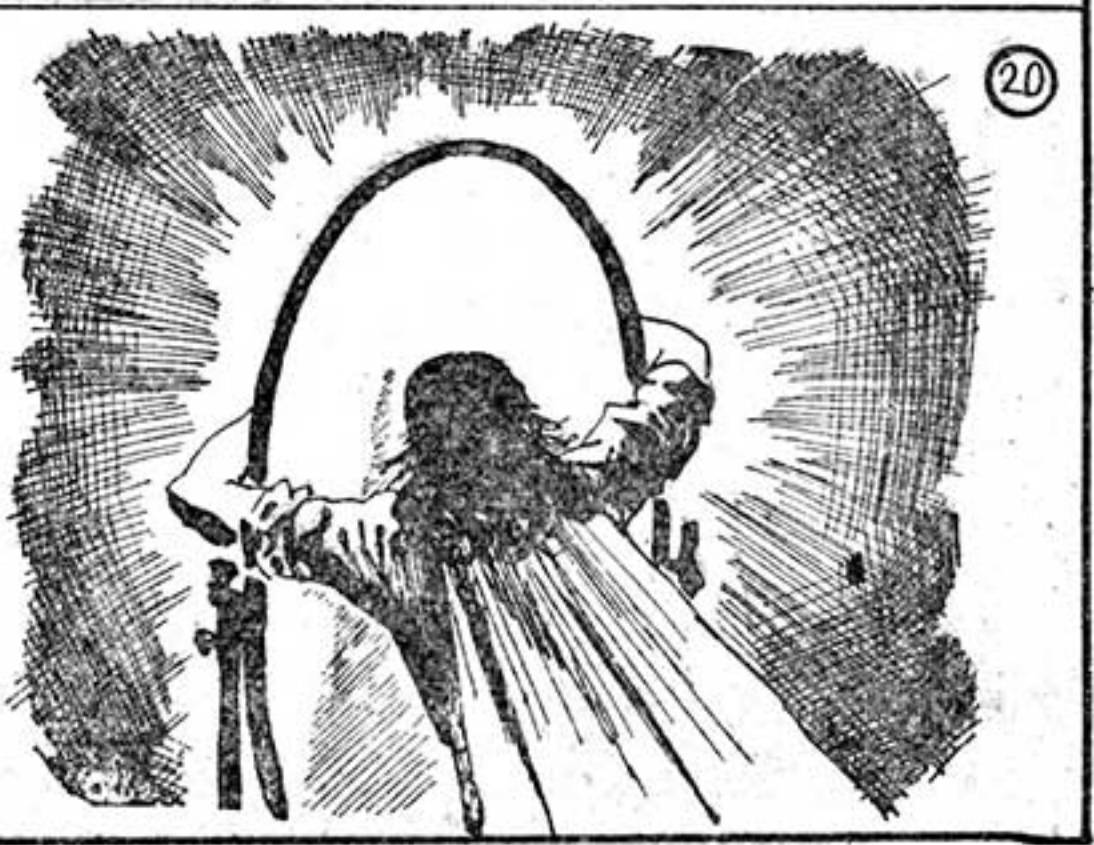


②



③

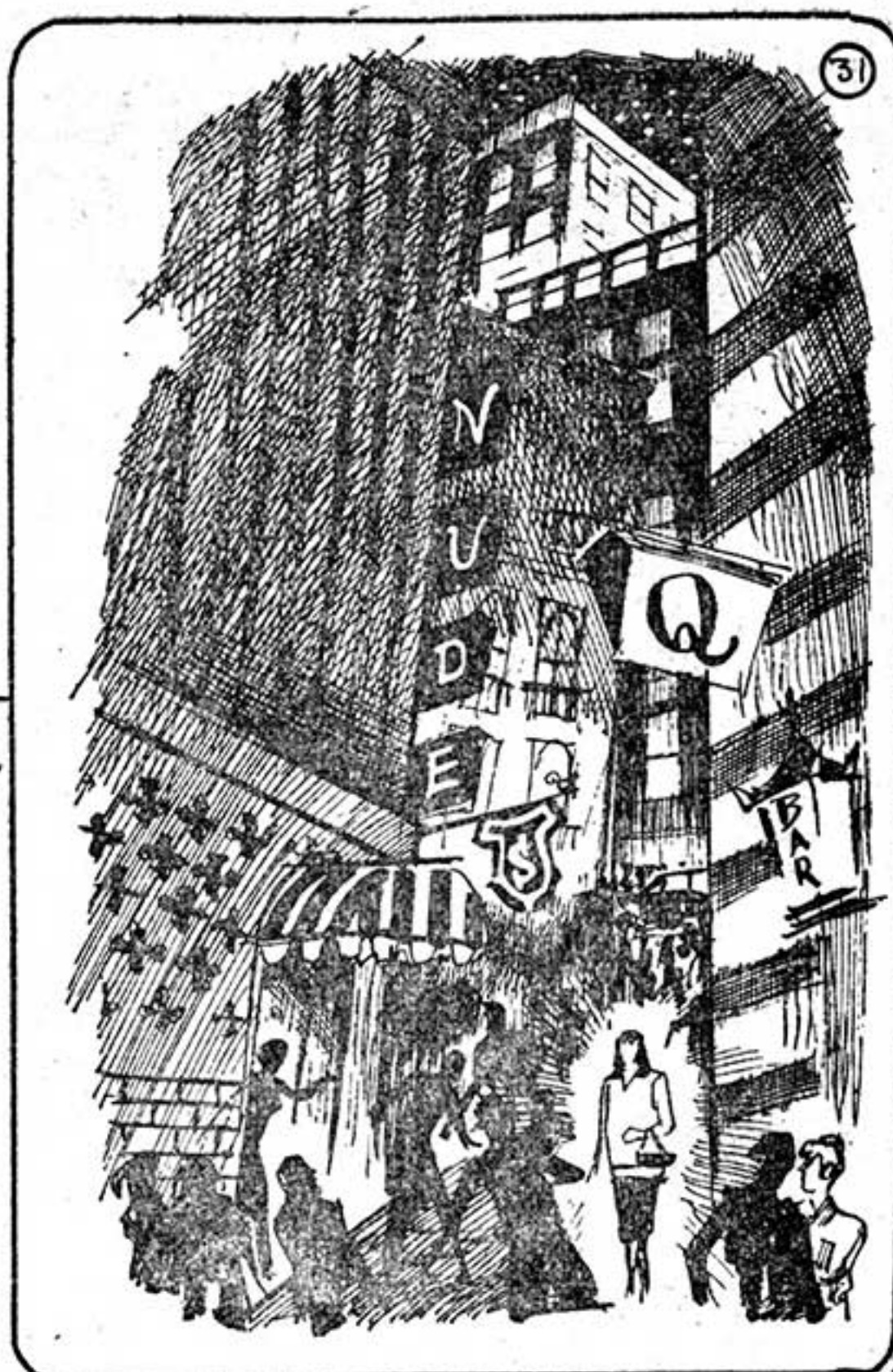








32



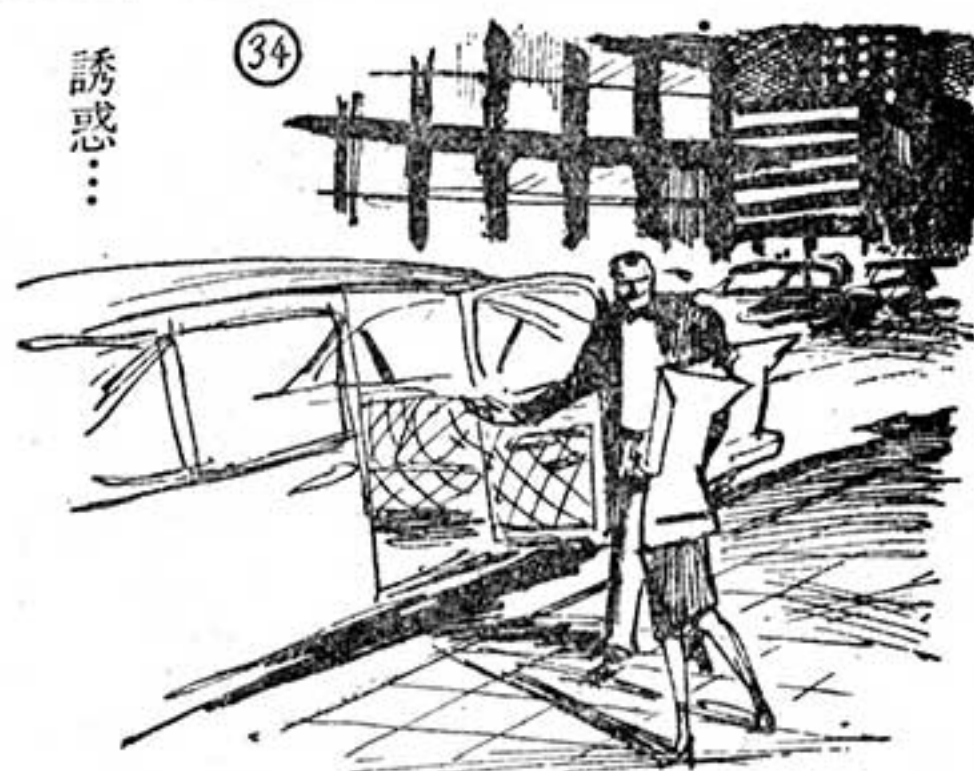
31



33



35



34

誘惑...

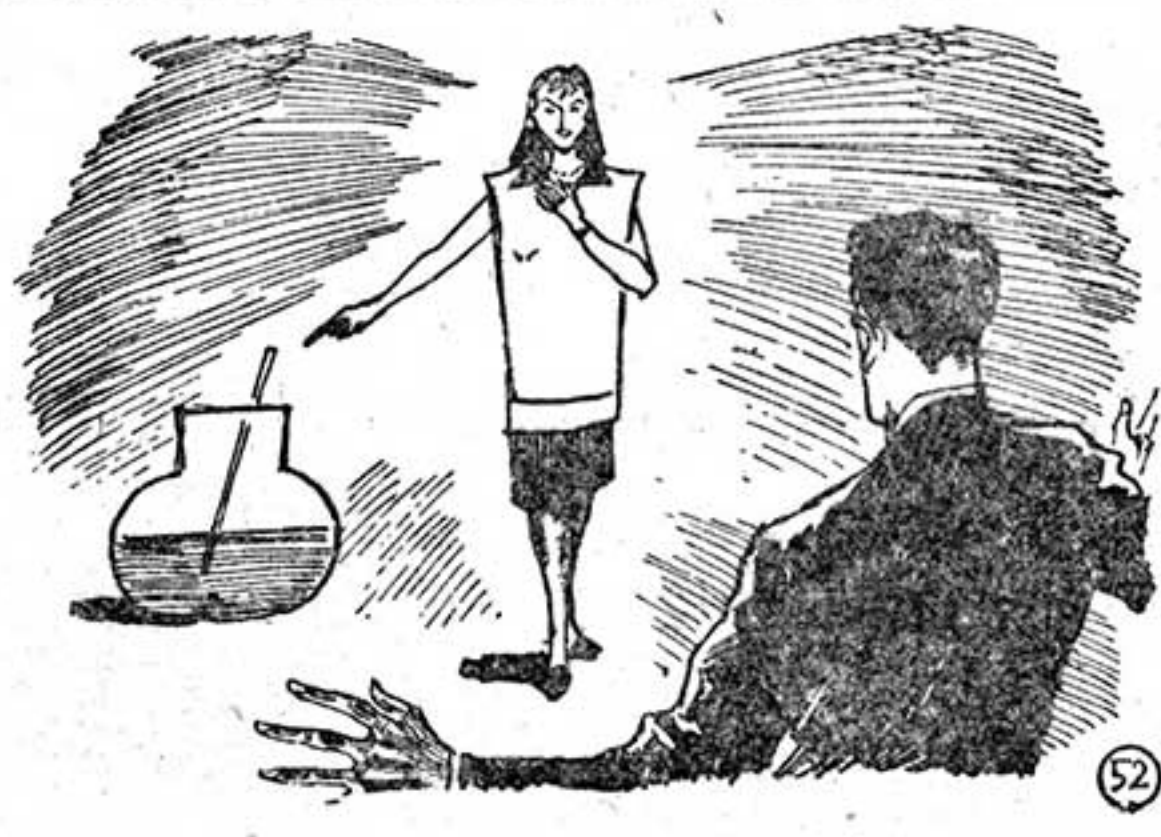
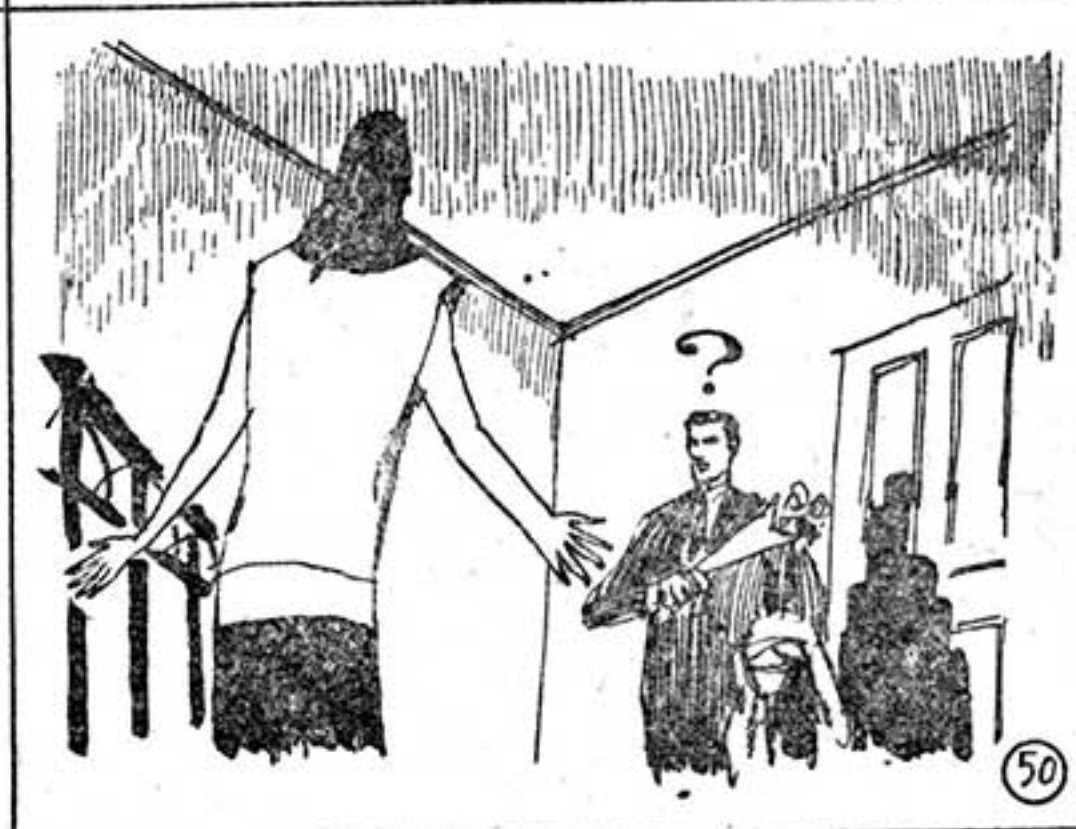
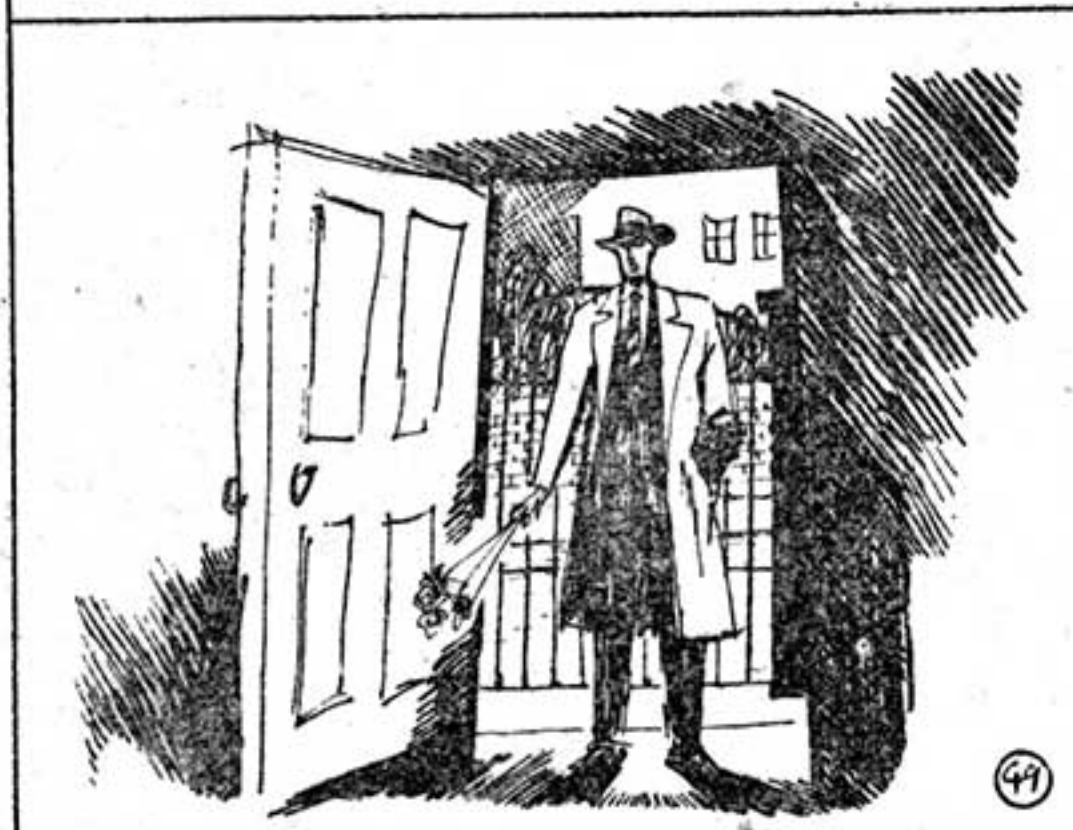


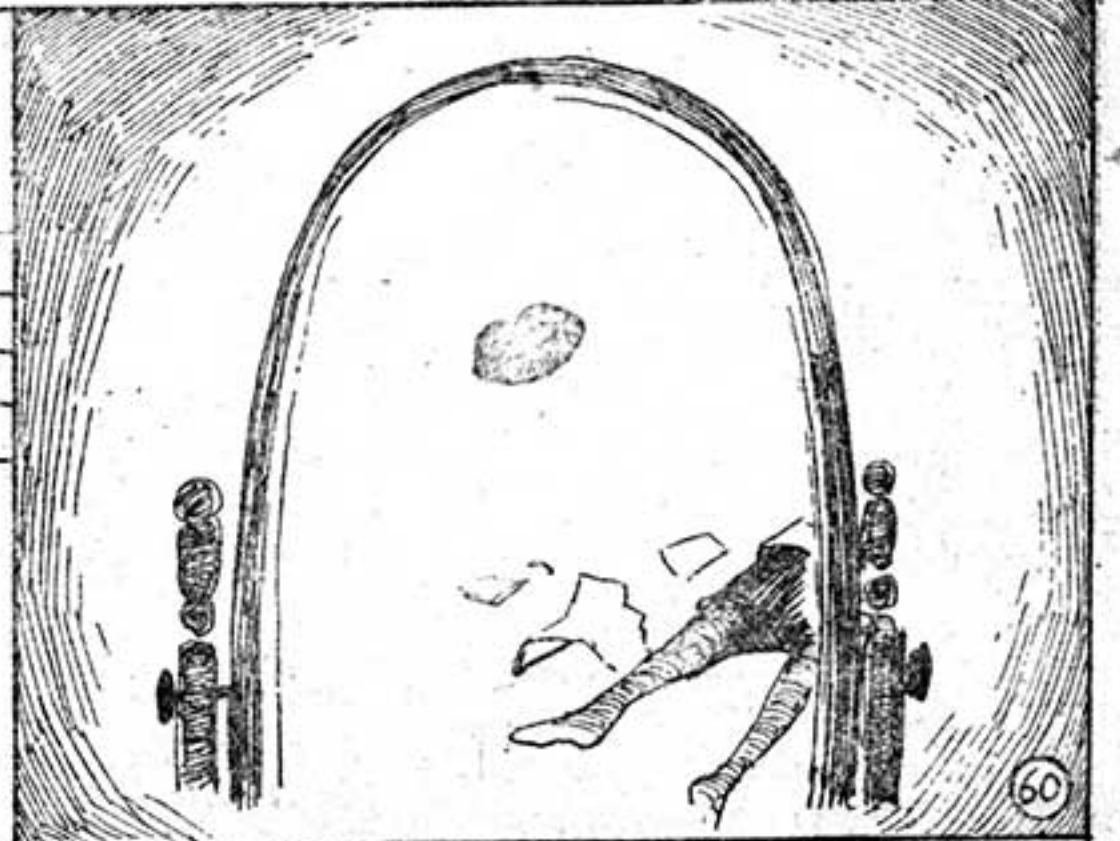
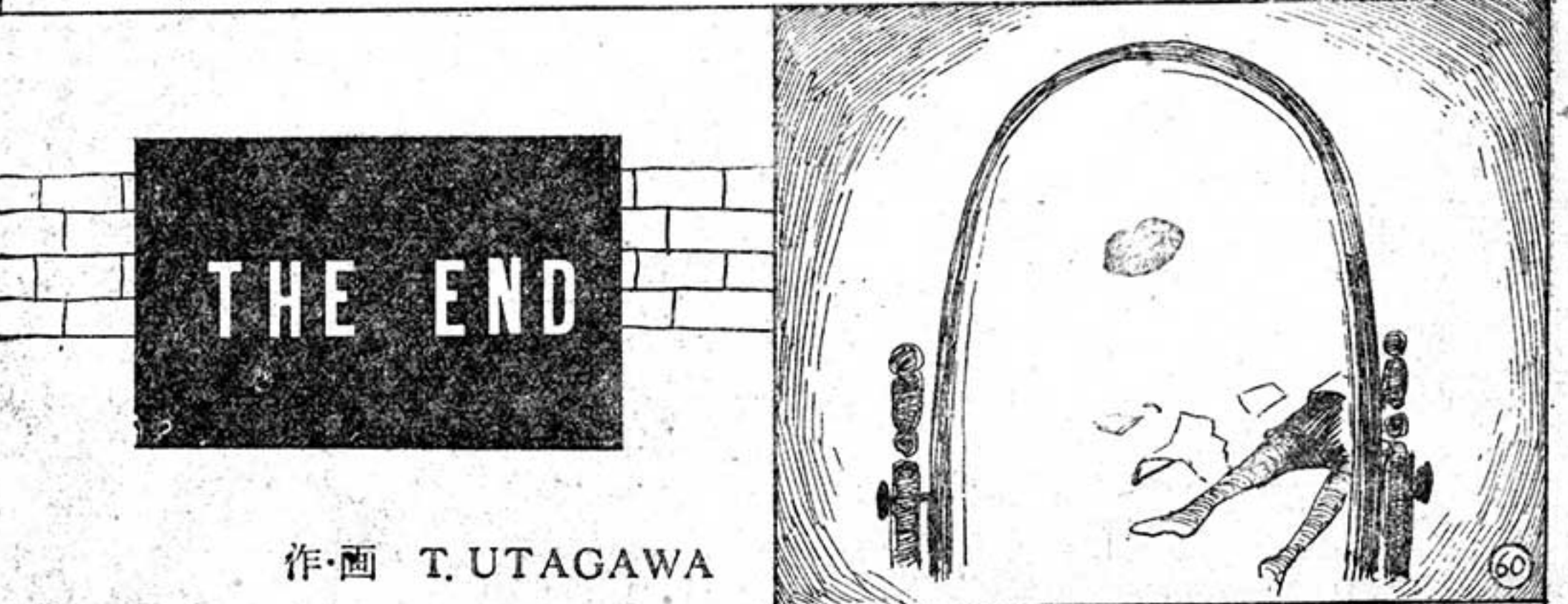
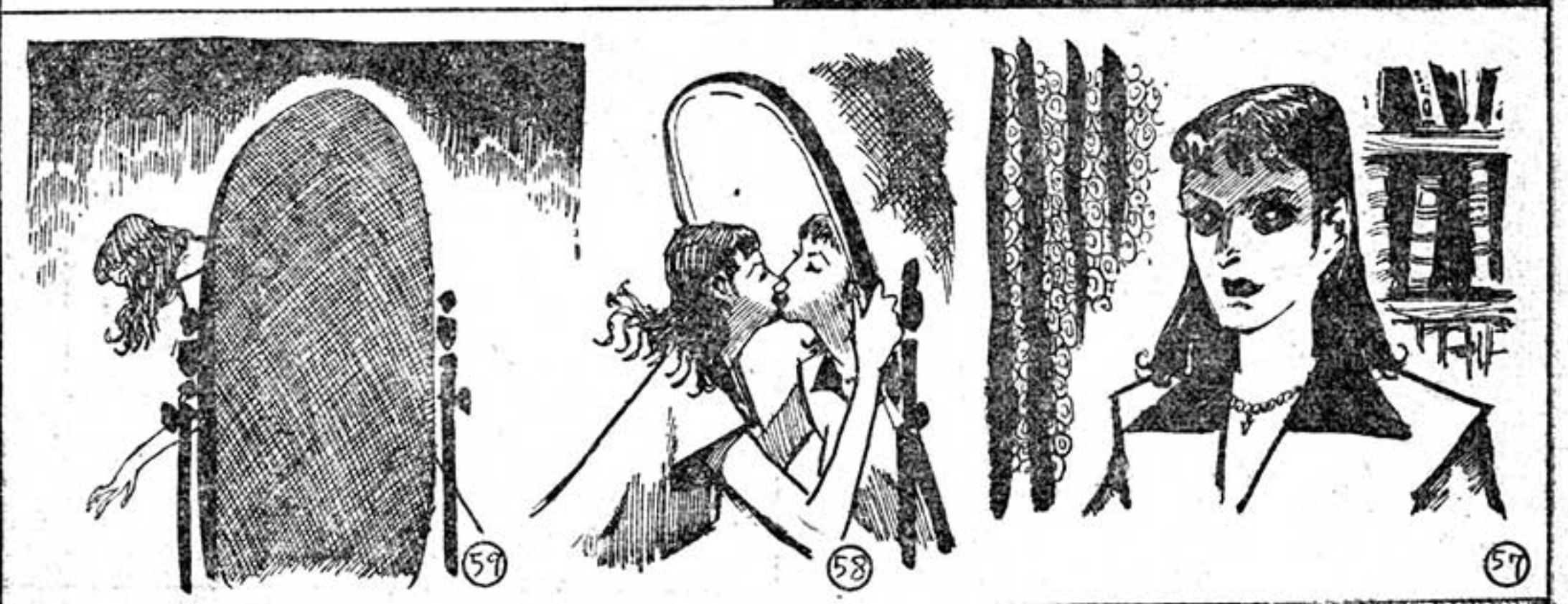
37



36







THE END

作・画 T. UTAGAWA

假面を剥がせ!

① 写真家と宝石

ハモンドオルガンの奏でる荘厳なウェディングマーチ。今、呉藤俊一と津村久美の結婚式がとり行なわれている。

東京・お茶の水のカソリック教会である。新郎の呉藤俊一は、半年ほど前、突如彗星のように現われ、ユニークな感覚で話題の人となった新進商業写真家。新婦の久美は再婚だが、その花嫁姿は処女のように初々しく、美しい。彼女は二年前、若い宝石商だった前夫

を交通禍で亡くしていた。夫の遺していた宝石店は、折からの室石ブームの波にのり、上々の景気だった。

店の宣伝写真を撮りに来た俊一と、若くして未亡人になった久美は、ひと目で恋愛し、結婚の鐘を鳴らすに至ったのである。

神に、永遠の愛が誓われ、宝石の燦然と輝く結婚指輪が、お互の指に交換される。

この二人の結婚式は物見高いジャーナリスト達の好餌だ。興奮に頬を紅潮させる二人に新聞社、雑誌社のフラッシュの雨がふる。

烏丸克彦
画・山田彬弘



② アタマにくるぜ

「ひとの結婚を羨む奴は、豚に蹴られて死
ンじまえ……か」

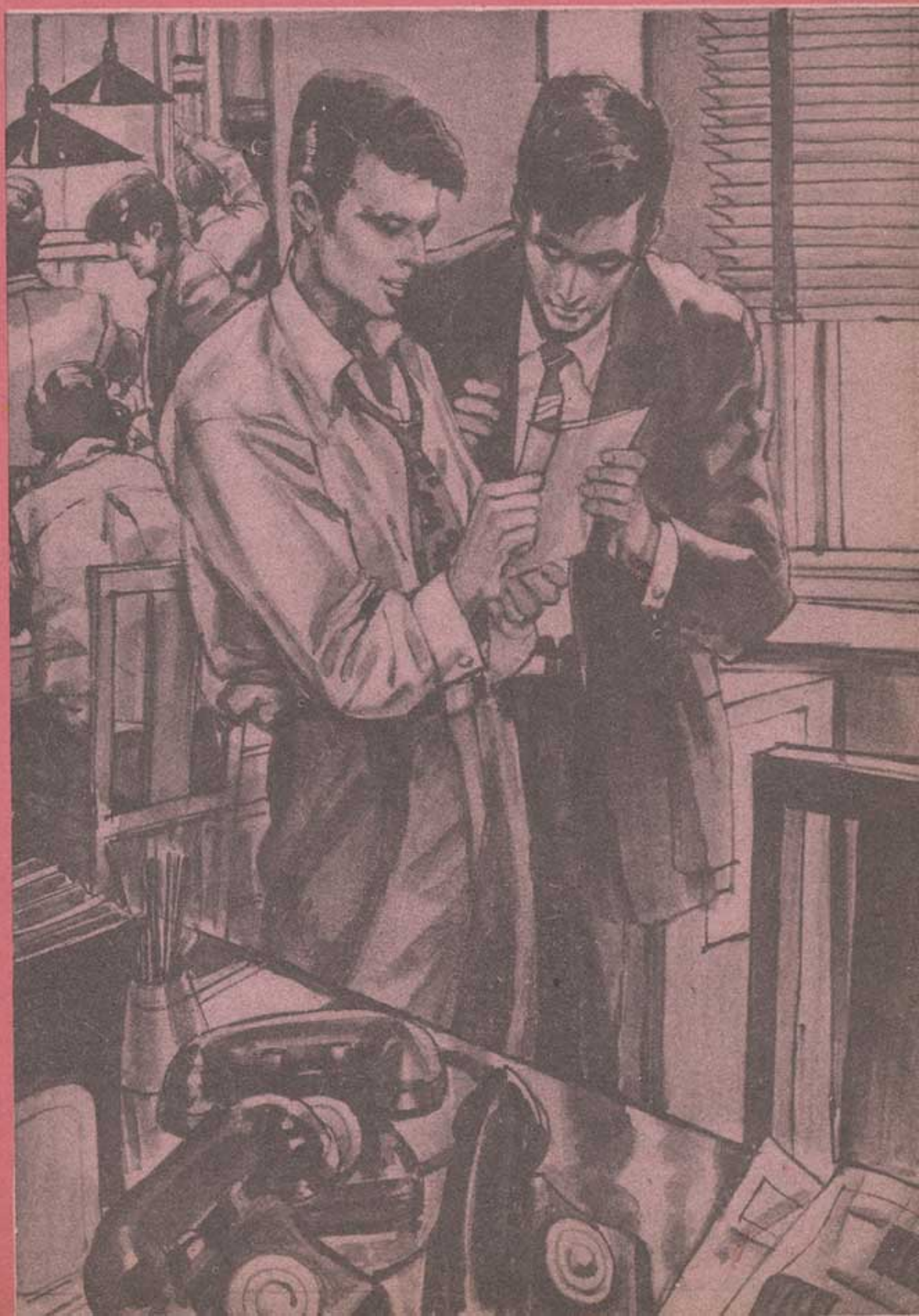
その夕方——ここは東都新報の社会部。

鼻歌まじりに、現像室から出て来たカメラ
マンの黒崎に、机にもたれてボンヤリしてい
た記者の間宮次郎が声をかける。

「なんだ。黒さんはまだ昼間の結婚式の毒ッ
気にあてられてるのかい？」

「あてられもすらすら……全く、この呉藤って
奴は果報者だ。金の卵を産む鶏と結婚したン
だからなア。同じカメラマンでも、もてる奴
はこうも違うんだから、アタマにくるぜ」

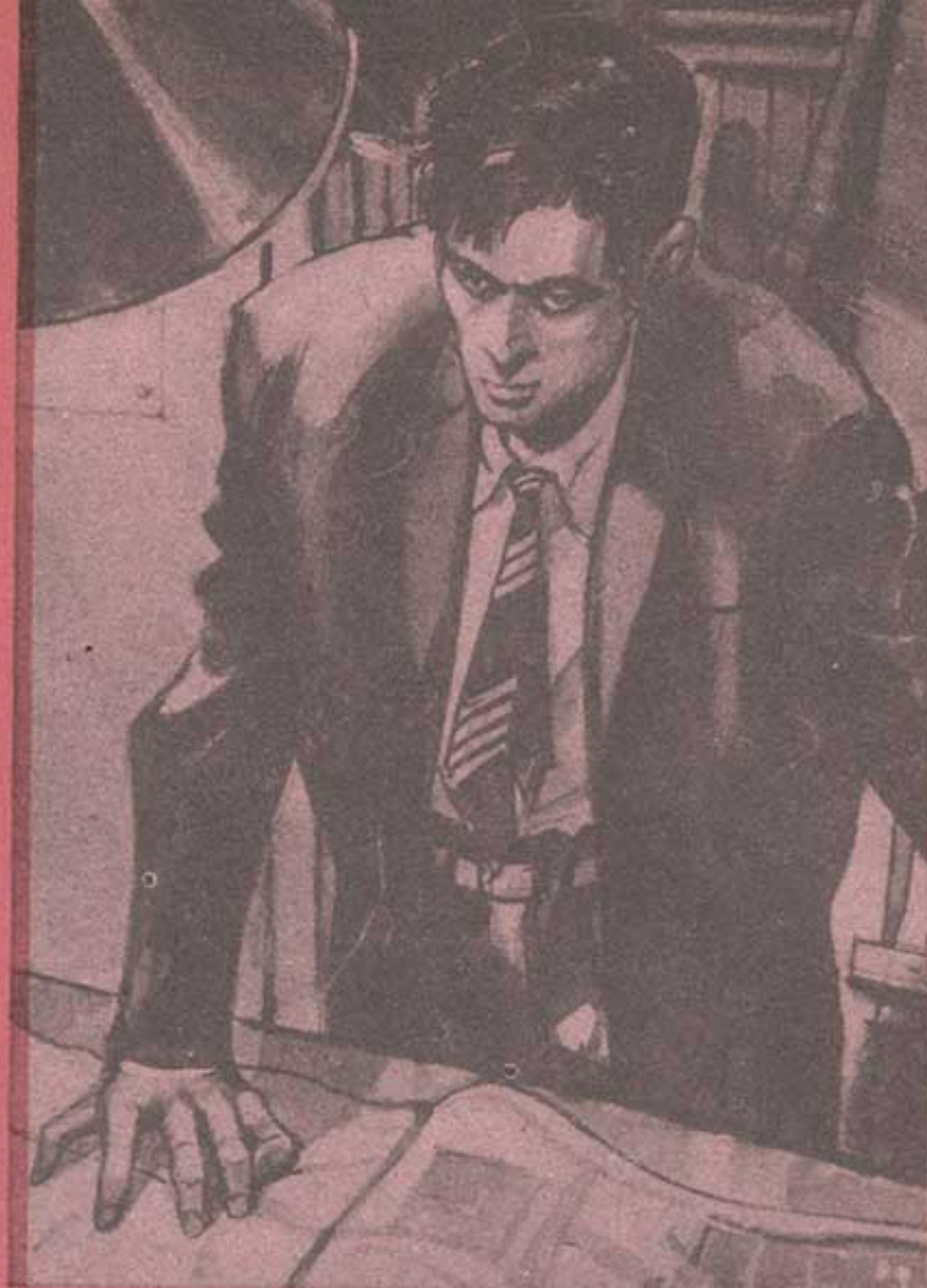
大袈裟に溜息をつき、手にした現像したて
の結婚式の写真をつくづくと見入る黒崎。そ
れを、なにげなく覗き込んだ次郎は、きゆう
に訝って、首をかしげた。



③ 他人の空似

「この写真の男——いや、乙に澄ましこんだ新郎を、俺はどこかで見たような気がするんだ」 呟くように言う次郎に、黒崎は笑って答えた。

「こいつは商業写真家、呉藤俊——たぶん、他人の空似って奴じゃないのかい」 他人の空似……そう言われりやそんな気もすると、次郎は写真を黒崎に返そうとしたが、やはり気になった。もう一度、ゆっくりとその写真を見つめた。



④偶然の一致？

華やかな話題をまいた中年未亡人と青年——伊藤準一の結婚。だが、ひと月余りで不幸な結末をつげたのだ。

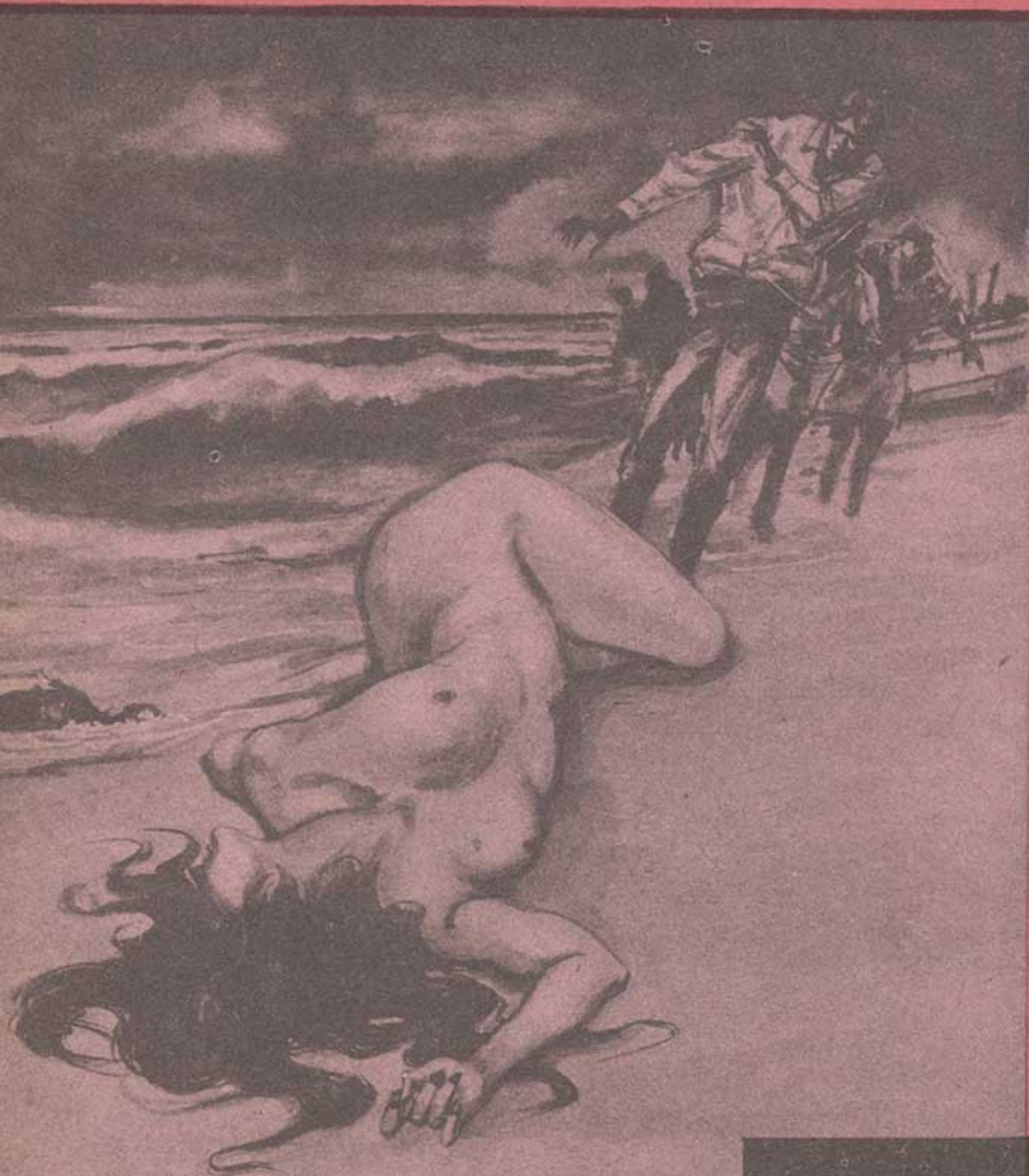
準一と夫人の乗ったヨットが、長崎湾の沖合いで突風にあい、転覆したのである。準一は辛うじて近くの漁船に助けられたが、泳げない夫人は無惨にも溺死——。

最愛の新妻の死にあい、嘆き悲しんだ準一は後追い自殺を計った。しかし、未遂に終わってしまった。

そして、夫人の四十九日も過ぎないうちに、彼は遺産をまとめると、長崎から姿を消してしまったのである。

ちやうど、三年前の出来事であった。

「この男も金のある未亡人と結婚している……偶然の一致だろうか？」 次郎は疑った。記者の第六感で。

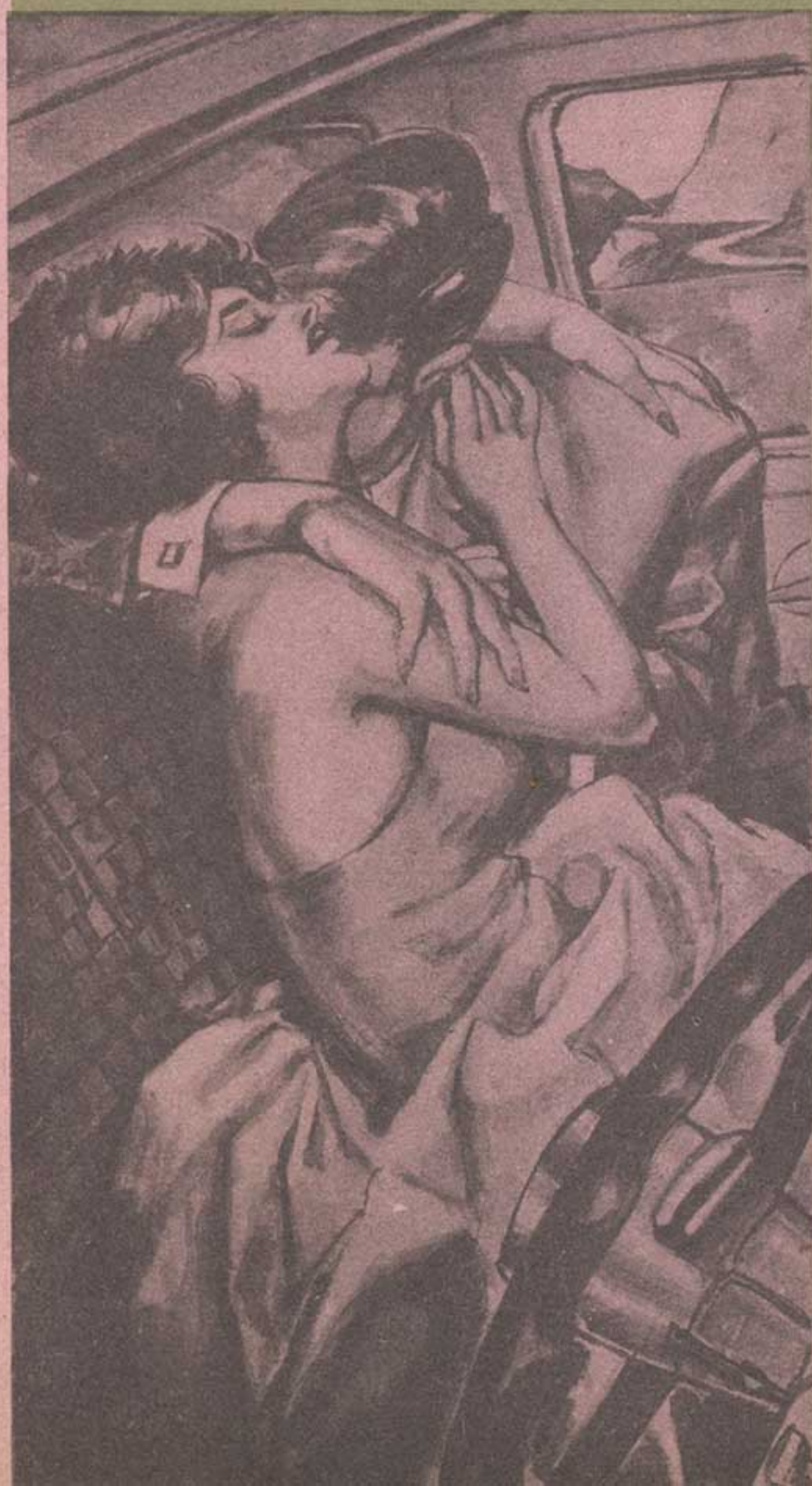


確かにこの男だ——この写真によく似た写真をどこかで見ていた……。

「そうだ！ 長崎だ——」東京へ来る前、次郎は長崎支局に勤務していたのだ。次郎は資料室へとび込んだ。三年前の東都新報、長崎版を取り出して見る。

あった！——土地の資産家の未亡人と結婚した青年の記事と、式の写真。

中年の婦人と並んだその写真の男は、眼鏡こそかけていないが、眼許といい、顔の輪郭といい呉藤俊一にそっくりなのだ。が、一つ、名前だけが違っていた。



⑤ 釈然としない

次郎は社をとび出すと、警視庁の矢部刑事を尋ねた。同じ高校を出た親友なのだ。

次郎の話に、矢部刑事は大きくうなずいた。「さすが新聞記者だな……実は、俺は今日の

結婚式は、どうも釈然としないんだ——」

矢部刑事は意外な話を打ちあけた。

「俺の兄貴が警部をやってる札幌にも、同じ

ケースの話があるんだ。五年前だが、工藤元一という青年が母親のような金持ちの未亡人と結婚したんだ。ところが、半年足らずで夫人は死んだよ。睡眠薬の飲みすぎでね……」

その青年、工藤元一の顔が、奇妙なことに呉藤俊一に全くよく似ているのだという。

「しかし、似てるだけじゃ証拠にはならん」溜息をつき、二人は、疑惑の顔を見合わせた。



⑥ 狂った抱擁

その頃——。俊一と久美は、十国峠の曲りくねった道を箱根に向けて、最新型ナッシュを飛ばしていた。新婚第一夜を、芦ノ湖畔のホテル青湖荘で過すのだ。

「久美……僕は一生君を離さない……」

ハンドルを握る久美の耳許に熱っぽい唇を寄せて、甘い言葉を囁き続けている俊一。

「ああ……久美は、久美は倅です……」

久美は車を停めて、ソファのボタンを押した。背中の部分が倒れて、ベットになる。車内灯が消されて——二人の腕は互いの首に絡みあい、狂った抱擁が展開するのだ。

⑦ 朱色のアザ

しびれるような愛のひとときが過ぎて——。愛の歓喜に酔いしれる二人を乗せた車は、再び走りだした。

フロントグラス越しに、芦ノ湖面が見えて来る。

ホテルへ着くと、二人は最上の部屋へ案内された。

「もう、僕は夫婦です。さ、一緒に風呂へ入ろう——」

恥らいを見せながら、久美はうなずいて俊一に続く。

贅をこらした香水風呂——その香りは天使の花園だ。

湯気の立ちこめる湯殿におりたつ久美——その雪のよう

な白い肌は、湯につかると融けてしまいうる……。

「おオ、なんて素晴らしいんだ、この肌は——」

思わず呻いて、俊一は後から久美を抱きすくめる。

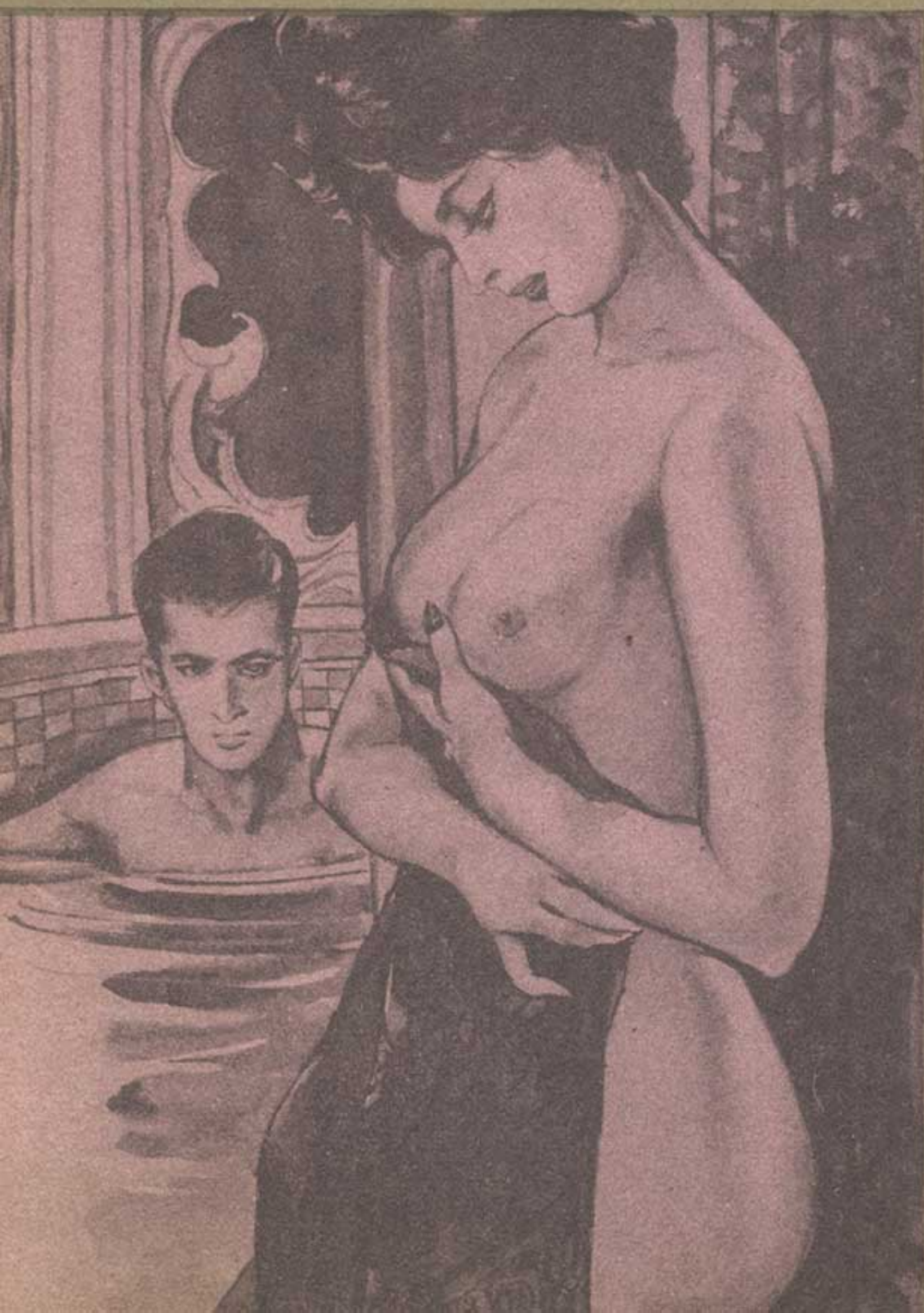
真珠のような素肌に唇を押しつけて、思いきり強く吸

う。真紅のバラを散りばめたような朱色のアザが、白い

スベスベした肌に、幾つも幾つもできた。

「あッ、痛い……およしになって……あッ！」

久美は身をのけぞらせて、苦痛に喘ぎ続ける。



⑧ 飲びの鳴咽

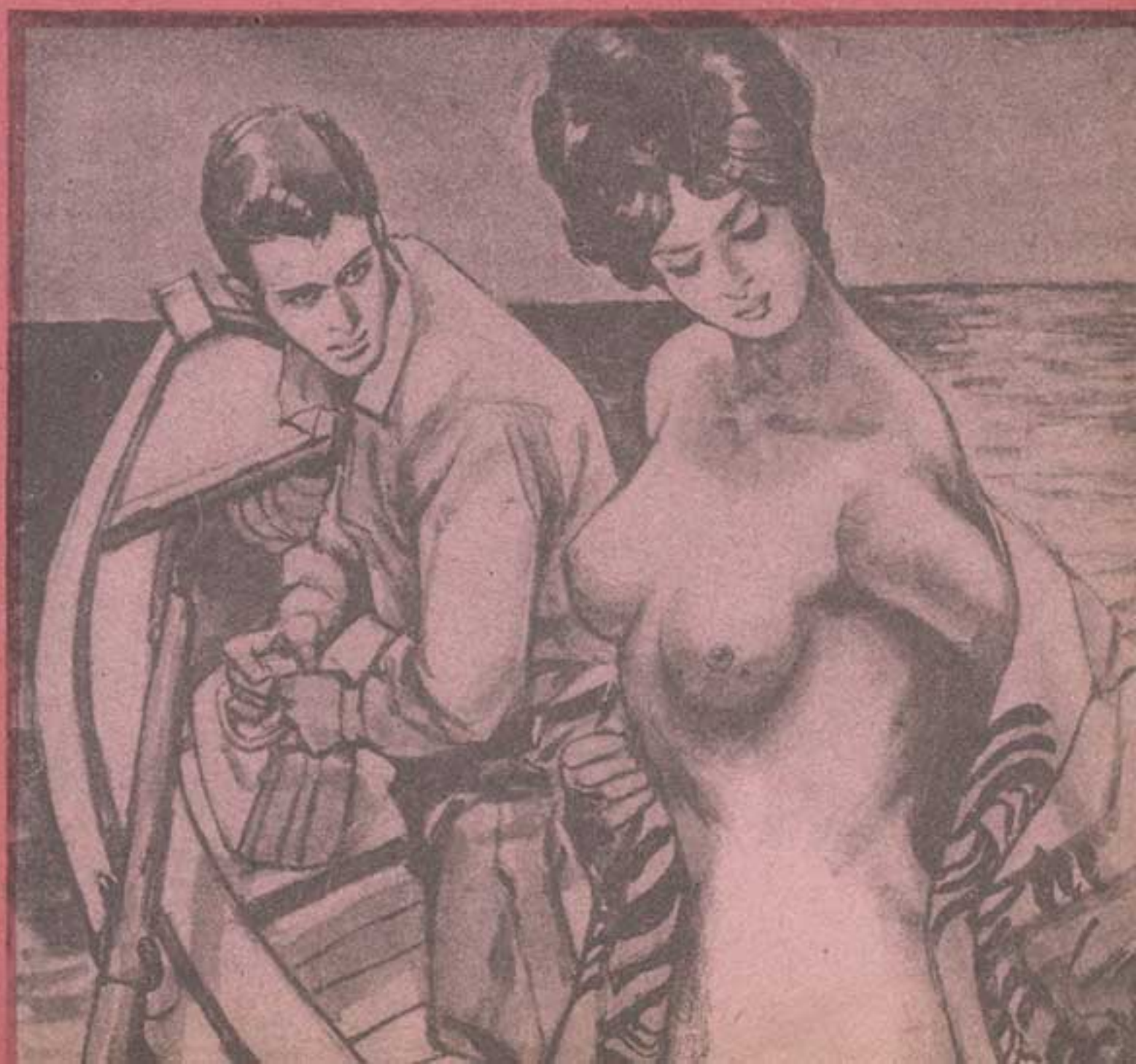
逃れようとする、久美の胸許にまわされた俊一の手がこもる。その爪が、豊かに盛りあがった両の乳房に食い込む。
「あ、離して……もうなにもかもあなたのものよ……私の身体も、私のものはすべて……」
責められながらの苦痛の喘ぎが、いつか飲びの鳴咽に変わっていった。

部屋に戻ると、早速、食事が運ばれる。湯殿での興奮の、まださめやらぬ久美はコップ一杯のビールに酔ってしまった。
酔いさましに、風にでもあたろうという俊一の希望で、二人はボートに乗った。湖の中程まで出ると、俊一は漕ぐ手を止めた。
「久美、すまないが、ここで裸になつてくれないか？」
意外な言葉に、久美は思わず眼を瞠る。
「傑作を撮りたいんだ。素晴らしい君をモデルにして……お願いだ、久美……」



⑨ 柔肌に鞭が……

すがるような哀願を久美は拒めなかった。着ていた浴衣が肩から落ちた。ブラジャーも、下着も、すべて取りのぞかれる。
青い月光を浴びた真珠の肌は、人魚にも見まがうばかりの美しさ。裸身の久美は、恥かしさに船べりに寄って顔を伏せたまままだ。きゆうに、月がかげった。乳色の霧が湖面を這うように迫ってきて、たちまち、ボートを不透明のヴェールに包んでしまった。



⑩ 悪魔の牙

「ひいーッ!……な、何をなさるんですッ」
激痛に身もだえして、喘ぐ久美。

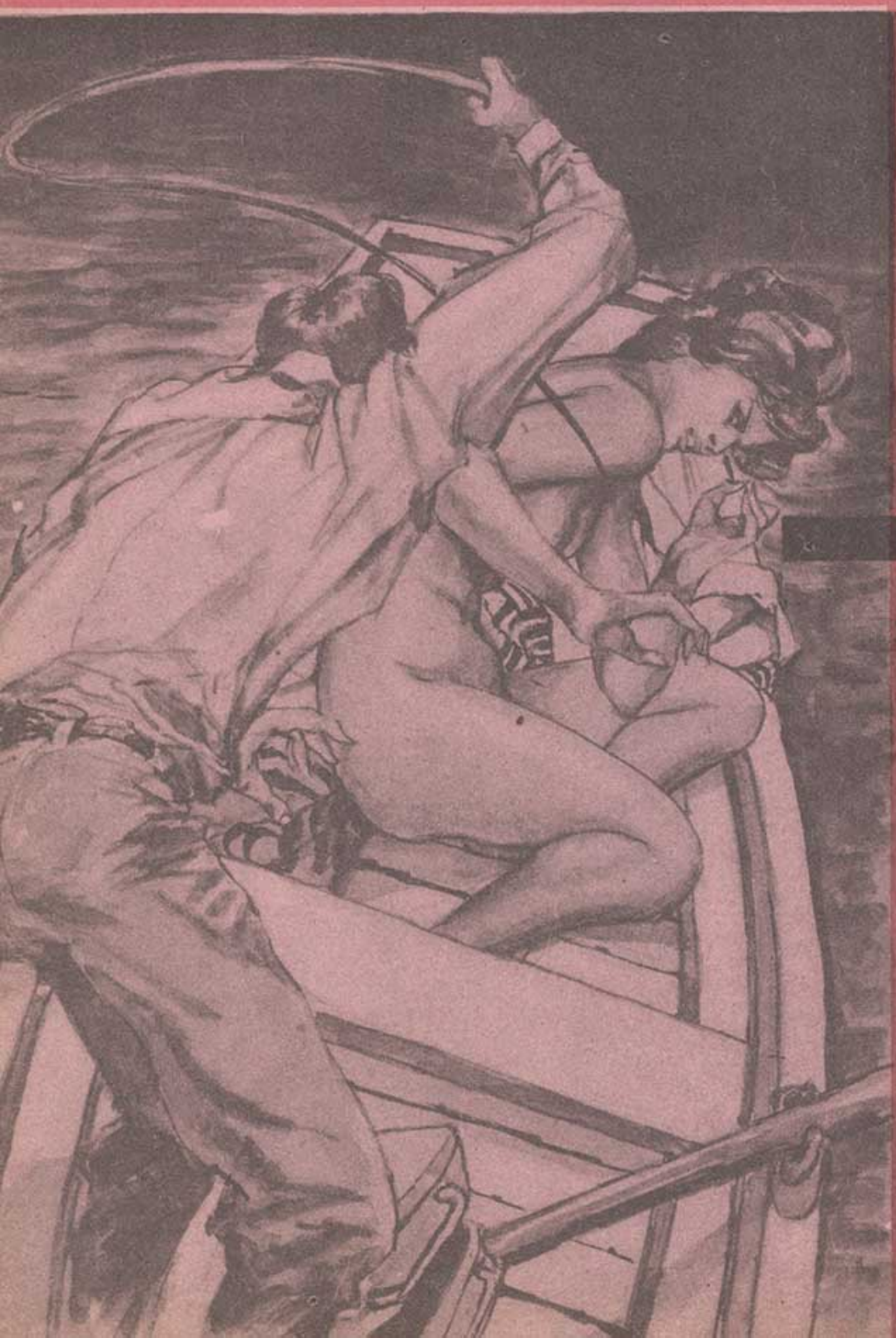
「ふふふ……死んで貰うのさ、お前に」
「えッ?」愕然——久美は耳を疑った。

久美を冷たく見下す俊一の眼のなかにハッキリと燃えるような殺意が漲っている。

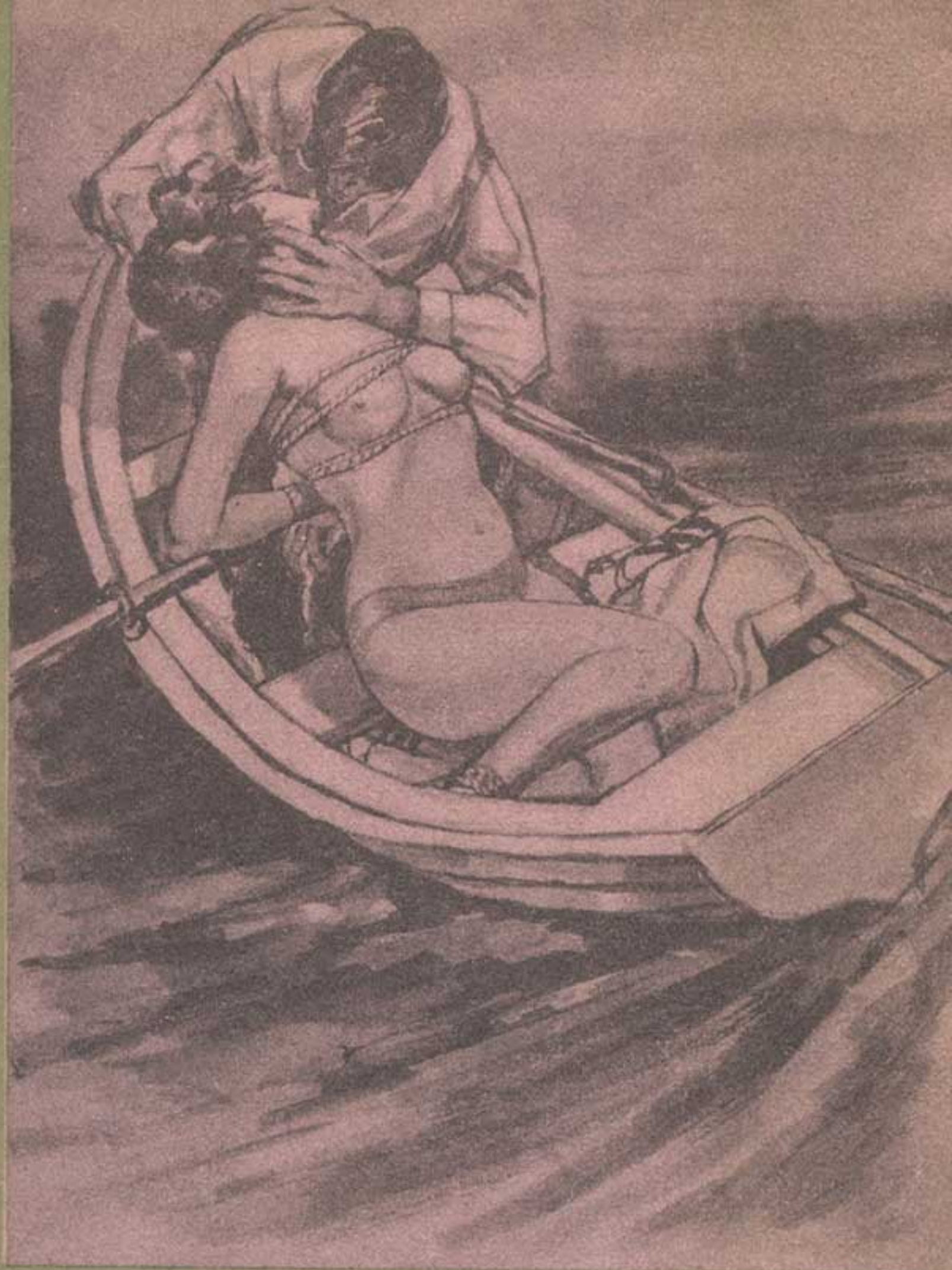
「俺の欲しかったのは、お前の財産なんだ」
財産目当の結婚詐欺殺人魔の俊一は悪魔の牙をむき出したのだ。恐怖におののく久美。
「あげるわ、私の持っているものはなにもかも……お願いッ、殺さないで!——」

縋る久美の裸身に、俊一は鞭を振り下す。
「あッ!……だ、誰か、助けてッ!……」

「わめけ、わめけ!——ここは湖の真中だ。幾らわめいてもお前の声は岸へは届かん!」
久美は湖へとび込もうとする。「待て!」

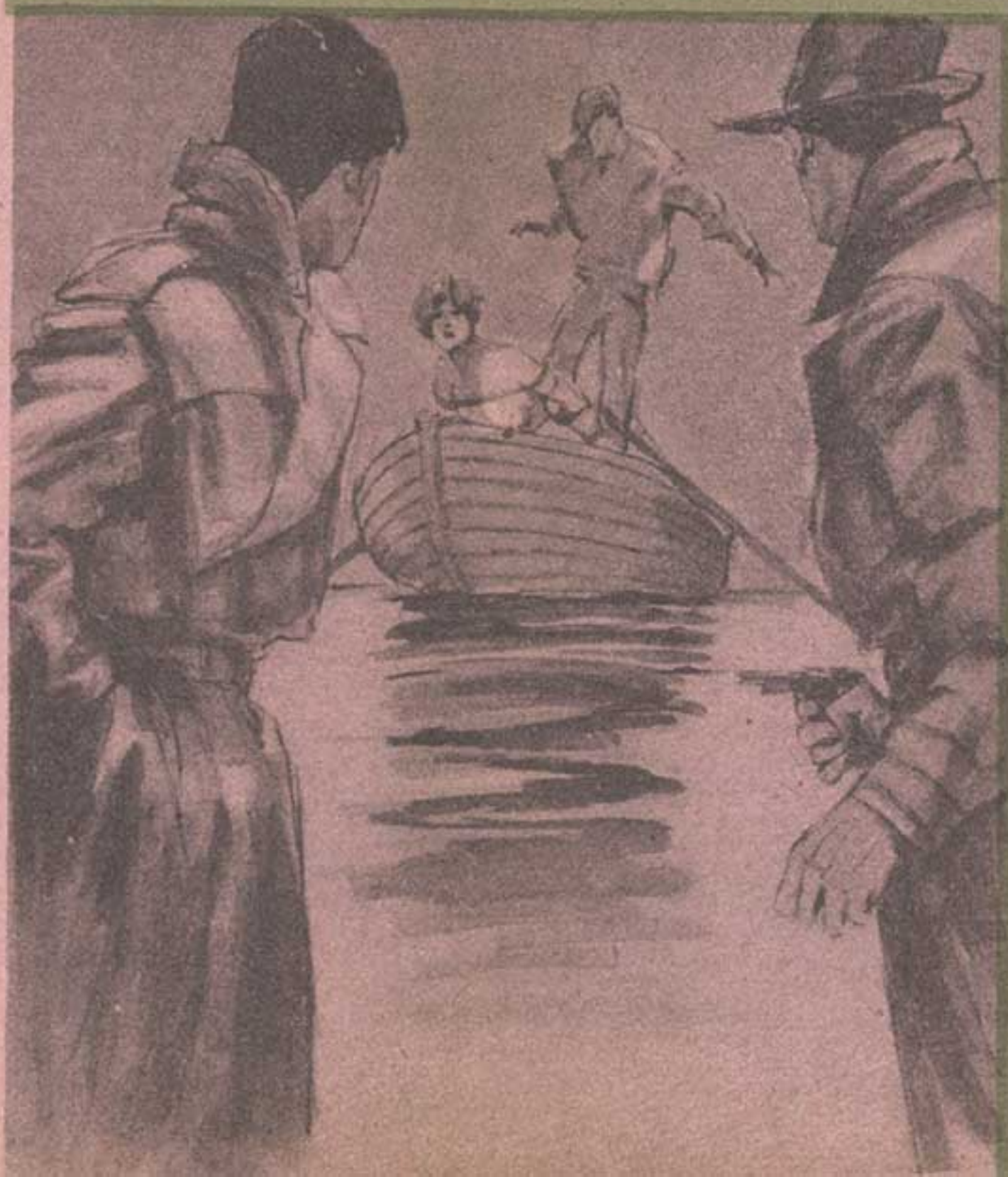


ニヤリ、妖しい微笑を浮べて、俊一が傍のバックから取り出したものは?——カメラではない。細い紐……いや、皮の鞭だ!
俊一の眼に残忍な光がこもる。
あッ!……久美は本能的に身をかばう。
ピシッ!——湖上の静寂を破って、久美の柔肌に鞭が鳴る。二度、そして、三度——。



⑪ 最後のあがき

久美の手足に縄がかけられた。豊かな胸許に、容赦なく荒縄が喰い込む。
 「もう少しボートを沖へ出そう。霧にまぎれて、お前を湖底に沈めるのだ」
 漕ぎだした俊一を、憎悪にたぎる眼で睨みつける久美。空しい抵抗だった。
 霧のなかをかなり進んで、俊一はオールを離れた。不気味な微笑を浮べて、
 両手で久美の喉を押えようとする。最後のあがき——久美は激しく絶叫した。
 「助けてッ……誰か、助けて下さいッ！」 無駄だよ……せせら笑って、久美
 の首に廻した俊一の腕に力が——。その時、背後で鋭い声。「女から離れろ！」



⑫ 逮

捕

振り向いた俊一は思わず立竦んだ。いつの間にか霧が晴れ上り、二米前方は岸辺——そこに拳銃を擬した矢部刑事、間宮次郎が立っていた。
 二人は俊一を追って来たのだが、久美の悲鳴を聞きつけて駆け寄ったのだ。
 「札幌、長崎の未亡人殺しの犯人及び殺人未遂現行犯として逮捕する」 意外な結末に放心状態の俊一。その腕に冷たい手錠がかけられた。

女裸青刺えた消

窓語
裏絵物語

① 急停車

ポツリ、とフロントガラスに雨粒が当って一筋流れた。

「とうとう降って来やあがったな」

紅小路英作は、スピードを速めた。時間は午前二時過ぎ。

たった今、大磯あたりを通過したところだ。

二本のヘッドライトに真ッすぐ照し出されたアスファル

ト道路には、行き交う車もない。

と——。ヘッドライトの光茫の中に、ポツンと白いものが写し出された。なんだろう？と眼をこらしているうちに、ぐんぐんその白いものの実体が接近してくる。

若い女だ。スリッパ一枚きり。胸がはだけ、ぼつちりさくらんぼが鮮やかだ。

キーン。急停車。間一髪のところ、女は轢かなかったが、女は、車の前の路上に、仰のけに倒れていた。

秋津京太
画・山田彬弘





② 恐怖の眼

「おいッ、どうしたんだ、しっかりしろ!!」
英作は車の後の席に助け入れて肩をゆすつた。

「あッ、は、早く、逃げてノ追われてるの……」

見つかったら殺されるノ早く」

女は恐怖の眼を瞞って、英作に云った。

そのせっぱ詰った女の様子に、英作は、あわて、車を走らせた。

③ 体験記作家

酷く女は疲れているようだった。車が走り出すと安心したのか、そのまゝ、ぐっすり寝入ってしまった。

（仕様がねえなあ……今夜は、オレのアパートへ連れてゆくか）

バックミラーの中の豊満な女の肢体を見詰めるながら、英作はつぶやいた。

——挑発的な胸の膨らみ。下腹部の曲線。腰の湾曲。その上、現代的な美貌だ。

英作は、ふと創作的な興味を湧かした。彼は今売れっ子の体験記作家である。異常な体験をした人から話を聞いて、それを本にする



のだ。今までに、全部ベスト・セラーになって
いた。

（この女は、何か豊富な体験を持っているの
ではないか）

英作は、い、拾いモノをしたとホクソ笑ん
だ。もちろん、女の肉体的な魅力も拾いモノ
だと思っていた。



④ 恐ろしい思い出

英作の高級アパート一室。英作
は女をベットに寝かせると、その
側で、熱いコーヒーを吸った。

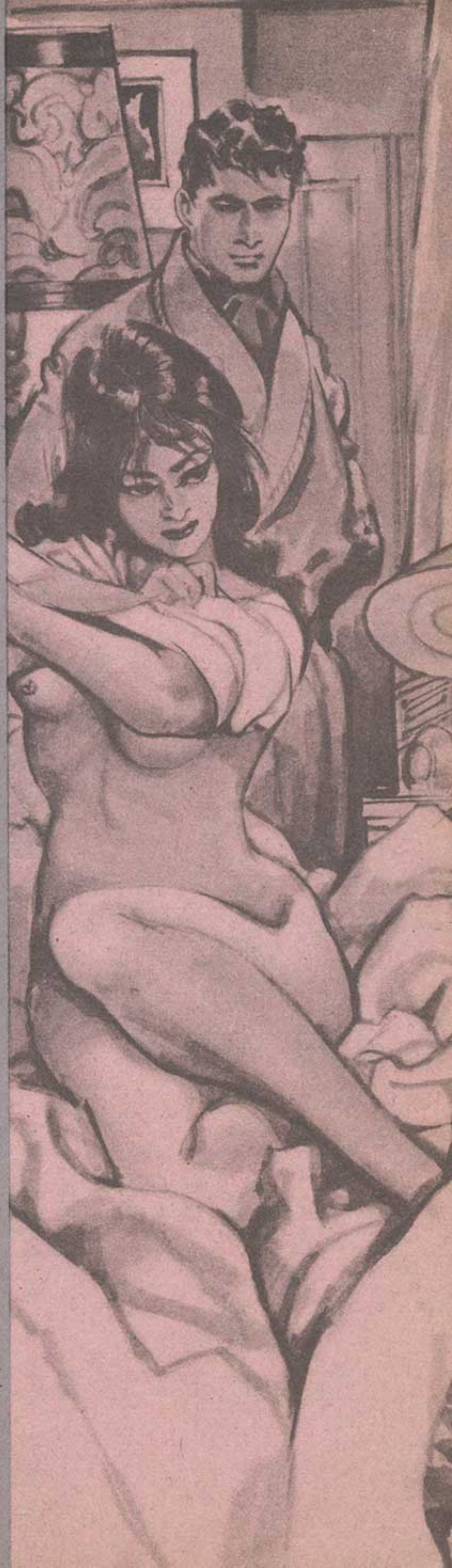
女が薄眼を開けると、長い夢か
ら醒めたようにぼつりと云った。

「あたし一体どうしたのかしら」

英作が一部始終を話してきかせ
ると、納得のゆかないような顔を
していたが「ああッ……」と呻く
ように云って、シーツの上に突ッ
伏してしまった。

「どうしたんだね？」英作が女に
近寄ると、女は、わなわな声をふ
るわせながら云った。

「思い出しても恐ろしい……」



⑤ 取材費

「きみ、何かあったんだろう？是非話してくれないか？」

「でも、このことが世間に知れ渡ったら、あたし殺されます……誰にも話されないことなんです」

「だから、余計聞きたいんだ……きみの生命は全力あげてまもるよ……それに、報酬も出す……」

英作は烈しい取材欲にかられて、百万円出すとまで云い切った。これが、女の堅い気持を、ぐらっと斬り崩したらしい。

「ほんとに百万円下さるの？」

「嘘じゃあない……今、すぐあげる」

⑥ 淫靡な刺青

「あッ」と英作が目を瞠った。

というのは、今まで気がつかなかったが、滑つこい女の背から臀部にかけて、奇妙な刺青が描き出されていたのだ。絵柄は、奇怪な爬虫類であった。グロテスクな四肢が、びったり、女の腰を抱くようにへばりついている。あきらか

にそれは、女を玩弄物と見なしたおもしろ半分
の刺青であった。

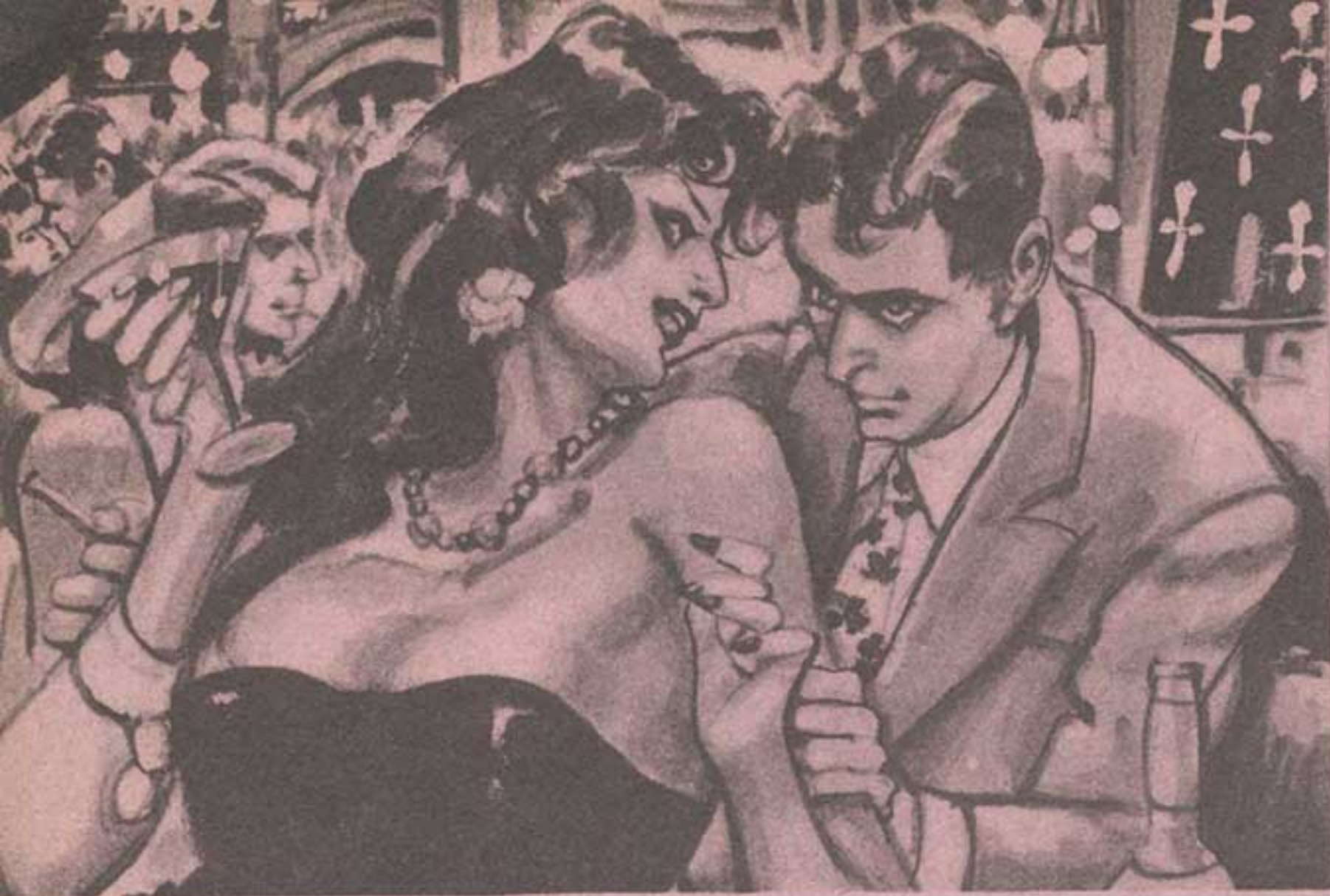
「こんな恥かしい刺青をされて……それから、
遠い香港や南方の魔窟に売り飛ばされるんです」

「うむ」

英作は、早速、ノートを広げた。

「実は、あたし、二月前まで横浜で外人相手の
ナイトキャバレに勤めていたんですが……」





英作は、百万円の小切手を書いて女に渡した。
「お話しするわ」
女は小切手を睨むようにしながら深くうなずくと、不意に、スリッパの裾をまくり上げ、するするッと首から脱ぎ落した。そして、くるりと背を英作に見せた。



⑦ おとしあな

女の名は由利アケミ。ある夜、三人の外国船員の相手をした。看板になったあと、面白いところへ行こうと、朋輩四人と一緒にいった。

自動車で随分と走った。ついたところは、人気のないひっそりとした森の中の洋館である。
中に入ると、急に、男たちの親切な態度ががらりと変った。不意に、荒々しく襲いかかられて、アケミたちは全員、丸裸に剥がれてしまったのだ。



⑧ 地下室

全裸のアケミたちが逃げまどう。男たちが鞭をふるって追い立てる。——地下室への階段を、五人の裸女は、「ひいひい」悲鳴をあげながら転るように降りねばならなかった。カビのにおいのする地下室。ぼつんと点っている裸電球。彼女たちはその地下室の異様

⑨ 滑車歪む裸女

トミエという女が二人の男に無理やり引き立てられると、壁に取りつけてある太く頑丈な鉄輪と鎖に手首手足をはめられた。滑車を取りつけてあって、ギギギツと軋みながら、滑車が動くと、トミエの裸身が、あられもない様々な恰好になつて、壁に奇妙な字を描く。

「ひいーッ」

トミエの口から悲鳴がつんざく。アケ

ミたちは蒼ざめてしまった。
「ね、おもしろいだろ。みんな大人しくするい、ね」

そして、アケミたちは、一人ずつ、壁の鉄輪に、大の字に立たされた恰好で、身動きならないようにはめこまれたのである。

アケミは、手首と足首に喰いこむ鉄輪が痛かった。が、身をよじると、じわじわと締めつけてくる。じっとしているしか仕方がなかった。





な陰惨な雰囲気、ゾツとした。
 というのは、四方の壁に、十六世紀頃、西洋にあったという拷問部屋のような様々の道具が並んでいたからである。
 「お前たち、もう、こゝから逃げられない。オレたちの虜なんだ。奴隷だ。泣いても喚いても駄目。暴れると容赦しない。拷問にかけて黙らせる。いゝね。拷問とてもおもしろいあるよ」ニタツと一人の男が笑って云う。



⑩ 日本娘売買団

翌日から、いまわしいことが始まった。というのは、背中に刺青を彫られ出したのだ。毎日毎日、アケミは、刺青台に横たえられ、刺青針が、チクチクと柔らかな肌を突き刺してゆくのに、身もだえしなればならなかった。他の女も同じ運命だった。

「お前たち、刺青が彫り上ったら、売り飛ばすんだ。いゝ値で売れるのだ。貨物船の船底部屋に閉じこめてな」

恐るべき、刺青日本娘の売買団だったのである。

アケミは戦慄した。
 が、とても逃げ出す隙はなかった。

⑪ 天の助け

そして今夜だ。天の助けか、鉄の輪が、うまくゆるんだのだ。夢中だった。彼女は破れたスリッパ一枚をまとい、逃げ出した。英作の自動車が来合したのはそんな時なのである——。

朝方近くまで、女の異常な体験語りは続いた。英作は、もう、ベストセラーは決定的だと思った。昼前近く、ノートを終えたあと、彼はぐったり疲れて、ベッドの中で深々と眠った。



⑫ 消えた裸女

黄昏近く目覚めた。女の姿はなかった。テーブルの上に、メモの走り書きがあった。

「紅小路英作先生へ——小切手の百万円ありがとう。わたしの話した体験は全部嘘っぱちです。先生が熱海から自動車でお帰りの時間を前もって調べまして、あんな演出をしたのです。背中刺青はわたしの亭主がインキで描いたものです。先生が体験記作家で体験を莫大なお金

でお買いになるということを知っての、わたしは貧しい夫婦の一芝居だったわけです。お話しした嘘っぱちの体験記をお書きになるのも御自由ですが、本にすれば物笑いになることでしょう。お止めになった方がよからうと御忠告までに……では、さよなら」

読み終った英作は、思わず、「畜生!! 百万円ぶったくりやがったか、畜生!!」と叫びた。

〈完〉



俺の心に悪魔が住む！

……その夜のうちに、おれは十分の手当てを、由美子に与えた。由美子がびっくりして、おれの顔をみあげたほどの額だった。

それから十日たった。

十日のあいだ、おれはものわかりのよい、若くて紳士的な社長だった。

だが、おれの心には悪魔がひそんでいるのだろうか。その悪魔がまたおれをそそのかしはじめたのだろうか。

小さな事務室で、熱心に事務をとっている由美子。その愛らしい襟すじや、肩の線や、腕の白を見ているうちに、おれは誘惑される

ような錯覚をおぼえ、その身体にまた縄をかけたくなったのだ。あまりかねて、おれはそっと由美子の耳もとにささやいた。

「今夜また写真を撮らせてくれな
いか」

おれのささやきに、由美子は顔を赤くし、そして、かすかにうなずいたのだ。それとも、あの夜与えた金額の大きさが、彼女を今度も承諾させたのかも知れない。

終業時刻が来た。——中略——

おれは由美子の縄尻を長くのばし、天井の梁へわたした。由美子の身体を宙吊りにしたのだ。だから、と裸身がぶら下った。

「う、うううッ……」

由美子はうめいた。しかし、悲鳴はあげなかった。歯をくいしばって、胸に食いこむ縄の苦痛を耐えているのだ。

巨大な白桃のようなゆたかな腰が、おれの顔の前にゆれている。

みずみずしく、やわらかく、かぶりつきたいほどのみごとな肉づきの球体。

「由美子、この美しい肌を打たせてくれ、おねがいだ！」

おれは哀願するようにいった。「い、いいわ。でも、社長さんがあたしの頼みを、きいて、くれたら」

紅唇からきれぎれの言葉が洩れた。

「頼み？ どんな頼みだ。なんでもきこう。お前のいうことなら！」
おれは高熱にうなされた熱病患者のようになり、うめいた。

「あたしを、社長さんの奥さんにしてくれたら！」

由美子は叫んだ。

藤見郁作「俺の心に悪魔が住む」より。

裏窓十月新装号 定価一五〇円
送料・十二円 発売中 久保書店

地獄変桃源城

葉田 光

古正英生・画

☆天下人秀吉を憔悴させる紅蓮の焰の中の裸女の群れは恨みの声を……

秀次の亡霊

秀吉は、ここ数日来、夜ごと夜ごとの亡霊の幻覚に襲われて、重病人のように憔悴しきっていた。

たださえ、瘦せ尖っている猿面さるすけの頬骨が、鋭利な刃物で削り取られたようにそそり立ち、燭った眼玉が、暗い谷間の底で、どろんと沈んでいた。

まさに、幽鬼に似た不気味で陰惨な変貌に、近侍や腰元たちは、得体の知れない謎と不安を覚えていた。

秀吉の幻覚の亡霊――。

それは、今から一月ほど前、高野山、青嵐寺で自刃させた養子、秀次と、秀次自刃後、亀山城にお預けとなっていた秀次の幼子女五

人、及び、妻妾三十四人。三条河原で打首にした者たちであった。

千軍万馬の間を往来し、惨虐な殺戮の場や死人を何人ともなく見て来ている秀吉なのだ。

いまさら、死んだ輩の亡霊になやまされようとは、秀吉自身苦笑ものであった。

だから、十日ほど前の深夜、ほとほと肩を叩くような気配にふと眼覚めて、枕許に、白いものが、幻のように、ぼっそり立っているのを見た時、別段驚きもしなかった。

眼をこすると、その幻影は、消えてしまったのである。

（おれは酷く疲れているのだ……文禄の役（朝鮮征伐）でえろろ心労したあと、秀次のことでまた苦勞したからな……）

秀吉は、枕頭にうかんだ白い幻影が、体の

疲労からくる錯覚だと思っていた。

ところが、次の夜、またしても、深夜に、ほとほと肩を叩かれた気配。起き上ると、前夜よりもその幻影は雄然としていた。

髪をさんばらに、蒼白い顔を醜くゆがめて自分を睨んでいるのは、まぎれもなく、秀次であった。

二、三度まばたきし、錯覚を破ろうとしたが、眼前の秀次の幻影は消えないばかりか、ますます、鮮明に浮き上って来た。

その上、秀次のまわりに、白くもやもやとしていた幻影までが、徐々に、その姿を現わして来た。

秀次の寵妾一の台はじめ、三十四人の美女たちが、いずれも、髪ふりみだし、蒼ざめた顔で凝然と見詰めている。



秀吉は、さすがに、激しい恐怖に慄然と心の臓までが、毛ば立つ思いだった。

叫び声をあげようにも声が出ない。

そんな恐怖が半刻ばかり続いたあと、やっと、眼の前から、秀次たちの亡霊が消えたが、秀吉は死人のようにぐったり床に突つ伏していた。

それから毎夜、同じ時刻に、秀次たちの亡霊は、秀吉をさいなんだ。

もはや、それは、秀吉にとって錯覚ではなかった。

彼は夜が怖くなり、宿直の近侍の数を増やした。が、それは少しの効果もなかった。

秀吉は、秀次の亡霊

にむかって、こう声にならない叫びをあげるのが常なのだ。

（秀次、おのれが、わしにうらみをいうことがあろうか……そもそも、あななり果てたのは、おのれの身から出た錆なのだ……世人から殺生閔白、畜生閔白というそしり名を塗りつけられ、理不尽の限りを尽したためなのじゃ……）

これに答えるように、秀次の亡霊の嘆がれ声が、はねかえってくる。

（おれは殺されてもよい……したが……何も、年齒もゆかぬ子供五人、それに、妻や妾三十四人までも、打首にすることはなからう……）

（だまれ、おのれを養子にとり、閔白までつがせてやった太恩を忘れ、荒淫に耽り、あまつさえ、寵妾一の台の母子を併せて閨中に入れた畜生奴……おのれが畜なら、女共も大畜生じゃ……だから、おのれの血縁は根絶やしにしてやったのじゃ……）

（おれが荒淫者なら、おのれはなんじゃ……おれのしたことをとやかく言えるか……）

この秀次の反問には、秀吉もしばし言葉が出なかった。

秀吉も身に覚えのある荒淫者である。

北の政所、松の丸殿、三条殿、加賀殿、茶

々（淀君）殿、この五人は表向きの女君だが、その他、桃山城中には、手さえ出せばすぐわがものになる数百人の美女がうようよしっているのだ。これぞと思った女は、誰の妻たり娘たりとも容赦はしない。現に、蒲生氏卿の後室を強引にものにしたかと思うと、信望厚かった茶礼の大家、千利久の娘吟女をねらった。清廉な性格の利久からはげしくはねつけられると、利久を無惨にも一条戻橋の下に梟した。これは天正十九年のことで、まだ、秀吉の脳裏に生々しく刻みこまれている。一卑民から天下を牛耳る現在まで、そののし上りの間に、どれだけ多くの荒淫と残虐を踏み越えて来たことか。

秀次の亡霊との問答は、とりも直さず、彼、秀吉自身の心の中の葛藤にほかならなかったのだ。

妻妾三十四人

「殿下、近頃お顔のお気色がすぐれませぬが……何か御心痛のことでもござりますので……」

寵臣、曾呂利新左衛門が、伺候の際、秀吉のやつれた面をうかがいながら言った。

桃山城、本丸の堀端である。

夏の南風が少しきつく、松籟が、堀の川面を渡っていた。

秀吉は、新左衛門の視線にかまわず、はるかに見渡せる淀城の方を、熱っぽい眼で見詰めていた。

淀城には、二年前の文禄二年八月、嗣子の秀頼を生んだ茶々がいる。秀頼もいる。

「殿下……新左、殿下の心が読め申しましたぞ……茶々御料人のことで御心痛とは、なかなか、色よいことで……」

へへへつと、新左衛門特有の黄色いお愛想笑いを立てた。いつもの秀吉なら、つりこまれて苦笑ぐらいするはずなのに、秀吉の唇は綻びもしない。

「殿下、秀頼さまのことなら御心配無用でござりましょう……さきの棄丸さまの御病体とは違い、御壮健この上もないとのことではござりませぬか……きつと、御成長の暁は、器量のよい大將軍におなり遊ばしましょう」

新左衛門は、先に夭折した棄丸君と同様に、秀吉が、秀頼のことを慮っているのではないかと勘ぐっての慰め言葉だったのだが、秀吉の表情は微動だにしない。

新左衛門は、自分の想像が全部違ったこと

を知ると、黙ってしまった。

「新左、誰にも言うてはならぬぞ……実は……な……わしはいま秀次めにのろわれておるのじや……」

「え？」

「亡霊じゃ……秀次めや、秀次の妻妾めらの亡霊が、夜な夜なわしの枕頭に立つのじゃ……きつと、今夜もやってくるであろう……」

新左衛門は、秀吉の言葉をきいて、沈んだ眼になった。

新左衛門の脳裏には、まだ生々しく、あの凄惨な三条河原での斬首の光景がこびりついているのだ。

つい三月前の文禄四年春たけた頃のことである。

それより二月先、秀次は秀吉の命により高野山で自刃、年二十八であった。秀次の住んでいた京都の広大な聚楽第の邸内にいた妻妾三十四人と子供たちは、亀山城で、秀吉の裁決を待っていたが、全員、斬首と決まった。亀山城から彼等は京都に送られて来た。関白秀次の威光をもって、諸国遠離の果までも尋ね廻って集められた美妃ばかりだった。上は公卿大名の姫君から、下は小名土庶人の娘に至るまで、十六、七の女の花盛りであった。

彼女等は死装束の白かたびら姿で、蔽いのない輿に載せられ、都大路を引き廻された。

殺生閔白、畜生閔白の嬖妾よ、畜生女子よ、と野次馬たちが嘲笑し、投石した。秀次の虐殺を憎悪した群衆が、ありつたけの罵りと侮蔑を投げたのは当然であつたろうが、彼女たちこそ哀れな犠牲者であつた。

刑場の三条河原は、黒山のような人だかりがした。好奇心よりも、憎悪心の爆発だつた。

懐妊の腹を生きながら、裂かれた者の身内

は、彼女たちの腹を裂けと叫び、手足をもがれた者の血縁者は、それと同じ加虐を要求した。

河原の砂利の上にずらりと三十七人が引き据えられた光景は、女たちが美しいだけに、一種異様な妖しい雰囲気があった。

刑史の太刀が、漆黒のすき髪の白い首を飛ばすたびに、矢来を押し倒さんばかりに増集した群衆は声もなく、血ぬられてゆく美女たちへ、眼ばかりをギロギロ光らせていた。

あらかじめ、秀吉の下知があつたとはい

え、一の台母娘の仕置は惨を極めた。

一の台母娘は、秀次の閨中へ、夜毎二人して同衾したというだけに、秀吉の嫌悪は酷かつたのだ。

まず、一の台が素裸に剥がれたあと、娘も同じあられもない姿にされて、二人して、河原の砂利を口にふくませられ、獣のように、四つんばいになって、はわされた。

矢来の群衆が投石するのも許された。群衆はこぞって、砂利石を掴んで、母娘の素肌へ投げつけた。喘ぎ絶叫し、果ては力尽きて動



かなくなった一の台母娘を刑史は抱き合した上、一太刀で、二人の首をはねたのである。

こんな悲惨な最後を遂げた彼等の首を畜生塚として、基を建てることすら厳禁した。

つまり、秀吉にしてみれば、関白秀次が世人から受けた憎悪を少しでもやわらげるための政策的な見せしめだった。

身内であろうと悪逆に対しては苛責なく罰するぞ、という誇示でもあったのであろう。

「新左、何か妙案はないか……亡霊退散の……」

秀吉の言葉に新左衛門は、凄惨な追憶からさめたが、黙り続けていた。

「新左、妙案はないか」

秀吉の眼が鋭くなったとき、新左衛門はひやりとした。

新左衛門は秀吉の性格を知り抜いていた。

寵愛するといえは、滅多やたらと猫可愛がりだが、少しでも気にそぐわぬとなると、ガラリと豹変する。千利久の例を見てもそのことがよくわかるのだ。あれほど信望厚かった利久も、斬首された。それも、普通の仕置の方法ではない。

『宗易（利久の本名）が首を一条戻橋の下に梟し、彼の木像を掲げてその首を踏ましめ、

柱を以ってこれを夾立る。数日視る者市のごとし』と秀吉譜に載っているとおりの惨酷さなのだ。

新左衛門は苦しまぎれ、秀吉へとり直すように言った。

「秀次さまのお住いあった聚楽第を取りこぼしては如何なもので……亡霊はその住いしたところに巢喰うと申しますほどに、それを取りはらえば、亡霊も行方がなくて、自然消滅致すのではございますまいか」

秀吉は黙って深くうなずいた。

数日後、聚楽第の取りこぼちが諸大名の手によってはじめられた。

茶々と秀頼

聚楽第が毀たれる間も、夜ごとの秀次たちの亡霊は、秀吉の枕頭から消えなかった。

秀吉の焦悴は極限に達した。その陰惨な面相と同様に、無口になり、近侍や側仕えの女たちへとげとげしくなった。今まであまり通わなかった城中の、寵妾たちの閨へも毎夜のように居続けた。長い間、淀城の茶々へ、秀吉の寵愛がかたよっていたとばかり空聞をかこっていた松の丸殿はじめ、三条殿、加賀殿などは、秀吉の寵愛を取り戻したかのような

よろこびの表情をみせて、精一杯の奉仕に勤めた。

が、事実はそうではなかった。秀吉は、ただ、夜ごとの亡霊の恐怖から脱れるための方便だった。だから、秀吉の愛戯は尋常ではなかった。亡霊の恐怖を忘れるため濃厚な常規を逸したものであった。

しかし亡霊は霧散するどころか、夜伽ぎの女たちには見えなくとも、秀吉の眼の前には、ぼっそり浮かび上るのである。

柔らかな暖い女の肌の痺れるような愛戯も、微塵の効果もなかった。秀吉は焦燥し、側室ばかりではなく、手当り次第に、城中の若い女たちをいたぶった。

まさに、桃山城は桃源城といった方がふさわしい荒淫が渦巻くに至ったのである。

（それ見たことか、おのれもおれと同じ運命におとし入れてやるのだ……）

秀次の亡霊のこんな声が夜ごと、秀吉の頭脳を混乱させた。

「聚楽第さえ完全に毀たれさえすれば、秀次めらも、出て来ぬであろう……」

秀吉はそれが唯一の希望だった。

秋色がめっきり濃くなったある日の朝早く、秀吉は、聚楽第が跡形もなく毀たれた報

を受けた。

一瞬、ほっと救れたような眼になり、しばらく遠ざかっていた茶々と秀頼の許へ出掛けようという気持が湧いた。

秀吉が茶々の許へだけ通わなかったのは、彼なりの理由があった。秀次たちの亡霊が消えない時に、茶々や秀頼との夜を持つことは、秀次の亡霊が眼に入れても痛くない秀頼や寵愛の限らない茶々にのり移る、と懸念したからなのだ。

秀吉は曾呂利新左衛門はじめ小人数の供揃えて宇治川を舟で淀城へ下った。

道中、秀吉は至極、明るい顔をしていた。

秀吉は豊艷な茶々の白い肢体を腋の裏にうかべたり、秀頼の童顔を描いたりして、紅葉に朱をぬりたぐったような兩岸の華麗な景色を眺めていた。

と――

秀吉の眼に白く焼きついたものがある。膝まで裾をまくり上げた百姓娘だった。川畔で、すすぎものをしているのだ。

「新左、いい女子がいるではないか……」

「はあ、仰せの通りで……」

「遠目で貌はしかとはわからぬが、年齢の頃は十六、七じゃな……あの陽に光る白い肌は

練絹に違いない……氣にいったぞ……域中へ召上げるよう手配致しておけ……」

新左衛門は、秀吉の好色な眼が射止めた百姓女を見詰めたが、心の中で呟いた。

「愚かな女め……白い膝さえ出さねば、殿下の眼につかぬものを……」

新左衛門は、秀吉が上淫を好み、下淫をい

やしむ性癖のあることを熟知しているだけに、城内に召し上げられた百姓女の哀れな先が見えて、一掬の同情を禁じ得なかった。

おそらく、その百姓女は、秀吉の気まぐれなもてあそびの道具とされるに決まっているのだ。

黄昏頃、秀吉は、淀城内に着いた。



その深夜である。

健やかに育ちつつある秀頼に皺面をほころばせ、上々機嫌の秀吉は、茶々の豊艶な白い肌のぬくもりに、とろとろと仮睡んでいた。抱き締めた茶々の肌から、ふくいくと匂ってくる薫香に、痴態のあとの安らかな桃源の夢の中をさまよっていた。

不意に、茶々が激しい叫び声をあげて、秀吉を揺り起したのである。

「で、殿下、起きて下さいまし……」

「如何致したのじゃ？」

「ほれ、あの襖の影に、白いものが……」

わなわな震えながら、指さすところに、ぼつそり立っているのは、秀次はじめ妻妾たちの亡霊だった。

「茶々……そなたの眼にも見えるのか？」

秀吉は背筋に粟を生じながらも、思わず聞いてしまった。

今まで、自分だけに映じた亡霊で、他の者には誰も見えなかった亡霊なのだ。だから、茶々にも見えることが不思議だった。

「はつきり見えるか……誰だかわかるか？」

「ひ、秀次どの……それに一の台どの……」

茶々が亡霊の名を次々とわなわな声で言うので、秀吉は白刃の下に首を据えられたよう

な恐怖に襲われてしまった。

（とうとう、茶々にも乗り移りおったか……）

秀吉は心の中でこう呟いたあと、脳裏を斬り裂くようにかすめて通ったのは、秀頼の懸念だった。

が、いつものように極度の恐怖に身内が徐々に硬直し、言葉も出なくなっていた。

秀次の亡霊が蒼白い顔で、ニタツと笑ったようだった。

（おれの子供と同じように、秀頼めも茶々めも、のろい殺してやろうぞ……）

あの不気味な唳がれ声が、秀吉の頭の芯をざくざく突き刺すように響いた。

（茶々にも今の声がきこえたろうか……）

秀吉が血走った眼で傍の茶々を見ると、茶々は眼を吊り上げ、顔は死面のように土気色で動かなかった。

長い亡霊との対決だった。脂汗でぐっしょり濡れ、亡霊が消えたあと、秀吉は肩で息をしながら、やっと我にかえったとき、茶々は床の上で気を失っていた。

「茶々、茶々よ、しっかりせい！」

秀吉が抱き起すと、茶々は薄目を開けたまま、声もなかった。

「誰かある！ 誰かある！」

秀吉の甲高い声に、近侍が二人、足早に来て平伏した。

「秀頼どのの安否が知りたい、すぐ参れ」
秀吉は怒鳴り声で言った。

近侍が帰って来て伝えたことは、秀頼高熱ということであった。

秀吉は顔色を変えると、酷く興奮した時にだけ浮き立つ、肩間の太い青筋を一文字に浮き上らせて、叫んだ。

「新左を呼べ……曾呂利を即刻伺候させい！」

紅蓮地獄の夢

深夜の火急の伺候を淀城内の侍長屋で新左衛門が訊いた時、一瞬、沈鬱な表情になった。どうせろくなことでないことはわかり切っている。

「新左、聚楽を取り毀ったというに、出おつたぞ、秀次めらが……」

秀吉は苦り切った顔で、新左衛門に言った。

「しかも、茶々や秀頼にも乗り移ったようじや……如何致す……」

新左衛門は平伏しながら、首筋に冷たいものを感じていた。



(殿下の亡霊は、殿下の心から発するもの、わしの知ったことではない……)

新左衛門はこんな反撥を心の中で呟いていた。

今さらのように、秀吉の寵愛を後悔した。もともと、新左衛門は和泉境浦の南荘で、刀鞘造りの職人だった。天下の威光者である太閤殿下の傍近く仕えるほどの出世は稀有のことなのだ。彼特有の酒脱さや和歌、茶事、香技などに秀れていたことを秀吉の気に入られたのはたしかだが、何よりも、彼は秀吉の御機嫌取りに異常なほどの神経を使った。いわば、

犬猫が飼主に絶対従順であることから、愛情が湧くといったことと同じことだった。秀吉にとって、新左は飼われた玩具に似ていたのだ。

「その方の頓才を働す時だぞ……なんぞよい才覚を考えろ」

「はい……明朝までには何か考え出しましょうほどに、しばしの間、何卒、なにとぞ……」

新左衛門はただ叩頭するだけだった。

とにかく、秀吉の機嫌を損ねては、利久の二の舞にもなりかねないのだ。

新左衛門は秀吉の許から侍長屋へ帰る途中、貧しかったが、刀鞘を削っていた頃の生活が、懐かしく思い出された。

夜明けまで、新左衛門はまんじりともしなかった。

妙案はうかばなかった。

亡霊を慰めるための大供養という手など、とうてい秀吉がうなずくはずはなさそうだった。なにしろ、基も建てさせず、畜生塚と命名したほど、秀次へは怒りをこりかたまらせているのである。

考え疲れた新左衛門は、明け方から、とうとう仮睡んだ。

そして、不思議な夢を見たのである。



紅蓮の焰の中でのたうつ豊満なうら若い女の裸身、それも一人や二人ではない。三十数人の女体が、紅蓮地獄の中で、白い花びらをそよがすようにもだえ揺れているのだ。

真っ赤な焰の舌と真っ白な裸女の色のとりあわせは、華麗な絵を思わせた。

それに、その身もだえするうら若い女たち

の苦痛に歪んだ顔の一つ一つが、はっきりと見えた。

秀次の妻妾たちである。

女たちは、膨んだ乳房をふるわせ、腰をねじり、四肢を折りまげながらも、眼だけはきつと鋭くみひらいて、大きく開いた紅唇から、おどろおどろと、悲痛なうらみをこめた

声をあげている。

「秀吉が憎いぞオ……茶々が憎いぞオ……秀頼も憎いぞオ……うううつ、おおおつ——」

そんな叫び声がやがて、海なりのような物凄さになり、百雷の一度に落ちたかのような不気味な轟音になった。

新左衛門は、夢の中で、必死に逃げようとあせった。

息がつまりそうになり、やがて、はっと眼覚めたのである。

べっとり脂汗が体中を濡らしていた。

もう高くなった秋陽が、新左衛門の悪夢にうなされて、蒼白になった、横顔を照していた。

「新左衛門さま……殿下がおよびでございませう」

腰元が襖越しにそろりと声をかけてきた。

新左衛門は沈鬱な顔になった。

まだ、秀次の亡霊を退散させる妙案は片鱗だに浮かんではいない。

新左衛門は秀吉の御前へ伺候するため侍長屋を出たが、息詰りそうな緊張を覚えた。

頭の芯深くまだあの紅蓮地獄の悪夢の光景が焼きつけられ、秀次の妻妾たちの白い花びらのような裸身がゆらゆら揺れ動いていた。

ふと新左衛門の脳裏に、その悪夢から、一つの頓智がうき上った。

彼は思わず手を打った。

「そうだ、秀次や妻妾たちのうらみをやわらげるために、彼女たちが受けた以上の苛責を秀吉や茶々や、秀頼が受ければいい……あの亡霊たちはそれを望んでいる……あの夢のような紅蓮地獄でもだえ苦しむ秀吉や茶々や秀頼の姿を絵に描かせて、それを供養にしてはどうであらうか……地獄変相図を屏風に描かせるのだ……これは、まったくいい考えがうかんだものだ……」

新左衛門は少し心の中が明るくなった思いだった。

こんな考えを引き出してくれた悪夢は、もはや悪夢ではなく、むしろ、救いの善夢であった。

破門の絵師

「……で、その屏風絵を何者に描かすのじゃ……」

新左衛門の地獄変相図の妙案を聞いたあと、秀吉は、むづかしい渋面のまま聞いた。

「狩野永徳、おなじく山楽、または海北友松など、殿下には名うての各人上手がおわしま

すではござりませぬか」

新左衛門がこう答えるのに、秀吉は渋面を少しも柔らげず、重い声で言った。

「たとえ屏風絵にしろ、わしをはじめ、茶々や秀頼の苛責の図を書くに申すかな」

「殿下がお命じになればよろしいではござりませぬか」

「わしの口からは言えぬ……それに、わしが秀次めらの亡霊にのろわれているということとは極秘にして置かねばならぬ」

「ではわたくしめが、なんとか取りはからいましょう」

新左衛門は、秀吉が、自分たちの顔に似せて地獄変相図を描くことが、酷く気に入らない様子を察しながら、首をすくめたまま御前を退いた。

秀吉はその日のうちに淀城を後にして、再び川舟で、桃山城内に帰った。

その早急の淀城退出には、茶々や秀頼にまといつく亡霊をおもんばかったのことだったのはいうまでもない。

新左衛門は地獄変相の屏風絵の揮毫者を早急に決めるべく、最初に永徳を訪ねた。

「もっての外でございます……殿下の地獄の苛責図なぞ」

にべもなく拒絶された。

山楽も同様だった。

新左衛門は、人物画を得意とする海北友松を最後の頼みに出掛けたが、

「殿下はお心变りの激しいお方……その絵が首取りの絵にならぬとも限りませぬからな……桑原、桑原……」

と、友松は首をすくめた。

新左衛門は途方に暮れ、暗澹たる気持にふさぎこんでしまった。

友松の邸を出ると、後から、ひたひたと足音がした。

「もし、曾呂利さま……」

その声に、新左衛門が振りかえると、華奢な若い男が、眼だけ鋭く光らせながら立っていた。

「曾呂利さま、さきほど、師匠との御話を盗み聞きましたが、その屏風絵を、わたしに描かして頂けませぬか」

「そちは何者じゃ……」

「海北友松さまの弟子で、峯仙と申します……いや、つい先刻、破門されて、友松の弟子ではござりませぬが、ぜひ描きとうございます……」

新左衛門は、その峯仙と名乗る絵師の眼に

異常なほどの熱っぽさを見てとると、興味が湧いた。

「そちに描かしてもよいが、生命をかけてくれる勇氣はあるか」

「生命……そんなものいまのわたしには少しの未練もござりませぬ……実は、友松から破門されたのも、わたしの絵が師匠の絵柄とあわぬため……わたしは、自分だけの絵を描いて見たいのでございます……太閤殿下の屏風絵に生命をかけるのは、絵師として本望でございます」

「ではいうが、ただの絵ではないぞ、地獄変相図じゃ……」

「どのような絵でも、絵には変りはござりませぬ……」

「よしわかった、そちがそれほどの心構えなら、何もかも話そう……」

新左衛門は、秀次の亡霊の秘密を打明けたあと、宣告するような上ずった声で言った。

「生ぬるい地獄変相図では用はなさぬぞ……眼の前で、生きたような苦悶のさまを描かねばならぬ……それに、もし、その屏風絵が、秀次らの亡霊を退散させぬ時は、首をかき落されるかも知れぬのだぞ……」

「覚悟は出来て居ります……それほどの大事

な屏風絵なら余計に描きごたえがございませ……絵師の冥利というもの……」

新左衛門は、峯仙の獣のように鋭く光る眼に、絵師としての狂ったような情熱を感じた。

地獄絵の手本

「峯仙、仕事ははかどるか？」

新左衛門は、峯仙の仕事場にくると、いつものように、同じ言葉をかけた。

あれから、もう十日たっている。

桃山城内の峯仙の仕事部屋だった。

新左衛門は、峯仙の口から、秀次亡霊の噂が洩れるのを慮かって、峯仙を桃山城三の丸の多聞の中に閉じこめたのである。

広い板の間の一隅で、ぼつねんとあぐらをかいている峯仙の顔には、疲労と焦燥の色が濃かった。

峯仙の坐っている周囲には、下絵の紙くずが散乱していた。

その一枚一枚に、異様に歪んだ裸女の肢体や男の体が描きなぐられてある。

「何をぼんやり腑抜しておるのじゃ」

「曾呂利さま、お願いがございます……」

峯仙は深刻な眼で言った。

「どうしても、紅蓮に焼かれる人間の体の曲り具合が描きませぬ……どんな型になるものなのか、その姿を、この眼でほんとうに見とうございます……」

「と申すと……」

「手本が一人必要でござります……」

「その者を紅蓮の焰で焼いて見るといいうのか」

「はい……そうでもしないと、とても、亡霊を退散させるような、凄まじい絵柄は出来そうにありません……」

「……うむ」

新左衛門は眉をしかめて、低くうめいた。翌日、新左衛門は、梟首にされるはずの非人を一人、峯仙の仕事場へ送りこんだ。

二日後、新左衛門が仕事場を覗くと、その非人は無惨に焼き殺されて、転がっていた。

「曾呂利さま、男の絵はどうやら目星がつかしました……やはり手本があれば……」

興奮した眼で、峯仙は下描きの絵紙を見せた。

「むっ」

新左衛門は眉をしかめると、うなった。まさに無惨な死様の絵だった。

「曾呂利さま、これで、男の地獄の苛責の絵

はできますが……茶々さまは女子……女子の苦悶の肢体は、やはり手本がいります……」

「……」

「女子のからだは男と違って、しなしなとしております……男を描く筆法では、とても、よく現わすことは出来ませぬ……」

「……」

新左衛門は、峯仙の眼に、狂人的な光を見る思いで、うすら寒さを覚えた。

「茶々さまは、この世でも類稀な、美女と聞き及んでおります……手本の女子も、そのよ

うな美女を……」

峯仙が熱つぽく言ってくるのへ、新左衛門は、ふと脳裏にうかべた女の顔があった。

秀吉が淀城へ宇治川を舟で下るとき、川の畔で膝まで出してすすぎものをしていた女である。

召し上げて、お登和といった。すぐに、秀吉の夜伽にあげられたが、気丈な女で、秀吉に楯ついた。秀吉は持前の冷酷さから、無体に彼女の操を踏みにじったあと、獣のように、城内の座敷牢へつないだ。遠からず、斬

首の運命が待っている女だった。

農満な肌の白絹のように美しい女である。

おそらく、茶々御料人にもおとらない秀色を持っていろいろ、と新左衛門は思ったのだ。

(可哀そうだが……仕方があるまい……)

新左衛門は、うすら寒い気持で、峯仙の仕事場を出ると、お登和の入牢している座敷牢へ行った。

荒格子の中で、お登和は痛々しく後手に縛られてうなだれていた。



やつれてはいたが、容色は凄艶さをさえましているようだった。

座敷牢の鍵を開け、新左衛門はお登和を引き出した。

「お仕置でございますか……」

お登和は冷静な眼で、新左衛門を見て聞いた。

「計せ……太閤殿下のお怒りが解けぬでな」

「覚悟は致しております……けれど、何故、わたくしがお仕置を受けねばならぬのか……わたくしは口惜しゅうございます……秀次さまも太閤さまも同じ、犬畜生でございます……」

怒りの声が、新左衛門の胸を貫いた。

（太新殿下の走狗となっていなければならぬ、わしも、犬畜生だな……）

彼は心の中が、氷のようにいてつくのを、苦しい気持で、かみしめていた。

峯仙慕情

峯仙は、お登和が、後手に縛り上げられた痛々しい姿で、引きすえられた時、その凄艶な美しさにうたれた。

広い多聞の板の間で、峯仙はお登和と、黙ったまま、見合っていた。

やがて、峯仙の心の中に、お登和へ、そこはかとなない愛情が湧き上った。

「さ、早く、一思いにお仕置を……」

黄昏近くの茜陽をその横顔に受けたお登和が、峯仙に言った。

「わたしは絵師なんだ……」

ぽつりと答えたあと、峯仙は言葉をついだ。

「したが、そなたお仕置を受けるような悪いことをしたのか……わたしにはそうは見えぬ……」

「わたくしは何も悪いことをした覚えはありません……」

「したが……曾呂利さまは、そなたは打首にされる罪人故、如何ようにしてもよいと仰せられた……そなた……ここへ何故連れて来られたか知っているのか」

「知りませぬ……」

「地獄絵の手本になるためじゃ……紅蓮の焰に焼かれる女子の赤裸を描く手本になるためなのだぞ……」

峯仙は、手もとに散らばっている地獄図の下描きを見せた。

「したが……わたしには、そなたをそのようなむごい仕打はできぬ、とてもできぬ……」

峯仙は頭をかかえて突っ伏した。

翌日昼さがり、新左衛門は、何か空恐ろしい気持に駆られながら、峯仙の仕事場を覗いた。

新左衛門の脳裏には、さきに、峯仙の地獄図の手本となって、もだえ苦しんで焼け死んだ男の非人と同じ姿を、描いていたのだ。

が、お登和は縛られたまま生きていた。

新左衛門ははっと安堵する気持の反面、秀吉の陰險な猿面を思い出していた。

秀吉の亡霊に責めさいなまれる度は、夜ばかりではなく、昼間でも、度々おこった。

秀吉の狂乱は、桃山城を深い憂色にとざした。

亡霊の恐怖からのがれようと、秀吉の荒淫は、城内のあらゆる女たちを、始終、おびえさせていたのだ。

秀吉は、手あたり次第、荒々しく女たちの柔肌をむさぼり喰った。

そして、今朝早く、火急の伺候の際、秀吉は、もはや、常人とは思われぬやつれ果てた形相で、新左衛門を睨めたのだ。

「新左、地獄変相図はいつ描き上げるのじゃ……早ようせい……明後日までに……描き上げさせろ、よいかつ」

もはや、猶予はならなかった。

峯仙の首だけでなく、自分の首もあぶなくなつたのである。

「峯仙、殿下は、明後日まで描き上げろとの仰せだ……頼むぞ」

「はい」

「したが、この子を手本にした様子も見えぬが……」

「きっと描き上げますほどに……」

新左衛門は、この時、峯仙のお登和を見詰める眼に、あの絵道に狂ったようだった光りが、やわからかになごんでいるのに気がつかなかった。

期日の朝が来た。

新左衛門が不安と期待の入り雑った顔で、峯仙の仕事場に出向くと、六双の屏風の中に、紅蓮地獄の凄まじい絵が浮き上つていた。

めらめらと紅蓮の焰の舌が、三人の人間をのんでいる。

半裸の痩せた男は、苦悶に四肢をうちふるわせ、髪に燃えうつった焰を払い落そうと、大きく口を開いて、断末魔の叫び声をあげている。

豊満な双の乳房をゆすり、くびれた腰をね

じまげ、四肢を浮微なくまどりに押し開いて、紅い焰の中で白い花びらのように咲いている苦痛の女体は、茶々だった。

そして、秀頼らしい童子が、焰の舌で、半分黒く焼けただれている。

眼をそむけたくなるような地獄変相図であつた。

「うむ」

新左衛門は獣のようにうなつて、その屏風絵を見詰めていたが、峯仙の傍で、ちょこんと坐っているお登和の満ち足りたような美貌を見て、げげんな顔をした。

お登和は縛めを解かれていた。

だが、新左衛門は、お登和が無惨な姿になつていないことに、何か救われたような気持ちになった。

「曾呂利さま、お願いがございます」

峯仙が言った。

「なんじゃ……」

「この絵のお礼を頂きとう存じます……」

「うむ」

「このお登和をわたしに下げくださりませぬか」

「お登和を……したが、お登和は罪人じゃ」

「お登和以外のお礼は何も無用でござります

る」

新左衛門は、峯仙とお登和との間にはぐくまれた愛情を、はじめて感じた。

「したが……この地獄変相の屏風絵の効力が問題じゃ……」

「大丈夫でございます……わたしは、わたしの生命とこのお登和の生命をかけて描き上げました故……かならず、秀次さまの亡霊も慰ましましょう」

「氣に入つたぞ、峯仙……もし効がなくてもそちの言葉で、わしは本望じゃ……わしの首が飛んでも悔はない……」

新左衛門は苦い笑いの中で、何か、生き生きとした眼になっていた。

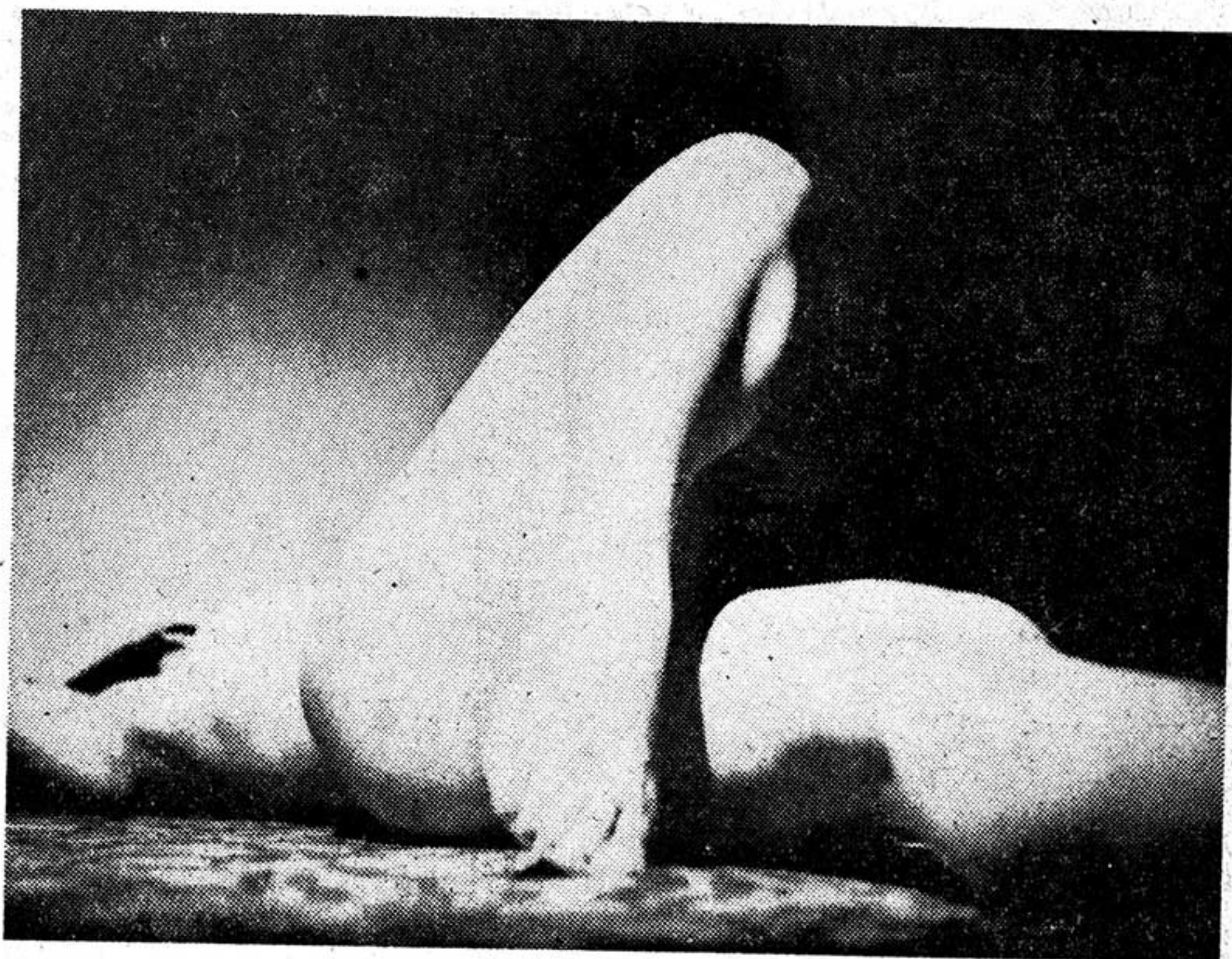
峯仙の描いた地獄変の屏風は、秀次たちの亡霊を霧散させた。

秀吉をはじめ、生きかえったような夜を送ることになった。二月後。

(今頃、峯仙とお登和は手に手を取って、北陸路を旅していることであらう……わしの頓智も、これで、面目を施したというものじゃ……)

新左衛門は心から笑った。

△完▽



★映画雑感★

雑草の猿轡

高円寺一郎

「現代は、アンチ・ヒュウマニズムの時代だ」と言う、松竹映画の新鋭、大島渚監督が、第三作「太陽の墓場」を作った。

大変にドギツイ映画であり、その点では盛り沢山だ。

但し、ドギツさと映画の迫力とは別物であり、金を払って交通事故や殺人現場を見物したような、そんな気分がする映画である。

「観客よ、これが太陽の墓場という映画である。どうだ。新らしいだろう」

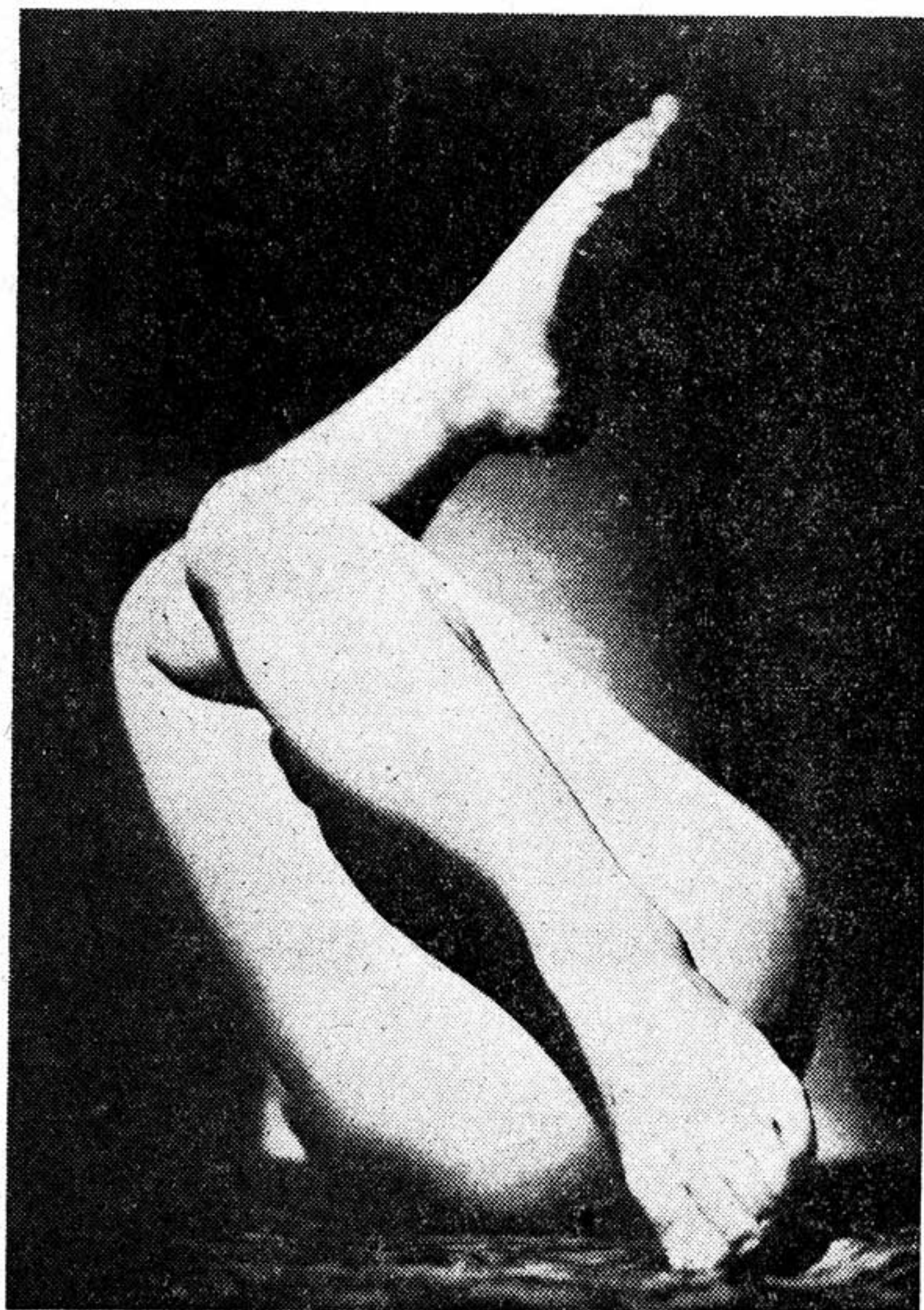
「ははあ、そうですかね、松竹さん」

ということになり、ヌーベルヴァークとは厄介なものである。主題を曖昧にしておいて凄む技術を、早くもこの監督は身に付けようとしている。

主役の残酷少女の中に日本の運命を象徴したものらしい——という説が有ったが、象徴と曖昧の区別が付いていない点においては、日本国憲法第一章第一条と同様である。

ヌーベル・漠——と言いたいが、まあ、強いて解釈をするなら「悪い奴ほど生き残る」というのがテーマだろう。

主役に起用された炎加世子はナマの個性そのままが役柄に合ってまず成功。東映の「ズベ公天使」に端役で出ていた時には、浜村美



智子の腹違いの妹みたいな変な娘だ、という感じがしたが、これは案外に使えるタレントかも知れない。他に役者では津川雅彦が新しい面を精一杯に演じているが、貴公子型的美貌がたたって現実感が湧かない。

残酷描写の新手が二つ使われている。

一つは、ホルモン焼きの材料（と言うから牛の臓モツだろうが、切り刻む前のグロな姿を余り見る機会のないところがミソである）で顔を殴るリンチ場面であり、殴られるのは歌手が本職の佐々木功。シスターボーイ型の少年である。

いま一つはランデヴー中の少女を白昼の、廃墟で犯かす場面に使われる「草の猿轡」だ。男を汚水の中に突き落してから女を押し伏せ、叫び声を立てられないように傍の雑草を引き抜いて根の方を口へ押し付ける。まだ高校生らしい女の顔に泥が散乱して——という具合であり、現場には、汚水の中の男の他に気の弱いチンピラ（佐々木功）も居るのである。チンピラ二人の本来の目的は金品の強奪に在るのであり、狼籍の方は事の序で行なわれたのだ。

眼の前で恋人を犯された男は自殺し、女は後に復讐を企て果たせず、炎加世子に崖から突き落されて死ぬ。

この他、病気で客を取れなくなった女を、「スクラップ」と呼んだり、そのスクラップが逃げ出そうとしたのを捕えて鞭打ったり、女の背中の鞭の痕を見せたり——人物や事件の設定、及びその描写は稀に見る百鬼夜行ぶりである。

但し、ドギツクはあっても泥臭くはしなかった点が、やはり才能というものだろう。

前作「青春残酷物語」でもそうだが、この監督は鞭の痕だの悪性のデキモノなどを好んで画面に出す御仁である。



猿飛一族

山乱破秘聞

万里小路 崑

栗原 伸・画

一

「——地獄ヶ岳に登るのは止めておきなされや」

と、作右衛門は老いた顔を曇らせて、自分を凝視している島大作に首を振った。

「名主どの、それはどのような理由があって申されるのか」

大作は語気鋭く尋ねた。

ここは、伯耆と美作の国境に連なる深い山脈の、麓にあるわびしい小さな村である。

「まずは娘御の登れる山ではないですじゃ」

作右衛門は眼をしばだたいて、大作の傍に体を固くして座っている志乃を見た。

志乃はかすかに頬を染めた。無雑作に豊かな髪を束ねて背に垂らし、男の小袖をまとい、野袴を着けた志乃は、山に登る決意である。華麗な色彩のない衣裳に身を包んだ志乃からは、初々しい艶めかしさが匂い立っているのも新鮮であった。「名主さま、私は危険は覚悟しております」

と、志乃は答えて、大作の横顔に信頼をこめた視線を送った。

「名主どの、先年この地を訪れた田部一斎先生の娘御です」

「おほえておりますわい。あのお方も地獄ヶ岳に珍らしい薬草があると申されて、とめるのを振り切って登りなされた。そうして、二度とこの村に降りては来なさらないだ——」

大作の双眸に鋭い光が浮びあがった。

田部一斎は二年前公儀隠密の報告書と思われる旅日誌をふとした事から手に入れた。地獄ヶ岳秘冊と名づけられた項の中に、しるされている薬草が、医師である一斎の心を山に呼んだのである。一斎は単身地獄ヶ岳をめざしたが、深い山脈に吸われるように消息を絶ったのであった。

「拙者は一斎先生の門弟。先生の心を吸い寄せた地獄ヶ岳の薬草を手にする事により、この地に果てられた先生の御冥福を祈る所存でござる」

作右衛門は大作のほとばしるような熱意に搏れたように眼をほそめた。

「山中には、得体の知れぬ者が群れをなして住みつき、近づく人間の命を奪うのですぞ。里の者は地獄ヶ岳には近寄ろうとさせぬのじゃ」

「名主どの、拙者は医術を学んだが、剣の道にも精進しました。御安心下されい」

大作の言葉に作右衛門は軽く首を振った。

「どのような剣術の名人でも、深い山中に住む魔物には敵いませぬわい」

と、作右衛門は気づかわしげな色を、表情に刻みこむと、志乃の美貌を見詰めた。

「うつくしい娘御じゃ、気をつけなされ。山の者はむごい事をするのでう」

「はっ？」

反問する大作には答えず、作右衛門はゆっくりと立ちあがりまがった腰をのばした。

「今宵は充分お寝みなされ。乾飯の用意などは、儂がととのえて進めますでな」

「かたじけない」

地獄ヶ岳に挑む決意が動かぬとみた作右衛門は、濡れ縁を踏んで奥の方に姿を消した。

「志乃さん、拙者はこう思うのだが——」

「おっしゃって下さいまし、大作さま」

と、志乃はにじり寄る。大作はまろやかな志乃の肩に、手を置くと顔をのぞきこむようにして言った。

「あんたはここに残った方がよいだろう。拙者だけで山に登ろう。地獄ヶ岳の名の通り不吉な事が起るかも知れぬ。志乃さんにまで危険が及んでは、亡き一斎先生に申し訳ない」

志乃の双眸がうるみ、紅をささぬ桜桃のような唇が震えた。

「大作さま、志乃はお恨みに存じます。私はどのような事が起ろうとも、大作さまと一緒に参るつもりです」

恋の大胆さが志乃の顔を上気させている。その両手はいつの間にか大作の膝を押えていた。濡う甘い香りが、大作の鼻腔にまつわりつく。

「では、拙者とともに参られるか」

「は、はい——」

大作はふといがっしりとした両腕の中に、しなやかな志乃の体を抱きこんだ。志乃はぶあつい胸にそっと頬を寄せた。

赤蟻は甘い蜜の香りを放つ志乃の乳首に群がって歯を立てた！鋭い痛みがふたつの乳房を……

「大作さま、何故地獄ヶ岳に登るのが危いの
でしょうか」

「うむ、はっきりとはわからぬが、山乱波の
類いでも住んでいるのか知れぬ。もしかする
と先生も、その者共の手にかかって果てられ
たのではないかと思う。いずれにしても、拙
者は地獄ヶ岳秘冊とやらの謎は解く覚悟だ」
「その地獄ヶ岳秘冊を父上が持つて登られな
かったら、その謎を明かすのも簡単でござい
ますね」

「うむ——」

と、うなずく大作であった。

名主の屋敷は小高い丘の上に建っていた。
周囲にはりめぐらした築地塀を越えて、拡が
っている村落のたたずまいが見える。

その平和な光景から、緑のしたたる山脈に
眼を転じた志乃は、ふいに陰気なおぞましい
予感を覚えて、思わず大作にすがりつくので
あった。

二

翌朝——

厳重な足持えに、乾飯などを詰めた割り籠
を、斜めに背負った大作と志乃は山に踏み入
ったのである。志乃は腰に護身の脇差を帯び

ている。先に立つ大作は油断なく眼を配って
いた。

木樵りの踏みこしらえた道を登るにつれ、
初夏の陽光は肌に汗を滲ませるのである。白
白と照らし出されている山は、深い静寂に支
配されていた。眼をあげれば気のせいか暗い
翳に包まれて、地獄ヶ岳はそそり立っている
のだ。

「志乃さん、疲れたかな」

と、振り返った大作が、いたわるように訊
ねる。

「いいえ、まだ疲れませぬ」

息を弾ませて答える志乃であった。

「夕方までに、地獄ヶ岳の下にあるという谷
までたどりつきたい。今宵はそこで寝よう」
熊笹に掩われた斜面が消えると、杉や檜の
巨木が、群れをなして二人の行手に待ちかま
えていた。

林の中に足を踏みこんだ直後、志乃はぞつ
と肌を震わせて、かすれた悲鳴をあげたので
ある。

「どうしたのだ。志乃さん——」

いぶかしんで振り返った大作は、志乃の黒
く濡れた瞳に恐怖の色が浮いているのを読み
取った。

「誰か、誰れかいるのですっ」
「どこにいる——？」

志乃は指をあげて、杉の巨木の一本を差し
した。枝をくぐり抜けて、縞模様をえがいて陽
光が落ちていくだけで人の影はない。

「誰れもおらぬ。気のせいではないか。志乃
さん」

と、大作は唇に微笑を漂わした。だが、志
乃の表情に現われた恐怖は、まだ消え失せて
いないのである。

「でも、確かに私は見たのです——」

「ははは——志乃さんは名主の話が心にかか
っているのだな。心配はいらぬ。拙者がつい
ている」

大作は豪放に笑うと、また足を返して進み
はじめた。

林を抜けると、胸をつくほどの急坂があつ
た。大作は志乃の手を握ると、疲れを知らぬ
足取りで登るのであった。

灼熱した真紅の太陽が、蒼くかすんで見え
る西方の山脈に消える頃、大作と志乃は地獄
ヶ岳の下方にある、深い谷間にたどりついた
のであった。

石の間をくぐる清流で咽喉をうるおし、汗
に濡れた顔を拭うと、谷間には紫色の宵闇が

掩いかぶさろうとしていた。谷の両側はそり立つ断崖で、その上方に地獄ヶ岳が静まって黒く頭をもたげていた。

空の残照が消えかけると、山の冷氣が浸み
るようである。

「寒くなって参った。暗くならぬうちに、拙

者は枯れ枝を集めよう」

「大作さま、私——こわい」

「今からそれでは困る。だから、拙者は残ってはどうかと申したのだ」

大作は厳しい表情で言った。志乃は泣き出しそうな、顔をそむけながらかばそい声で答

えた。

「私——ここで待っております」

「すぐに戻る」

と、言葉を残して、大作の足音が消えると志乃はぞつと体をすくめた。森沈たる夜気の中に、何者かの眼が光っているように思えるのだ。林を通り抜ける時に見た人影が、ずっとまわりついている感じで、志乃の心から失せないのであった。

その時——

かすかではあるが、谷間の清流を横ぎる音が聞えたのである。

はっ、として志乃は息を詰めて眼をこらした。十間ほど向うにある岩の翳に、黒い姿がうずくまっているのだ。それは、人か獣かは判らなかったが、こちらをうかがっている事だけは確実であった。志乃は恐怖が全身を硬直させて、胸の鼓動をはやめるのを覚えた。

志乃はこわばった指で、腰に帯びている脇差の柄をしっかりと握りしめた。掌にねつとりと脂汗が噴いた。

そのうずくまった影は動かなかった。せせらぎの音が、志乃の動悸を静めるように響いている。

「誰れ、誰れです——」



耐らなくなった志乃は、思わず震える声を投げた。影は人間ではないのか、答えがないのである。

志乃の背後から、別の足音が近寄って来るのだ。大作である。それと同時に、岩の暗がりには潜んでいた影は、風のはしるように消えてしまっていた。

「志乃さん、丁度よい洞穴を見つけた。そこへ参ろう」

「大作さま、岩の翳に何かがいたんです。こわい——」

しがみついた志乃であった。大作の表情も引き緊まっていた。

「うむ、拙者も見た。洞穴に隠れよう。ここは危いかも知れぬ」

「はい——」

大作は志乃を抱えるようにして、暗くなった谷を、音を立てぬように注意して歩く。何者かに尾行られていると感じているのだ。志乃の柔かな体の重みが、大作の腕にかかっている。大作は無言のまま、しっかりと志乃を支えて、見つけ出した洞穴に戻ったのであった。

三

山は恐ろしいほどの静寂に包まれていた。

夜空には悪魔の爪のような三日月が、蒼い光茫を放って浮いている。時々、化鳥のように、夜鴉が不吉に鳴くのであった。

洞穴の奥に志乃を寝させると、枯れ枝を燃やしなから、大作は刀を肩にして入口に座った。

ちよろ、ちよろと赤い炎がゆれて不気味である。

押えつけられるような圧迫感に、志乃は横になったまま眠れなかった。大作が寄ってきてくれると思っても、初めて味合う深山の夜が、志乃のかよわい心を落ちつかせないものであった。

昼間の疲れが、大作の臉を重く垂れさがらせた。わずかなまどろみ、大刀にかけた指は力を失ってすべり落ちた。

その直後、ささっと落葉を踏む足音がかなり合って響いたのである。大作は睡魔に捉われた頭を、はげしく左右に振って眼をひらいた。わずかな月の光を受けて、幾つかの人影が這うように近寄って来るのだ。大作は立ちあがると、大刀を腰にして洞穴の外に走り

出た。志乃を彼等の眼から、隠そうとする意図である。

いずれも屈強な山男であった。長髪を肩の辺りに垂らし、短かい筒袖の着物に、たっつけ袴のようなものをはいている。腰には太身の山刀を帯びている。

「おぬし等は何者だ。拙者は薬草を採りに来ただけだ。危害を加えられる覚えはない」

だが、相手は無言である。そして、猫のように眼を光らせるだけであった。

一斉に山刀が抜かれた。異様なかまえてある。大作も鞘を払った。

躍りかかった一人を峰打ちで倒した。山男達の動きは風のように早い。大作は攻撃を防ぐだけが精一杯であった。

「あれ——大作さま」

洞穴から志乃の悲鳴がほとばしったのである。

「どうした、志乃さん——」

思わず刀を引いて、洞穴に戻ろうとした大作の背に、頭上の枝から一人が飛びついたのだ。

「なにをするっ、放せ」

山刀を捨てた男達が、大作の上に折り重なる、大作の刀が手を離れて転った。

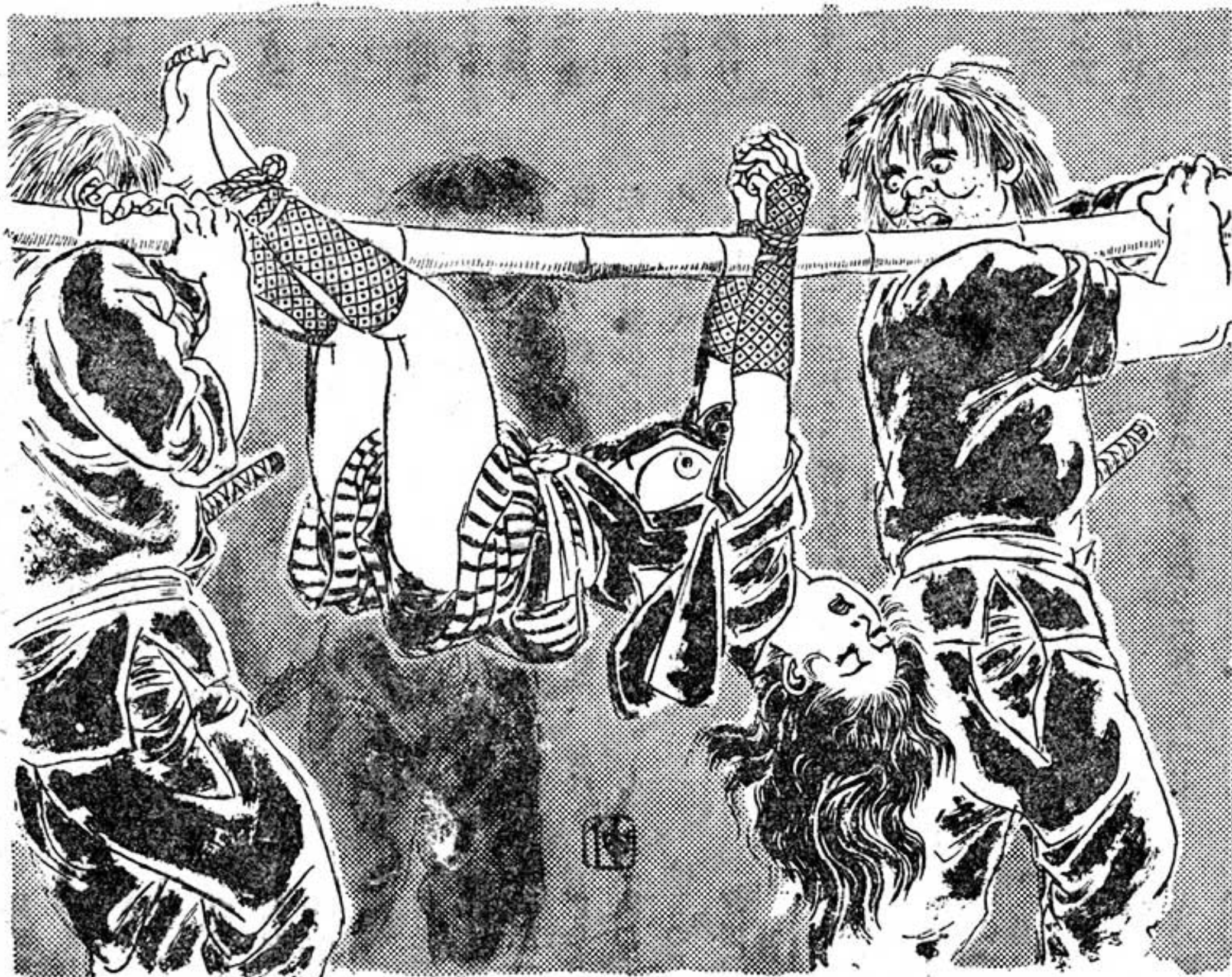
洞穴の中で、志乃は必死の抵抗を続けていた。だが、二人の山男を相手にしては勝ち目がなかった。振りまわしていた脇差は、たちまち叩き落されて、組み伏せられてしまったのである。

大作は後手に藤蔓のような縄で縛りあげられていた。男達はまだ無言である。

「縄を解け、拙者は縛られる理由がないっ」叫んだ大作は、洞穴から運び出された志乃の姿に、愕然として息を呑んだ。

志乃は両手で抱くように、ふとい孟宗竹に括りつけられている。両膝と両足首も竹に固縛されているので、志乃はぶら下げられた恰好である。丁度、獣の四つ足を一つに括って吊り下げる、あの縛り方に似ていた。

野袴はたくれあがって、なめらかな膝も、雪白の両腿までが覗いている。袖は肩までめくられて、二の腕が付根まで剥き出されているのだ。



竹は二人の肩にかつがれてしなり、志乃の黒髪は地に垂れていた。ぶら下げられた痛みが、腕と脚に集中して眼もくらみそうであった。

「志乃さんっ」

絶叫して立ちあがった大作は、縄を引き戻されて転されてしまった。

「大作さま——」

志乃の必死の声も空しいばかりである。

「歩くんじやっ」

はじめて頭立った山男が口をひらいた。

ゆら、ゆらと孟宗竹に縛りつけられた志乃の体がゆれて、先に進み出していた。大作も腰を蹴り飛ばされ、縄を引き絞られては、仕方なく意に従うより方法がなかった。

まるで猿のように、谷間にそそり立つ絶壁を、無言の行列は登っていった。

夜空に黒い姿を横たえている地

獄ヶ岳をめざしているのである。

手首に喰い入る縄、骨の軋むような腕の痛み、さらに羞恥をかき立てる自分の姿に、志乃は氣も遠くなりそうであった。

「——ううっ——ううっ」

と、耐えられなくなった苦悶のうめきが、志乃の震える唇からもれた。

「志乃さん、しっかりするんだっ」

後から呼びかけた大作は、したたか縄尻で首筋を殴られて息が詰まった。のめりそうになる大作を、無慈悲に引きずりあげるのだ。さすがの大作も、苦痛に倒れそうであった。半刻も歩いたであろうか。

志乃はほとんど氣を失ったように、胸のふくらみをあえがせて、がっくりと顔をのけぞらせてゆれていた。

縛された体を、よろめきながら運ぶ大作。ぜいぜいと咽喉を鳴らし、脂汗をべったりと噴いていた。

やがて——

地獄ヶ岳の頂きに近く、かなり広く平らな地点に行列は出た。幾つかの丸太小屋が建っている。樹間からはちらちらと炎のひらめきが見えた。

四

広場には幾つかの篝火が燃え盛っていた。さまざまな年齢の男女が、どこからともなく、数十人も現われると、異様な雰囲気が出るのであった。

孟宗竹からおろされた志乃は、改めて大作と同様にぎゅぐゅと後手に縛り直された。すでに、志乃はぐったりと地面に横たわったままである。

二人を取り巻いている群れは、いずれも双眸に憎悪と殺氣を漲らせているだけで、唇は固く引き締められていた。重苦しい重圧感の中に、篝火の弾ぜる音だけが響くのだ。

やがて、

「長が参られたぞ」

と、声が伝わる。群れを割って、現われた男を、大作は凝視した。

年も判らぬほどに老いた男であった。肩を掩った頭髪も、胸に垂れている長髯も、雪を頂いたように白く、その体は枯木を思わせるほど骨張っていた。腰には野太刀を帯びている。

「お前だな。我等の秘密を探りに参った男じやな」

長はしわがれた声を響かせ、大作と志乃をゆっくりとねめまわした。

「違う、拙者はそのような者ではない」

「では、なぜ地獄ヶ岳に近寄るのだ。里人は地獄ヶ岳に登るなど申した筈じゃ」

長の双眸に光っている殺氣に、大作は慄然たるものを覚えた。

「拙者は二年前、この山で消息を絶った田部一斎先生の事を調べに参っただけだ。おぬし達には関係のない薬草を求めるのだ——」

「田部一斎——？」

ぎらりと長の眼が異様な輝きを帯びると、「訊ねても正直には口を割るまい。拷問にかけるのじゃ」

背後の男達に命じたのである。

「弥兵次、先ず女を責めい。さすれば、男も耐らずに吐くのじゃ」

その声に大作はわめいた。

「なにをする——」

続いて志乃の鋭い悲鳴がほとばしった。

「あれえ、大作さま。助けてえ」

縛められた身で何が出来よう。大作は縄尻を取られたままあばれるのみである。

志乃は男達のまつわりつく手に悶えた。いったんは縄が解かれたのだ。しかし志乃の両



甲

手は自由にはならなかった。志乃は地面に押しつけられ、両手を掴まれてもがいた。

ずるずると着物の襟が割れていくのだ。

「いやっ、放して」
思わず大作は顔をそむけた。

「あ、あれえ——」
と、志乃の羞恥の叫びが夜気を震わせた。

白いふくよかな裸身が、わずかに脚胖をまとっただけの姿でくねっていた。

「弥兵次、蔓責めにかけるのじゃ」
すかさず、長の命令が飛んだ。

「はっ——」
弥兵次は一人に指

図をする。丸太小屋に躍りこんだ男は、細く白い強靱そうな蔓を手にして戻った。

「ふふ、こたえるぞ。蔓責めはな」

と、弥兵次が昂奮に眼を輝かせ、唇を歪めて吐いた。

「い、いたい」

引っ掴まれて、背に折りまげられた手首に蔓はぎりぎりとなみついた。すべやかなうなじをまわり、蔓はふくよかな乳房を締めつけて絞りあげられる。重ねられた指が、せつなく反り返った。

許婚である大作にも見せた事のない裸身を剥き出されて、志乃は羞恥の極に達した。

「ああっ——」

と、絶え入るような声であった。弥兵次の指は休みなく動いて、志乃の手と脚から、手甲と脚胖をはぎとる。志乃の肌を掩うものは一糸もないのである。

「ゆるして、ゆるして下さいまし」

「ふふふ、まだ泣き言は早い」

弥兵次は不気味に嗤った。新しい蔓が太腿を三巻ほどぎゅちりと締めつけ、残りは足首を括り合せる。

「聞くがよい。この蔓は水を吸えば恐しい勢いで締まる。肉に喰いこむ痛さは耐えられぬ

のじゃ。弥兵次、水をかけい」

「やめろ、違うのだっ」

大作の絶叫も空しかった。

さあ、と白く光りながら、弥兵次の傾むけた手桶から、水が志乃の裸身に流れ落ちたのだ。息を詰めて大作は、志乃の水玉を弾く柔肌を凝視した。

「ああ、く、くるしい——」

水を吸い取った蔓が、奇快にもじわじわと肌に喰いこんでいくのだ。乳房がぶっくりとふくれあがり、太腿は無惨にもしびれる。それよりも、首にまわっている蔓が、じんわりと締まる苦しさに、志乃の豊麗な裸身がのたうった。体中がぎりぎり痛む。

「ううっ、うっ——」

「お前達は公儀隠密じゃろうが。誰れの命を受けて、地獄ヶ岳の秘密を探りに参った。白状せぬか、女はあの通り苦しんでおるのじゃぞ」

長は大作の前に立った。大作は力の限りあばれ続ける。弥兵次の拳が唸りを生じて頬を叩きのめすのだ。

「違う、拙者は隠密のような者ではない。頼む、志乃の縄を解いてくれっ」

「素直に吐けば許してもやろう」

冷酷な長の声であった。

「ううっ、く、くるしい」

凄まじい苦痛に、志乃は弓なりにのけぞった。黒髪が海藻のように波を打ち、美しい眉根は必死に屈辱をこらえていた。

呼吸が苦しくなり、志乃の意識が混濁したのだ。くねっていた裸身が動きをとめ、志乃はがっくりと悶絶したのである。

五

閉じた瞼の裏が明るくなり、志乃はゆっくりと眼をひらいた。

屋根の隙間から流れ落ちた陽光が、志乃の顔を照らしていたのである。そこは黒くすすけた、粗末な丸太小屋の床であった。

志乃は体を動かそうとして、昨夜と同じように、縛りあげられている事を、一糸もまともぬ裸身で知らねばならなかった。蔓はいつものまにか乾いて、あの凄まじい苦痛は残っていなかったが、背に重ねられた手首も、括りつけられた太腿も、知覚を失ったかのようにしびれていた。

「ふふ、気がついたな」

と、低いだみ声が聞えたのである。床に敷いた毛皮の上に、あぐらを組んだ弥兵次が、

濁酒を飲みながら、片肌をぬいで志乃を見詰めているのだ。たくましい胸は、剛い胸毛に掩われていた。

そのねばりつく視線に、素っ裸をさらされたと思うと、志乃は羞恥に肌を染めて内腿を閉じ合せた。

「大作さまは——？ 大作さまはどうなったんです」

「男か、奴は吊り責めにかけてある」

弥兵次はゆっくりと濁酒を咽喉に流しこんだ。そして、酔いに火照った顔を歪めて、ふらりと立ちあがったのだ。

「お前は俺達の領域を犯したのだ。その罰にうんと苦しめてやる」

志乃は新しい恐怖に息を呑んだ。乳房のふくらみがあえいでいる。弥兵次はそれを見てにやりと嗤った。

「あれっ」

と、志乃の唇がわなないた。がっしりと骨張った男の掌が、柔かな胸のふくらみを掴んだのである。身をよじろうとする志乃の顔の前に、弥兵次は黒ずんだ素焼の大きな壺を引き寄せたのだ。

「こうしてな。この蜜を乳首にぬる——」

低いつぶやきをもらして、弥兵次は壺に指

を突っこんだ。指の先には茶色の蜜が、ねっ
とりと光りながらからみついている」

「や、やめて——」

赤い毒が震えた。丹念に乳首にぬりつけら
れる蜜。それよりも、指先になぶられる乳房
の羞恥が、志乃の肌を熱くするのだ。

喰いこんだ蔓に、くびれあがった乳房に、
ねっとりと異様な匂いを放つ蜜が、べたべた
とぬられたのである。

「ふふふ、これからが面白い踊りになる」

みだらに笑った弥兵次。小屋の奥からもう
一つの壺を持って来た。中からつまみ出した
ものを、弥兵次は志乃の裸身にばらばらと落
したのである。

「あ、あれっ」

志乃のきしるような悲鳴があがる。ふくよ
かな裸身に這っているのは、志乃が見た事も
ない大きな赤蟻なのだ。赤蟻は蜜の匂いを求
めて、そろそろと乳首に近づく。

「い、いや——」

志乃は体を返して赤蟻を落そうと試みた。
しかし、後手の縄尻も足首の蔓も、志乃の裸
身をぎゅちりと床に固定しているのである。
弥兵次の意図を悟って、志乃は恐怖に慄然と
した。

弥兵次はゆっくりと手をのばし、視線を志
乃に落したまま、濁酒の木碗を唇に運んだ。

「あっ——いたいっ」

志乃が体を弓なりにくねらせた。赤蟻は甘
い蜜の香りを放つ乳首に歯を立てたのであつ
た。鋭い痛みが連続的にふたつの乳房を襲う

のだ。赤蟻は群がって来る。

感覚の鋭敏な乳首を、噛みつくす赤蟻に、
志乃はうめきながら悶えた。それはあまりに
も、おぞましい拷問であった。

「蟻責めに耐えた者はおらぬ。気が狂うて泣
きわめいてな」



と、志乃の苦痛を楽しむように弥兵次が言った。

蟻壺よりは、赤蟻が幾匹か這い出して、志乃の乳房によじのぼる。この赤蟻は責め道具として飼っているのに違いないのだ。ぬりたくられた蜜は、赤蟻をおびき寄せる特異な匂いが秘めてあるのであろう。

それにしても、乳首にまつわりついた赤蟻の執拗さは、志乃をあえがせるに充分であった。

「ひ、ひいっ、ゆるして、ゆるして——」

きれぎれの声を振り絞って哀願する志乃。縛められた豊麗な起伏がうねる。白い輝きを帯びた柔肌が、うっすらと脂汗を滲ませて苦悶するのだ。

紅唇からせつない息がもれる。ひらいた鼻腔が気ぜわしくなる。振り返った志乃は、腰を浮かせて悶えるのであった。

「ああうっ、や、やめてっ」

顔を上げしく左右に振る志乃。乱れた髪はまろやかな肩の辺りに散って凄艶である。閉じ合された雪白の太腿が、男の視線にさらされて、悲しく震えるばかりであった。

「お前の体中に蜜をぬってやろう。その鼻の穴の奥までな。蟻は遠慮なくお前の体を喰い

破る」

陰惨な弥兵次の声音である。志乃はもう生きた心持すらしない。床の上に木枕をほうり出すと、酔いにふらつく足を踏みしめて、弥兵次が立ちあがったのだ。

蜜の壺に両掌を入れて、志乃の裸身にぬりたくろうとした時である。

「弥兵次、長が呼んでおるぞ。早く行けい」

ふといだみ声が小屋の外から響いたのだ。

弥兵次は残念そうに顔をしかめ、志乃を見下ろすと、諦めたように手をぬぐった。

「ちっ、運の良い女だ」

いまいましてに咥くと、弥兵次は乳房に群っている赤蟻を、蟻壺につまんで落しはじめたのである。

苦痛が去ると、志乃はがっくりと動かなかった。わずかに、胸のふくらみと、ふくよかな腹をあえがすだけである。

弥兵次は太腿を蹴りつけると、荒々しい音を立てて、小屋を出たのであった。

六

真赤に灼けた夕陽が、空いっぱい血のように染めながら傾むいていた。

外は残照で明るかったが、小屋の中には闇

がもうよどんでいる。炉にくべられた枯れ枝が炎を噴きあげ、灯りの役目を果たしているのだ。

天井から吊り下げられた大作は、固く喰いこんだ縄目に知覚のすべてを失われていた。だが、鍛えぬいた体が、混濁する意識を押えているのであった。

小屋の中には、白髪白髯の長と、惨忍な喜びに憑れている弥兵次の二人が黙念と立っている。もう一人、床に転っている女がある。

志乃であった。

志乃は素っ裸を後手に厳しく縛りあげられているのだった。蟻責めにぐったりと疲れた肌は、ぎりぎり喰いこんだ縄目にもう抵抗を忘れたかのように動かなかった。

豊かな黒髪が床に散って、白い全裸の体を浮きあがらせて絵のように美しい。

一条の細く黒い縄が、志乃の頬をくびれさせて、紅い花びらのような唇を割っているのだ。志乃に舌を噛まれぬように、長が弥兵次に命じたのである。志乃の白い歯は、縄の間にはさんで、噛み合す事も出来ないのだった。

「大作とか申したのう。田部一斎の最後が知りたいかの」



と、長が大作の面上に視線を注いだ。

「おのれ、貴様達が一斎先生を殺したのか」

血を吐くような大作の絶叫を無視するかの様に、長は白髭に掩われた唇を歪めた。

「その通りじゃ。我等は近づく者の命を絶てとの先祖の遺言によって、地獄ヶ岳に足を向ける者に死を与えるのじゃ。一斎は地獄沢の松の枝に吊したわ。屍は鴉がついばんで、十日たたぬうちに白骨となる。お前も地獄沢に生きながら吊してやるのじゃ」

る。師を殺した敵を前にしながら、一指もむくいる事のできぬ無念さが大作の胸を灼きつくすのだ。

「貴様等は何故隠密を恐れるのだ」

と、大作は鋭い語調を投げた。長は冷酷な双眼に、はげしい光を浮べたのであった。

「どうせお前は死ぬ身じゃ。我等の秘密を情によって教えてやろう」

長は傲然と胸を張って大作を凝視して、重々しく口をひらいた。

「我等の祖は、真田十勇士の一人たる猿飛佐助じゃ。真田幸村公が元和元年茶臼山にて討死になさる前夜、徳川を滅さんが為に、猿飛佐助の一族郎党を戦場から落したのじゃ。猿飛の党はかくしてこの山に住みついた。儂は八代目猿飛佐助じゃ」

意外な長の言葉に、大作は捕われの身を忘れて息を呑んだ。猿飛の一族ならば、明らかに豊臣の残党である。公儀隠密を恐れるのは当然であった。

「我等が一党の敵は徳川幕府じゃ。機至らば討幕の狼火を挙げん所存——」

長の言葉は熱を帯びて続いた。

「馬鹿な事だ。幕府の政道はもはや動かしがたい。無謀な夢だぞ」

「黙れっ」

大作の言葉に激怒した長であった。枯木のような全身がぶるぶると震え、妄執と憎悪に憑れた双眼が妖光を噴いた。

「おのれ等をなぶり殺してくれ。弥兵次、女を木馬にかけい」

「長、この男の前で、女を責めぬきましょうぞ」

嗜虐に燃え狂った弥兵次の相貌であった。

「卑怯な事をするな。拷問にかけらるなら拙者を責めろ」

大作は志乃の危機を悟ると必死に叫んだ。弥兵次は小屋の中隅に置いてある異様なものを引きずり出して来たのである。

それは四本の脚をつけた子供の乗るような乗馬である。違う所は木馬の背が、鋭く削られて三角形になっているのだ。この木馬に乗せられると、三角形の背が肉の中にぎりぎり喰いこむ寸法であった。女を責めるもっても効果的な拷問具である。

「弥兵次、遠慮はいらぬ。我等の敵じゃ」

と、長はゆっくりと身を退いて、弥兵次をうながした。

「長、儼に任してもらいたい」

弥兵次は答えると、ぐったりと横たわって

いる志乃の、縛り合された手首を掴んでぐいと引き起した。

「ううっ」

志乃は顔をひらいて、眼の前に据えられている木馬に気づいた。おぞましい恐怖が、可憐な志乃をさいなむのだ。

「ふふ、馬に乗るのだぞ。耐らない気持のする馬にな」

「あうっ——」

と、唇に噛まれた縄を鳴らして、志乃は悲鳴をあげて逃げようとした。とげとげしい木馬の背が、屈辱の涙に濡れた黒い瞳に映るのだ。舌を噛み切ろうにも、齒の間に異様な感触を拵けて、喰いこんでいる縄が許さないのである。

「志乃——」

大作の声を聞いて、志乃の眼尻に熱い涙が糸を引いて垂れた。どうにもならない絶望が志乃の胸を黒く塗りつぶす。

弥兵次の手がまるい肩に指を立てた。

七

燃えあがる炉の炎が、白裸の肌を赤く染めるのであった。

「ううっ」

と、志乃の耐えられぬうめきがもれる。

志乃は両腿を拡げて、木馬に乗せられているのだ。両膝はしっかりと木馬の腹に、固縛されているので、もがけば平衡を失って落ちるのであった。

「どうだ。男に抱かれるよりはよい心持がするであろう」

悪鬼のような弥兵次である。素っ裸の木馬責めは、生娘にとって余りにもおぞましいものであった。

「こうすれば、なおよい」

なんとという無惨。すんなりとした志乃の足首に、弥兵次は大きな岩塊を吊り下げたのである。

「ひい、ひい——」

志乃は上体をのけぞらせ、顔を振って悶える。背に括り合わされた両手の指が、せつなく反り返った。縄にはさまれて、ぶっくりとふくれあがった乳房のあえぎ、白磁の肌にはたちまち脂汗が噴きあがる。

鋭くとがった三角形の木馬の背が、割りひらかれた両腿の付け根に、恐しい勢いで喰いこむのだ。両足首に吊り下げた岩塊の重みの為である。

柔かな肉の丘をさいなむ痛みが、志乃の脳

裡に突き刺るのだ。羞恥よりも苦痛の方が烈しく襲いかかるのであった。

「くくうっ、くうっ」

志乃は耐らずに、咽喉の奥から嗚咽をもらして、唇の間にくびれこんでいる縄を噛むのである。ぬらぬらと唾液が、唇の端から顎に伝わる。

ねっとり噴き出す脂汗、生娘の凝脂に光って、弥兵次の鼻腔を芳香がくすぐるのである。

「ひひっ、もっと苦しめ」

弥兵次が弓の折れを志乃の体に襲いかからせた。

上体を傾むけて、弓の攻撃を避けようとした志乃は、股間に喰いこむ木馬に仰向かねばならなかった。

「ぐうっ」

絞り出る異様な悲鳴。苦悶に瞳かれた黒いつぶらな瞳が、涙の玉をいっぱい浮べている。長い睫毛がせつなく震えていた。

鼻腔がふくらんであえいでいる。

やがて、木馬責めに屈した志乃の体が、がつくりと前にのめった。

「弥兵次、女が気を失うては面白い。木馬から下ろして、縄を解いておけ。眼が覚め

たら責め続けるのじゃ」

と、長が傍らから弥兵次に命じたのであった。

縛めを解かれて、ぐったりと動かぬ志乃をほうり出して、長と弥兵次は小屋から外に出たのである。宴でもひらくのであろう。

案の定、一刻あまりたって戻った弥兵次は酔いに真赤な顔をしていた。かなり呑んだらしく、足元はふらつき、眼は濁りきっているのだ。

「まだ、正氣に戻っておらぬな——」

酒臭い臭と共に吐き出して、床の上に崩れ落ちた弥兵次は、さすがに耐らなくなってゆらりと倒れた。

その時、気を失っている筈の志乃が眼をひらいたのである。

見下ろしている大作が息を詰めた。

そろりと志乃の手が、弥兵次の腰間にある山刀にのびたのだ。酔いにつぶれた弥兵次は気がつかない。

志乃の指が柄を握った。するりと刀身が引きぬかれた。

「おのれっ、なにをするっ」

さすがに弥兵次は気配を悟って起きあがろうとした。

はっとして大作が色を失った。

「ううっ」

必死の勢いで体当りした志乃である。山刀は深々と弥兵次の脇腹をえぐったのだ。弥兵次は血を噴いてのけぞった。

「大作さまっ」

志乃はよろめきながら、木馬にすがって立ち上った。

「志乃さん、よくやった。縄を切ってくれ」

先刻までおぞましく責められた木馬に、志乃はよじ登って大作の縛めを切った。

裸身をさらしている羞恥を忘れて、志乃は恋しい大作の胸にすがりついて嗚咽をもらしたのだ。

「大作さま」

大作はしびれた腕に力をこめて、志乃の裸身を抱えると、右手に山刀を握った。

「よし、小屋に火を放って逃げよう。奴等の眼をくらますのだ」

言い捨てると、大作は燃えている枯れ枝を床に投げた。やがて、いぶりはじめる。

大作は自分の着物で、志乃の肌を掩うく、暗い樹間めがけて走り出したのであった。

地獄ヶ岳の一隅に、闇を裂いて炎が立ちのぼったのは、暫くたってからである。

原

稿

集

募



★本誌と読者との間をより以上緊密にし、愛読者の「裏窓」としてますます発展する為、大巾に読者に頁を開放することに致しました。

★他に類例のない雑誌の形態を作り出すためにも、愛読者の皆様の誌上への御参加をお待ちします。

★読者随筆★ (原稿用紙) 5枚、10枚まで

本誌に適する、風俗、社会、身边雑記、感想、見聞記等の随筆。思いついたままを書いてお送り下さい。原稿料は一枚百五十円。

★告白体験記★ (四百字詰) 20枚前後。

真実の告白日記、得がたい体験といったものを求めます。本誌むきの原稿をどしどしお送り下さい。原稿料は一枚につき百五十円。

★創作★ (四百字詰) 25枚まで。

S、M、その他を扱った作品をお寄せ下さい。妖気ただよう、異色あるものを募ります。稿料は一枚につき百円～二百円。

★読者短評★ (四百字詰)

1枚～3枚程度

本誌最近号に対する批評をお書き下さい。全般的な批評や、個々の作品、挿絵、編集のあり方等について、いろいろ御希望や、良かったと思ったことなどがあると思います。が、真面目な短評をお寄せ下さい。

裏窓 十月臨時増刊号

第五卷 第十一号

定価九十円・送料十二円

◎応募原稿はそれぞれの種別を朱書すること
◎原稿は第五種郵便になりますから、百グラム毎に八円の郵券を貼り、開封して投函して下さい。
◎原則として、応募原稿はお返し致しませんから、必要ある場合はコピーをとっておいて下さい。

◎原稿の送り先は左記の通りです。

東京都中野局区内江古田一の二三〇二

久保書店内 裏窓編集部

印刷 昭和三五年十月十日
発行 昭和三五年十月十五日
編集人 須磨利之
発行人 山田忠雄
印刷所 東洋印刷株式会社
発行所 株式会社久保書店

東京都中野区江古田一ノ二三〇二
電話中野・(381)六九八〇・一三八八
振替口座・東京 一〇七五六番